ハイスクールD×D～英雄の力を使う者～

アゲハチョウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼、藤丸アスカは先輩である兵藤一誠が殺される現場を目撃してしまい殺されかけたところで彼の神器が目を覚ました。

これは英雄の力を持った少年のＦａｔｅ―運命―の物語。

設定よりサーヴァントの数は徐々に増やせていけたらと思っています。

目次

設定 …… 1
1話 …… 10
2話 …… 20
3話 …… 30
4話 …… 40
5話 …… 48
6話 …… 55
7話 …… 65
8話 …… 78
9話 …… 92
10話 …… 103
11話 …… 114
12話 …… 126
13話 …… 136
14話 …… 153
15話 …… 163
小話 …… 182
16話 …… 191
17話 …… 198
18話 …… 208
19話 …… 219
20話 …… 230
21話 …… 242
22話 …… 250
23話 …… 261

設定

オリ主設定
藤丸（ふじまる）　アスカ
原作主人公である兵藤一誠の後輩。一誠とはおさななじみで元浜と松本を含めた三人の行動にはいつも頭を悩ませていた。
衛宮士郎を少し身長を低くして、もうちょっと童顔にした感じの見た目です。
両親は長期の海外赴任でおらず現在は一人暮らしをしている。
悪魔の駒（イービル・ピース）は一誠が兵士（ポーン）の駒七個で、アスカは変異（ミューテーション・ピース）の駒が一つで転生悪魔へ。
クラスは小猫と一緒で入学数日で同学年から三年の先輩たちに可愛がられている。
オリジナル神器
使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆
能力
形状はガントレットになっている。
ＦＧＯに登場する七騎とアベンジャー等と言ったクラスのサーヴァントの能力と宝具が使えるようになる。サーヴァントには意識はあるがあまり登場しないかも。

最初から複数同時には使えないので次第に使えるようにしていきたいと思います。

禁手（バランス・ブレイカー）

これに関しては後々に考えていきたいと思います。

登場するサーヴァント

・セイバー

ジークフリート

『ニーベルンゲンの歌』で語られる龍殺しの英雄。邪龍　ファブニールの血を浴びたことによって強固な肉体へと変質してしまったが、背中だけは血を浴びることなく人間のままだった為、そこを突かれて殺された悲しき英雄。

能力

セイバーのクラスに相応しいほどの高い剣技と高い防御力を兼ね備えている。不死身である肉体を活かし、攻撃を貰うことを前提とした戦法である。

宝具

『幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）』

・対軍宝具

・聖剣と魔剣両方の属性をもつ黄昏の剣

・原点である魔剣　グラムの性質を持っている

・キャスター
ギルガメッシュ
傲慢な王としてではなく、冥界から帰還して王として成長した姿「賢王」
能力
魔術師としての格好をしているが純粋なキャスターとしての能力が低いギルガメッシュ。だが、宝物庫に在る魔杖を用いればAランク相当の魔具作成能力をもっている。そのため神代の魔術もそれらを使えば扱えるがなれていない。
アスカはこの能力と宝具が扱える。

宝具
『王の号砲（メラム・デインギル）』
・対軍・対城宝具
・ウルク城塞からの遠距離爆撃
・ギルガメッシュ本人だけではなく神代を生きた民たちの総力までも集結した驚異の宝具だ

・アーチャー

子ギル

若返りの薬によって子供になった英雄王　ギルガメッシュ。大人の時と違いその性格は聖人君子に近いものであった。

能力

基本的に彼の宝物庫の中にある天の鎖を使った攻撃が主になっている。理由は宝具として王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）が割り当てられているからと考えられる。

アスカはこの能力と宝具が扱える

宝具

『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』

・対人宝具

・空間を繋げて宝物庫の中にある道具を自由に取り出すことができる。

・大人の時とは大きく違い射出の量は少ないが弱点をついて射出することに長けている

・ランサー

エルキドウ

なんにでも変形する粘土細工だが、基本的には人形である。ギルガメッシュとは友として接したり、戦った経緯がある。

能力

肉体そのものが神が作り上げた生きた宝具であり、ウルク最強の兵器であった。自らの肉体を槍、斧、盾、獣と言った万象へと変化させて戦う。更に森や大地に語りかける能力を持っており、一定エリアを支配下におくことで枝葉を急速に成長させ天然の結界をつくったり、足を同化させることにより周囲の砂を体の一部のように操りそれらを使って槍や斧と言った武器に変形させて攻撃できる。また、気配探知に優れておりどんなに遠くにいる敵や川などを探すことができる。

アスカはこの能力と宝具が扱える。

宝具

人よ、神を繋ぎとめよう（エヌマ・エリシュ）

・対粛正宝具

・自身が神造兵器と化す能力

・アラヤ・ガイアの〝抑止力〟を自身に流し込み射ち放つ、天地を貫く巨大な光の槍となる

・ライダー

マリー・アントワネット

王権の象徴として祝福され、愛されて生きてきたが時代の流れによって王権の象徴として憎まれ貶められ死に果てた。儚い貴婦人。

能力

魅惑の美声による歌声魔術による攻撃。

宝具

『百合の王冠に栄光あれ（ギロチン・ブレイカー）』

・対軍宝具

・ガラスの馬に乗って敵へと攻撃する

・アサシン

ジャック・ザ・リッパー

イギリス全土を恐怖のどん底に貶めた殺人鬼。その正体は無惨にも殺された子供たちの怨念が形になったものだった。

能力

魔力供給なしでも一線級の戦闘力を所持している（殺している間だけ）。
気配遮断はできるが攻撃の際はその効果が薄れてしまう。

宝具
『暗黒霧都（ザ・ミスト）』
・結界宝具
・宝具の由来は産業革命後のロンドンを包んだ硫酸を含んだ霧の災害
『解体聖母（マリア・ザ・リッパー）』
・対人宝具
・自身の『ジャック・ザ・リッパー』としての逸話が宝具となったもの
・『対象が女性もしくは雌であること』、『霧が出ていること』、『夜であること』と言ったこの三つの条件が揃えば凶悪な効果を発揮する。（霧に関しては自身のもうひとつの宝具で代用可能）
・バーサーカー
ヘラクレス
十二の試練を乗り越えた屈強な英雄。試練を乗り越えたことにより神々に迎えられた英雄である。

能力

圧倒的な怪力と驚異的な体躯に似合わぬスピードをもつ為白兵戦では敵なしといわれている。

狂化のため理性がなく使える宝具など限られているがそれでもなお無類の強さを誇る。

宝具

『十二の試練（ゴッド・ハンド）』

・対人宝具

・生前からの呪いでもある

・十二の偉業を成し遂げた逸話がそのまま宝具となったもので生半可な物では決して傷がつくこともなくまた治癒力も高くなっている。

『射殺す百頭（ナインライブズ）』

・種別は不明

・生前の『ヒュドラ殺し』の偉業の際に使用した弓術で、それを戦斧にもって表現したもの

・本質は攻撃がひとつに重なるほどの高速の攻撃である。

最後になぜこの三人なのかと言うのは単純に私がゲーム内で持っているキャラクターだからです。

※変更と追加しました。ご了承下さい

1話

どうも初めまして僕の名前は藤丸アスカ。駒王学園の一年生です。

「おーい、アスカー！」

「あれ、いち兄？今日は随分早いね」

この人は僕の幼馴染み？でいいのかな？兵藤一誠。小さい頃からよく遊んでいた。

そして、学園でも有名人である。悪い意味で。女子更衣室を覗いたり、卑猥な話を堂々とするなどといった行動を松田、元浜先輩方と合わせて変態三人組って言われてる。

「今日はいつもの二人と一緒じゃないんだね」

「松田と元浜のことか？あの二人なら先に学校行ってるぜ」

「ふーん。で、なんでいち兄は朝からそんなに機嫌がいいの？また、厭らしい物でも手に入ったの？」

そう、機嫌がいいのだ。もう気持ちが悪いほど顔がにやけている。

「くふふ、なんだ知りたいのか？」

「な、なんだよ。気持ち悪いぞ」

「そうか、そうか。知りたいか」
「話すら聞いていない」
「実はなぁ～」
「あ、やっぱいいや。興味ないし」
「おい！」
　いや、実際興味ないし。まあ、予想はつくしね。
「どうせ、彼女ができたとかでしょ」
「な、なんでそれを!?」
「昨日、たまたまその瞬間を見ただけだよ」
　校門の前であんな堂々と告白が行われていたら嫌でも目に入るからね。
「おはよう、藤丸くん」
「おはようございます、先輩」
「藤丸くん、今日勉強教えてよ」
「また、ですか？まあ、別にいいですけど」
　上から先輩と同級生から挨拶された。
「くっ、お前は相変わらずモテモテでいいよな！」
「は？何言ってんの？俺がモテるわけ…」

「おはようございます、藤丸くん」
「おはよう、塔城さん」
　さっき挨拶してきたのはその容姿から学園のマスコット的存在である塔城小猫さん。クラスも一緒であまり話す人じゃないけど僕にはそれなりに声をかけてきてくれる。なんでだろう？
「あのー、小猫ちゃん。俺も居るんだけど」
「それじゃあ、また教室で」
　塔城さんはそのままいち兄を無視する形で教室に行ってしまった。
「いち兄、塔城さんに何かしたの？」
「ちょっと待て！俺が何かしたって決めつけるのは良くないぞ！」
「普段の言動を考えてみなよ」
　無視される理由が本当にないなら、そんな苦い顔はしないよね？
「それじゃあ、ここでさよならだよ」
「おう！ああそれとデートって何処行けばいいと思う？」
「今、そんなこと聞くの？というか何時行くの？」
「今日だ!!」
　前準備の悪いな。これじゃあ、折角告ってくれた彼女に逃げられちゃうんじゃないか

な。
「はあ、映画とか最後に公園とかでもいいんじゃないの」
「なるほど、ありがとな！」
　そのままいち兄は走って自分の教室へと向かって行った。
「さっきぶりだね、塔城さん」
「はい、さっきぶりですね。これ食べますか？」
　渡されたのはコンビニとかで売っている小さい羊羹だった。
「こしあん、か。うん、貰うよ。ありがとう、塔城さん」
「いいえ、喜んでもらえて嬉しいです」
　僕達はそのまま先生が来るまで羊羹を食べていた。
「それじゃあ、さよなら塔城さん。部活、頑張ってね」
「はい。あの、藤丸くんは部活動はやらないんですか？」
「うーん、僕は特にそういったことに興味ないから。もし、興味が出たら塔城さんが所属するオカルト研究部だっけ？それに入らせてもらえると嬉しいな」
「はい。部長に相談してみます」／／／
　ん、なんか塔城さんの頬が赤くなっていたような気がするけど気のせいだよね。クラスのみんなもすごい顔が赤いぞ？

「さて、そろそろ帰らないと夕飯が作れなくなるかな」
　ゲーセンで遊んだ後、気晴らしに公園を歩いていると。
「ん？あそこに居るのは、いち兄？」
　遠くで見えにくいけどあれは間違いなくいち兄だ。
「面白そうだし、着いて行こう」
　この時、素直に家に帰っていれば平穏に暮らせたかもしれない。
「ここからだと聞きにくいけど…」
　僕は少し離れた場所でいち兄のデートを見ていた。すると、
「嘘…だろ」
　彼女さんの背中から黒い翼が生えていた。
「危ない、いち兄！」
「アスカ！」
「あら、目撃者が居たのね。大丈夫、貴方を殺した後にあの子も同じところに送ってあげる」
「アスカ、逃げろ！」
　彼女さんの手には光の槍が握られていて、それがいち兄の胸を貫いた。
「いち兄！しかっりして！」

「ハハ、ヤバイな。俺、死ぬのかな？」
「何言ってんだよ！」
俺は彼女、いや目の前の化け物を睨んだ。
「良くも、良くも、いち兄を！」
「あら、何かしらその目付き。気にくわないわね！」
僕に向けて光の槍を飛ばしてきた。
「うわっ！」
その瞬間、僕の目の前が真っ暗になった。
『すごい魔力だね。まあ、当然だよね。僕達が宿っているんだから』
『え？』
そこは真っ暗な空間だった。そして一人の金髪に紅い瞳の少年が立っていた。
『初めまして、マスター。僕は君に宿っている神器の一人かな？表現の方法が難しいな』
『君はいったい…』
『おっと、詳しい話しは後。今は目の前に居る雑種を倒さないと』
そこに写りだしたのは先程の化け物だった。
『あれはこの世界に存在する堕天使だよ』
『堕天使？』

『そう、邪な罪や人との間に恋を芽生えさせてしまった憐れな天使の堕ちた姿』
　その子はたんたんの物事を説明してくれる。
『それより、早くあいつを倒さないとマスターもマスターの幼馴染みも死んじゃうよ?』
『ど、どうしろって言うんだ!』
『簡単なことだよ。僕を使えば良い。正確には僕の能力と宝具だけどね』
　宝具?なにそれ意味分かんない。
『説明は僕達を紹介する時にするからと言いたいけど今は僕一人だからね。僕だけの説明になっちゃうか』
『いいから!早く力を貸してくれ!』
『まったく、せっかちだなマスターは。でも、気を付けてね。使い方を間違えるとマスターも死にはしないけど死ぬほど辛いことになるから』
　そのまま、僕の意識はまた暗くなった。
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）　ｍｏｄｅアーチャー!」
　すると、僕の手から腕にかけガントレットが装備されたと思ったら、僕を守るかのように先に槍尻が付いた鎖が現れた。
「な!神器ですって!こんなところで覚醒するなんて」
「天の鎖!」

僕が指示すると鎖がそれに従うかのように相手に襲いかかる。
「くっ、厄介ね。退かせてもらうわ。目的も達成したことだしね」
「な、逃がすか！」
「さよなら、憐れなガキ！」
そのまま堕天使は何処かへと消えてしまった。
「はあ、はあ、はあ、くっ。解除」
そう言うとガントレットと鎖も消えてしまった。
「いち兄…!?」
急いでいち兄の所へ駆けつけるとそこには紅色の髪をした女性が立っていた。
「いち兄に、何をした！」
「え？」
僕は無意識にガントレットを喚び起こしていた。
「あら、貴方は確か一年生の。それにそれは神器？」
「良いから、答えろ！」
「落ち着いてちょうだい、貴方の幼馴染みは助かったわ。人間は辞めてしまったけどね」
人間…を…やめた？
「それにしてもその神器見たこと無いわね？レア物なのかしら」

「人間を辞めた？いち兄が」
「ええ、悲しいことでしょうけどそれしか助ける方法がなかったのよ」
　いち兄は人間をやめた。でも、生きている？
「いち兄は生きてるんですか？」
「ええ、そうよ」
「部長、帰りが遅いので迎えに来ましたよってあらあら見られてしまったのねリアス」
「ええ、でも彼は神器所持者よ。それも珍しいね」
　変な紋様が表れたと思ったらまた女の人が現れた。
「ねぇ、貴方。悪魔にならないかしら？」
「悪魔？」
「ええ、私、リアス・グレモリーの眷属としてね」
　グレモリー？確か何処かで見聞きしたような…？
「…もしかしてソロモン王が従えてたソロモン七十二柱の悪魔？」
「あら、私のことを知っているのね」
「でも、たしかグレモリーってらくだが近くに居たような？」
「うふふ、あれは人間が後から考えたものなのよ」
　し、知らなかったー!!

「それで、悪魔に成る気は在るかしら？」
「少し考えさせて下さい」
「ええ、明後日までには答えを聞かせてね」
こうして僕は初めて人外との会合と神器の覚醒が起きたのでした。

2話

僕は夢を見ていた。そこはあの少年と会った場所と同じ空間だった。
『こんばんは、マスター』
『また、会えたね』
そこには悪びれもしない笑顔を浮かべている少年が居た。
『さて、説明して貰うよ。君が誰なのか、そしてあの力はなんなのかをね』
『うん、そういう約束だからね。話すよ』
この少年から聞いたことはとても突飛な話だった。なんでも自分達は英霊、つまり過去に英雄と呼ばれた存在でしかも僕はそいつらを身に宿している。しかも神器として宿っているため英霊達の能力と宝具と呼ばれる生前自分と関わり深い武器と逸話がそれになったものが使えるとかマジファンタジーなんですけど。
『うん、まあ最初はそんな感じだよね』
『それで君は何の英雄なんだ？』
『僕かい？僕は彼の有名な英雄王　ギルガメッシュだよ』
『ギルガメッシュ？確かメソポタミア辺りの…』

『そうそう、マスターってもしかして歴史とか神話とか好きなの？いや、それなら堕天使のことも知ってるよね』

ああ、そういえばあの時は堕天使だってわからなかったんだった。

『初めて堕天使を見たからね。良くわからなかったんだよ』

『そうか。まあ、そうだよね』

ギルガメッシュも納得してくれたようだ。

『あ、それと僕のことはギル、もしくは子ギルでいいよ。大人の僕も存在するからね。紛らわしいでしょ』

『わかったよ、ギル』

そうか、子供も居るってことは大人も居るのか。

『それともうすぐ時間だから』

『うん、またこうして話し相手になってよ』

『あはは、マスターは変わってるね』

こうして僕の長いような短いような夢の時間が終わりを告げたのであった。

「う、うーーん。もう朝か」

ギルとの話でわかったことは自分に宿っている神器の名前とその能力だけか。

「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆…、使い魔と絆、か」

今はギルしか居ないけど、もっと増えるのかな？
「騒がしくなるね…」
主に僕の心の中が。まあ、それも楽しそうでいいんだけどね。
「そういえば、今日だったね。リアス先輩への返事」
そう、あれからちょうど二日たっていた。正直、今だに整理は喉ほどついていないけど、それでも決意した。
「おはよう、塔城さん」
「おはようございます、藤丸くん」
「塔城さん、今日オカルト研究部の部室に案内してくれないかな」
「え？」
予想外の言葉と言うよりかはいきなりの言葉だったため塔城さんは驚いた表情をしていた。
「もしかして、入ってくれるんですか？」
「うん、まあそうなるのかな？」
曖昧な返事だけど、まあ仕方ないよね。
「わかりました。それでは放課後案内します」
「うん、よろしくね」

約束の放課後。僕は塔城さんの後をついていく形でオカルト研究部の部室へと向かっていた。

え、なんでオカルト研究部にリアス先輩が居るのが分かるかって？一応、あの部と部員の人達は学園でも有名人だからね。僕も少しは知っているんだよ。

「あれ？ここって旧校舎？」

「はい、ここに部室があります」

「まあ、あまり人は近寄らないから丁度良いのかな？」

学園の本校舎から少し離れた場所にある旧校舎に部室があるみたいだ。

「？そこにいるのはアスカじゃねえか」

「ん、いち兄も呼ばれたんだ」

「ああ、この木場に案内されたな」

「どうも初めまして、二年の木場祐斗だよ。よろしく」

「一年の藤丸アスカです。よろしくです、木場先輩」

偶然会ったいち兄達と一緒に旧校舎の中へと入る。

「そういえば、藤丸くんは兵藤くんのことをいち兄って呼んでるけど兄弟じゃないよね？」

「ああ、つまるところの幼馴染みって奴だよ」

「うん、小さい頃から遊んでたからね」
「…そうなんですか」
　部室に着くまでの雑談をしながら歩いていた。
「さて、着いたよ。ここが部室だよ」
「ここが…」
　なんかいかにも悪魔が居そうな雰囲気だな～。いや、実際に悪魔が居るんだけど。
「部長、兵藤くんと藤丸くんを連れてきました」
「そう、入って来てちょうだい」
　中にいってみるとそこには…。
「「うわー」」
　いち兄と声が重なった。まあ、そりゃそうだよね。だって壁の至るところに魔法陣が描かれているんだもん。
「いらっしゃい、イッセーにアスカ。歓迎するわ、ようこそオカルト研究部へ」
　そこにはリアス先輩ともう一人の先輩が居た。
「そして、悪魔としてもね」
　はい、やはり悪魔なんですね。
「――という訳でここに至るのよ」

「そうなんですか」

リアス先輩から今に至る経緯を聞いた。かつて悪魔、天使、堕天使による三竦みの戦いに二天龍と呼ばれたドラゴンによる介入による休戦について、そして神器についてもだ。

「アスカにも神器が宿っているけど、イッセー貴方にも宿っているのよ」

「お、俺もっすか!?というか、アスカもなのかよ!」

「うん、あの時に覚醒?したみたいで」

正直驚いた。まさか、いち兄にも宿っていてしかもそれが原因で殺されたなんて。

「それで、俺も神器を出すんすよね?どうやって?」

「そうね、イッセー目を瞑ってイメージしなさい。貴方の中で最も強い存在を」

そう言われていち兄に某山さんの書いた漫画の主人公を思い浮かべたみたいで、技名まで言ってた。正直、笑える瞬間だった。

「うおお、なんか出てきた!!」

「これは龍（トウワイス）の（クリティカル）手かしら?」

「とぅわいす・くりていかる?」

なんか発音の仕方が難しいな。

「ええ、量産された神器なのだけど…」

リアス先輩は何処か考え込んでいるみたいだけど、どうしたんだろう？
「それより、アスカの答えを聞かせてくれないかしら」
「はい、リアス先輩。僕も悪魔になります」
「あら、本当？」
「はい、いち兄と塔城さんも居るみたいですし。それに僕も神器を持っていることがバレてますから」
身の安全と知り合いが居るからって言うのは不純な動機かもしれないけどね。
「それに、塔城さんが何度も誘ってくるうちに興味が出ましたから」
「おお、なんだアスカが神話とか歴史、本とか以外で興味をもつなんて珍しいな」
「あらあら、そうなのですか？」
リアス先輩の隣に居る先輩がいち兄に問いかける。
「はい、アスカは変わり者で自分が興味持ったもの以外には極力無関心でいるんですよ。でも、何故か友達とかには恵まれてるんっすよ」
「それより驚きだね。まさか小猫ちゃんが他人をこの部活に誘うなんて」
「ええ、小猫にしては大胆な行動ね」
何故かリアス先輩達は塔城さんをニヤニヤしながら見ているけどどうしたんだろう？

「それで僕も悪魔になるんですよね」
「ええ、でもどの駒がいいかしら」
すると部長が取り出したのはチェスの兵士の駒に騎士の駒、戦車の駒、僧侶の駒だった。
すると、兵士の駒が急に赤く光出した。
「え？」
「な、変異（ミューテーション・ピース）の駒に!?」
兵士の駒が赤い色が更に紅くなりそれが僕の中へと入っていった。
「これで、僕も悪魔になったんですか？」
「え、ええ。でも異例だわ。まさか、普通の悪魔（イービル・ピース）の駒が変異（ミューテーション・ピース）の駒になるなんて」
「うふふ、それほど藤丸くんの力が強いと言うことなんでしょうね」
なんだか良くわからないけど、これってすごいことなのかな？
「まあ、良いわ。それよりアスカの神器について教えてくれないかしら」
「あ、はい。僕の神器、使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆は神器に宿っている英霊と呼ばれる過去に英雄として存在した人達の能力と宝具と呼ばれる武器が使えるものです」
「「え、英雄!!」」
おお、なんか驚かれている。

「でも、英雄ばかりじゃなくて英雄じゃないけど結果的には平和をもたらした反英霊とか死後を世界に売り渡した守護者と呼ばれる存在の力も使えるってギルが言ってました」
「ギル？誰かしら」
「えっと、本人は英雄王　ギルガメッシュの子供の時の姿って言ってました」
　うん？みんな絶句してるけどそんなに変かな？
「あの……」
「はっ、ごめんなさいね。あまりにも驚いていたから」
「そ、そうですか」
　うん、やっぱ驚くよね。僕も最初は少し驚いたけどね。
「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。私が貴方達の王（キング）のリアス・グレモリーよ」
「私は女王（クイーン）の姫島朱乃です。この部の副部長でもありますわ」
「戦車（ルーク）の塔城小猫です。よろしくお願いします」
「騎士（ナイト）の木場祐斗だよ。これから同じファミリアの仲間としてよろしく」
　これに続くように僕達も自己紹介する。
「兵士（ポーン）になりました、兵藤一誠です！よろしくお願いします！」
「同じく兵士（ポーン）の藤丸アスカです！いち兄共々よろしくお願いします！」

こうして僕といち兄はリアス先輩改め王（キング）であるリアス・グレモリーの眷属悪魔になりました。

3話

『あれ?ここって』
　そこはギルと会った場所であった。
『こんばんは、マスター。今日は報告があるから僕から呼んだんだ』
『報告って、ギルの後ろに居るその子のこと?』
　ギルの後ろには顔に手術あとのようなものがある少女が居た。
『うん、この子の名前は…』
『マスター初めまして。私達はジャック・ザ・リッパーだよ』
『え、切り裂きジャック(ジャック・ザ・リッパー)?』
『違うよ、ジャック・ザ・リッパーだよ』
『マスターって変なとこ博識だよね』
　なんか間違えたみたいだけど、ギルはなんで呆れてるのかな?
『彼女達はジャック・ザ・リッパーって言う名前の反英霊だよ』
『彼女たち?』
『うん、私達はジャック・ザ・リッパーであって、ジャック・ザ・リッパーじゃないんだ

よ』

ジャック・ザ・リッパーであってジャック・ザ・リッパーじゃないか。

『まあ、ジャックはジャックってことだよね』

『ジャック？』

『うん、ジャック・ザ・リッパーじゃ長いし言いづらいからね。嫌だったら元に戻すよ』

『ううん、嫌じゃないよ！ありがとう、マスター（おかあさん）』

喜んでもらえて嬉しいな。それに可愛いな。おい、誰だロリコンって言った奴は!!

『それで、ジャックはそのナイフで戦うんだね』

『うん、私達は解体が得意だからね』

うん、可愛い顔して怖いことを言うねジャックは。流石、イギリス史上最凶の犯罪者だよ。

『そろそろマスター、起きた方がいいよ』

『なんで？』

『教師がマスターの近くに来てるからね』

ギル、それはもう少し早く言ってほしいことだよ。

「お、やっと起きたか。藤丸」

「あ、あはは、おはようございます。先生」

スパーンと僕の頭に雷が落ちた。うう、暴力反対ですよ。
「自業自得ですよ、藤丸くん」
「あはは、ちょっとギルに呼ばれてね」
「はぁ、ほどほどにして下さいね」
アハハ、塔城さんにまで呆れられているよ。
放課後になって塔城さんと一緒に部室へ向かうことになった。
「それじゃあ、アスカもイッセーもチラシ配りはもうやらなくて良いわよ」
「「え!?」」
チラシ配りをやらなくていい。それはつまり……!!
「貴方達二人にもこれからは契約をとってきてもらうわ」
「「やったーーー!」」
「あらあら、二人とも嬉しいみたいよリアス」
「うふふ、そうみたいね」
僕達の喜ぶ姿を見て微笑む二大お姉さま方。あ、二大お姉さまって言うのはリアス部長と姫島副部長のことだよ。
「それじゃあ、二人ともここに来てちょうだい」
そこには大きな魔法陣が描かれている場所だった。

「朱乃が貴方達二人に転移の魔法陣を刻むわ」
「あ、もしかして魔力と調べるとかですか？」
「あら、勘がいいじゃないアスカ。ええ、それも目的の一つよ」
なるほど、魔力か。僕って元人間っていち兄も元人間か。
「最初はイッセーよ。丁度、依頼の方も二件来てるし」
「はい、見てろよアスカ。俺はかっこ良く転移してやる！」
「いち兄、それはフラグって言うんだよ」
いち兄ってなんでフラグを立てるんだろう。もしかしてそう言う神器なのかな。
『考え事してる最中にごめんね、マスター』
「うわっ!!」
「？どうかしたの、アスカ」
「あ、いえ何でもないないです」
僕は誤魔化してギルと会話することにする。
『ギル、急に話しかけないでよ。と言うか夢じゃなくても話せるんだね』
『まあね。それでこうして話しかけた理由はね、僕以外にもアーチャーのクラスの英霊が、ジャック以外のアサシンのクラスの英霊が増えるかもしれないって話すの忘れてたからね』

え！他にも増えるの！しかもクラスってなに！
『あ、説明し忘れたね。クラスって言うのはね』
「次はアスカの番よ」
「あ、はい」
『ギル、ごめん。その話しはこの後にお願い』
『了解』
　ギルとの話を一旦区切って魔力を調べることになった。
「あの、ところでいち兄はなんであんなに落ち込んでるんですか？」
「気にしないで下さい。兵藤くんは少しだけ自信がなくなっただけですから」
　自信がなくなった！そんなことあり得ない。あのいち兄が。
「それじゃあ、調べますね」
　うう、緊張する。こんな美人な女の人に見つめられると。
「すごいですわね。魔力量なら女王（クイーン）である私以上ですね」
「あら、凄いわね。イッセーは魔力量が赤子レベルだったのに」
「ぐはぁ！」
　リアス部長ー！いち兄に止め刺してます！
「後輩に負けてるのか」

あ、最終的には僕が止め刺してた……？

『話して平気ですか、マスター』

『あ、ごめん。それでクラスって？』

『僕達英霊にはクラスがあります。クラスと言うのはセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七つと他にもあるんだけど、英霊はそのクラスに属してるんだ。決まる基準は基本的には生前での逸話や宝具とかかな？僕の場合はアーチャーで、ジャックはアサシンだよ』

なるほど、確かにクラスの数だけ英霊がいても不思議じゃないよね。

『あ、ちなみに同じ英霊でもクラスが幾つかある奴も居るよ』

『へぇー』

それって同じ英雄だけどクラスを複数持っている奴が居るってことか。

「それじゃあ、ジャンプするわよ」

「あ、はい。いち兄は…」

「イッセーなら自転車で依頼主のところに言ったわ」

なんと言うかかける言葉が見つかりません！

「召喚に応じました！悪魔です！」

「うわっ！本当に来た！」

そこにいたのはＯＬ風の女性だった。
「えっと、お望みはなんでしょうか？」
うう、やっぱり初めては緊張するよね。
「そうね、とりあえず話し相手になってくれないかしら？」
「それだけでいいんですか？」
「ええ、だって私友達いないし」
な、なんか闇が深そうな人に召喚されちゃったかな？
それから僕は星喰（ほしくい）澪菜（れいな）さんと話を聞いていた。と言うよりかは、咽ほどが会社に対する愚痴とか男性からの憧れの視線がうざいとかそう言う話だった。
「ふう、なんだか話を聞いてくれたお陰で楽になっわ。ありがとう、悪魔さん」
「い、いえ、お役に立てたのならいいです」
「お礼に貴方と契約してあげるわ」
「ほ、本当ですか！」
こんなことで契約がとれるなんて、なんだか悪い気がするけど…。
「はい、これで契約完了です」
「うふふ、また来てね。可愛い、悪魔さん」
か、可愛いって…。僕は男の子のなんだけど。

「お帰りなさい、アスカ。どうだったかしら」
「はい、契約取ってきました！」
「あらあら、それはおめでとうございますわ」
「えへへ」
姫島副部長に頭を撫でられました。結構気持ちがよかったです。
「お帰りなさい、藤丸くん」
「ただいま、塔城さん。塔城さんもお疲れさま」
「いえ、シュークリーム。一緒に食べましょう？」
「いいの？ありがとう」
こうして僕は塔城さんと一緒にシュークリームを食すことにした。
悪魔家業を終えた僕は再びギルとジャックがいるあの空間へと向かっていた。
『今日は何度もごめんね、マスター』
『良いよ、何気にこういう風に話すの中々楽しいし』
『マスター（おかあさん）、お膝に座っていい？』
『いいよ、ジャック。おいで』
ジャックは喜びながら僕の膝や上にすわった。うん、やっぱり可愛いな。
『それでここに呼んだ理由だけど、僕やジャック以外の英霊も存在してくるって言った

よね』
『うん、たしか同じクラスでも違う英雄が現れるかもしれないんでしょ』
　まあ、そうなるとみんなの名前を覚えるのって大変だよね。
『うん、それで初めて使っときの用にクラスで呼ぶと誰が答えるかわからないんだよ』
『ああ、そうか。今、アーチャーのクラスにはギルしか居ないけど増えるとそう言うわけにはいかないんだ』
　うーん、となるとまた戦うときに不便に成るよね。
『今すぐって訳じゃないけど。成るべくクラスを言ったあとにその英霊のことを心の中で読んでほしいんだ。さっきまでみたいに』
『ああ、そうすれば良いのか。でも、真名を呼んだ方が早くない?』
『それだと、僕たちのことが相手にばれちゃうよ。最悪、僕たちのことを知っている敵だったら弱点とか突かれちゃうしね』
　そうか、本名で戦うと対策をとられちゃうんだ。むずかしいな。
『それと成るべく僕たちを使っておいた方がいいよ。いきなりだと何が起こるかわからないし』
『うーん、まあ確かに急に新しいものを使うと最悪壊しちゃうこともおるもんね』
　となると何処かで特訓しないとダメだよね。

『まあ、それは追々やっていくよ』
『うん、その方がいいかもね。それに幸いマスターは魔力量が多いから僕たちを一日中使ってても問題ないと思うしね』
そんなに僕の魔力量って多いんだ。
『それじゃあ、また話そう。マスター』
『ばいばい、マスター』
こうして僕の意識は覚醒していった。

4話

悪魔になってはや数週間。僕はいつも通り部室へと向かっていた。
「いい、イッセー。二度と教会に近づいちゃダメよ」
「…はい」
ん、どうやらいち兄が怒られているようだ。
「木場先輩、いち兄はどうして怒られているんですか？」
「ああ、兵藤くんはどうやら教会にシスターを送り届けたみたいなんだよ」
「教会は敵の領地」
なるほど、確かに悪魔にとっては教会は近づいたらダメな場所だよね。
「あれ、姫島副部長の姿が見えないけどお休みですか？」
「いや、朱乃さんなら大公と何か話しているよ。おそらく…」
すると部屋にノックの音が響き渡った。
「あらあらお説教は終わったみたいですね」
「朱乃…」
「リアス、大公からはぐれ悪魔の討伐命令が来ましたわ」

……はぐれ悪魔？
「そう、イッセー、アスカ。今日は貴方達二人には悪魔の戦い方について説明するわよ」
「悪魔の戦い方？」
「ええ、それじゃあ行くわよ」
リアス部長の言葉に続くかのように僕達は外へと向かった。
「はぐれ悪魔っていうのは主である悪魔を裏切って力に溺れてしまった悪魔のことだよ」
「へぇー、そうなんですか」
「それを討伐するのも私達の仕事」
僕は木場先輩と塔城さんからはぐれ悪魔の説明を受けながら山道を歩いていた。
「しかし、悪魔になって良かったことは夜でも目が利くようになったことだよな」
「それはいち兄だけだと思うよ」
確かに夜も目が利くようになったし、寿命も一万年近くになったからね。悪魔になって良かったと思うよ。
「…血の匂いがします」
「塔城さんって鼻がいいんだね」
「そうでもないです」

塔城さんが指差した方向には何かの建物が廃墟になった場所だった。
「はぐれ悪魔は廃墟とかを拠点にしているんだよ」
「野生感がパナイですね」
中へと入ると確かに少しだけ血生臭い匂いがした。
「グヘヘ、うまそうな匂いがするなぁ。不味そうな匂いがするなぁ。お前達はどっちだ！」
「「うへぇぇ」」
現れたのは上半身の部分が人間の女性の形をしているけど下半身の部分は完全に化け物になっていた。
「二人には悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の特性について話しておくわ」
「「特性？」」
今日はいち兄とよく台詞がかぶるなぁ～。
「まずは…」
「死ねぇ！」
はぐれ悪魔が木場先輩めがけて拳を振り下ろす。だけど、拳は当たることなく、腕が斬り落とされていた。
「ぎゃあああ！」

「祐斗の駒は騎士（ナイト）。特性はスピードでそれを活かす剣の腕を持っているわ」
すごい、あまりの速さに残像しか見えなかった。
「ぐうぅう、邪魔だ！」
「塔城さん（小猫ちゃん）!!」
「大丈夫よ」
塔城さんがはぐれ悪魔に踏み潰されて助けに入ろうとすると部長が止める。
「!?」
数秒後、はぐれ悪魔の足が浮き出した。
「……えい！」
塔城さんがはぐれ悪魔の足を持ち上げて投げ飛ばした！もう一度言う投げ飛ばした！
「小猫は戦車（ルーク）。特性は単純馬鹿げた防御力と攻撃力よ」
「俺、これからは小猫ちゃんにケンカ売らないようにするよ」
「その方がいいよ」
塔城さんを決して怒らせないようにする事を心の中で密かに誓うのであった。
「うん？」
木場先輩に斬り落とされたはぐれ悪魔の腕が微かに動いたような気がした。

「リアス部長、危ない！」
　僕は咄嗟に神器を発動する。
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）　ｍｏｄｅアサシン！」
　僕は両手に持っていたナイフで腕を斬り刻んだ。
「ありがとう、アスカ。助かったわ」
「ありがとな、アスカ」
「いえいえ、大丈夫ですよ」
　あと少し反応が遅れたら大変なことになっていたかな？
「次は朱乃ね」
「うふふ、いけない子にはお仕置きしないといけませんね」
　姫島副部長は笑顔を浮かべながらはぐれ悪魔に魔法による雷の攻撃を繰り出していた。
「あらあらうふふ、まだまだ元気みたいですわね」
　な、なんだろう。今の姫島副部長は怖いです……。
「朱乃は女王（クイーン）。キング以外の全ての駒の特性を持っているわ。そして、朱乃は究極のＳよ」
「「究極のＳ」」

「うふふ、大丈夫よ。仲間には優しいから」
はぐれ悪魔の肌が黒く焼け出しても攻撃を止めることはなかった。
「朱乃、その辺でいいわ」
「あらあら、もう少しいじめたかったわ」
「こ、怖いな」
「うん、怖いね。いち兄」
姫島副部長の言葉に僕といち兄は震えていた。
「最期に言い残すことはないかしら」
「……殺せ」
「そう、なら消えなさい！」
リアス部長の魔力がはぐれ悪魔に当たると跡形もなくはぐれ悪魔は消えてしまった。
「今のは…」
「部長は滅びの魔力というのを持っていてね。その魔力をもって戦うことから紅髪の滅殺姫（ルイン・プリンセス）って呼ばれているんだよ」
ルイン・プリンセス、滅殺姫。確かに滅殺だよね。髪の毛一本の残らず消えたし、リアス部長って何処かお姫様みたいだもんな。
「それよりアスカのその姿、前に会った時とは違うわね」

「え、あ、そうですね。これはアサシンの時の姿ですよ」
「アサシン、暗殺者ですか」
「今度はどんな英霊なんだい？」
　うん、皆興味津々みたいだよ。
「ジャ、ジャック・ザ・リッパーです」
「「「「え？」」」」
　うん、そんな顔するよね。みんな唖然としてるよ。
「そ、そんな顔しないで下さいよ。それとリアス部長と姫島副部長に塔城さん、距離をとらないで！」
「そのなんだ、アスカ。どんまい」
　ううっ、わかってたさ。みんなが引くくらい。
「引かないでください。ジャックは可愛い女の子なので」
「可愛い……」
「え？」
　なんだろう、塔城さんの纏う雰囲気が変わったような。
「あら、ジャック・ザ・リッパーは男のはずじゃないかしら？」
「あれ？知らないんですか？ジャック・ザ・リッパーって一応性別不明なんですよ？」

そうジャック・ザ・リッパーは史実上性別不明なのだ。何故なら目撃者は全て死体になっているからだ。
「あら、でも私が知っている国民的探偵アニメの映画では男だったわよ」
それは名探偵コ〇ンの中での話なんですよリアス部長。
「でも、多くの作品では男の人として描かれてますね」
「え、えっと…、ジャック・ザ・リッパーって誰っすか？」
今度はいち兄の言葉に場が凍りついた。
「さて、帰りましょうか」
「はい、そうしましょうか」
「…藤丸くん、一緒にケーキを食べましょう」
「あ、うん…」
「え、みんなどうしたんですか」
慌てるいち兄の肩に木場先輩が手を置く。
「兵藤くん、後で僕で良ければ教えてあげるよ」
「お、おう。なんか木場しか味方がいないみたいだよな」
こうして僕達の初めてのはぐれ悪魔の討伐はいち兄の知識の無さを披露して終わりました。

5話

今日は金曜日。という事で僕は今日特別にリアス部長から休みをもらいました。
『それじゃあ、まず僕の方から説明するよ。マスター』
『よろしく、ギル』
という事でギルとジャックによる能力と宝具についての説明を受けることになりました。勿論、僕の精神世界でね。
『僕こと子ギルの能力は空間と空間を繋げることによって宝物庫にある武器、宝具を射出すること。これが僕の宝具王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）だよ』
『はいはーい、質問です。子ギル先生』
何故か今日は授業のような形になってる。と言うか、子ギルのスーツ姿がミスマッチだよ。
『なんでしょう、マスター』
『宝具って一人のサーヴァントに1つじゃないんですか？』
『ああ、それは僕が特殊なだけだよ。僕はある逸話ではあらゆる英雄たちの宝具となった武器の原典である武器を持っている事になっているからね。ほら、ローランのデュラ

ンダルとか』

　ああ、なるほど。確かにデュランダルはギルガメッシュからローランへと渡って話だったね。

『なるほど、じゃあ数はそれなりにあるの？』

『まあ、大人の僕だったら千をも越える宝具を持ってるけど僕の場合はその半分よりちょっと少ないかな？射出する量も少ないよ』

『大人は千を越えてるんだ』

　まあ、今のギルは子供だからね。大人になる過程でもっと増えていくのかな？

『あれ？でも、初めて使ったときは天の鎖だっけ？それしか出てなかったよ？』

『ああ、宝具って使用する際にとてつもない量の魔力を消費するんです。だから、あの時は宝具じゃないよ』

『宝具じゃない？じゃあ、普段はあれが普段の攻撃するときの武器？』

『うん、そうだよ』

　そうなのか。でもあれじゃあ敵にダメージを与えられなくない？

『あはは、一応槍尻がついてるしあれは神性が高い生物には効果があるんだ』

『うん？どういうこと？』

　神性が高い？と言うことは神様とかに言うこうなのかな？

『宝具の中にはね、概念が宿っている奴が多いんだよ』
『概念？』
『うん、その宝具がどのように使われてきたかによって様々な概念が存在するんだ』
『へぇー、じゃあ天の鎖は神性が高い。つまり神様とかには有効ってこと』
『そんな感じだよ』
　なるほど、じゃあ概念によって宝具とサーヴァントは使い分けた方がいいんだ。
『ちなみに天の鎖の概念の由来はね。かつて天の牡牛を捉えたからって言うのが理由なんだ』
『天の牡牛って牡牛座の星座のもとになったあの牡牛？』
『そう、僕が主人公として書かれているギルガメシュ叙事詩に登場する牡牛だよ』
　なんか自分のことだからこんなに嬉々として語ってるのかな？
『今度は私たちの番だよ。マスター』
『うん、説明よろしくね。ジャック』
『えへへ、うん頑張る！』
　頭を撫でてやると喜んでくれるんだよね。可愛いなぁ、もう！
『マスターはロリコ』
『違うよ！ジャックは特別可愛いんだよ！』

『それを世間ではろり』
『違うから！ジャックは特別なんだよ！』
　失礼しちゃうなもう。
『まあ、確かにマスターが特殊性癖（ロリコン）だったらあの塔城って悪魔が襲われてるよね』
『ルビが気になるけど、ロリコンじゃないって信じてもらえただけでも収穫だよね』
『もー！マスター（おかあさん）！私たちの話を聞いてよ』
　おっと、ジャックが怒っちゃったみたいだ。これ以上はご機嫌ななめになったら大変だ。
『それじゃあ、説明よろしくね。ジャック』
『うん、私たちはこのナイフで敵を解体するんだよ』
『すごいね。ナイフの数も多いんだね』
　見ただけでざっと十本近いナイフの数だね。
『それで私たちの能力はね。気配遮断だよ』
『気配遮断、か。アサシンらしい能力だね』
『まあ、アサシンのクラスは基本的には持っています。ですが強さはそれぞれです』
　補強としてギルが説明してくれた。
『でも、私たちは攻撃するときに気配遮断の力が弱まっちゃうの』

『なるほど、まあこうげきするときは仕方ないよ』
　元々、ジャック・ザ・リッパーは暗殺者じゃなくて殺人鬼だからね。気配の消し方がうまいと言う訳じゃないよね。
『それから私たちの宝具は二つあるんだよ？』
『…え？』
　あれ？一人ひとつなんじゃ。
『例外的にいるんですよ。特にライダーのクラスはその傾向が強いですね』
　ギルの方を見ると説明しながら頷いていた。
『ほへぇー、そうなんだ』
『まずはね、暗黒霧都（ザ・ミスト）って言うんだよ』
『暗黒霧都？』
『うん、私を中心に霧が発生してくるんだよ』
　霧、か。確か、ジャック・ザ・リッパーがいた時代は産業革命後のイギリスでしかもロンドン。霧がすごいみたいだよね。
『霧はね。私たちの認識の阻害とかしてくれるんだよ』
『認識の阻害？』
『うん、私たちと戦ったあとね。私たちのことを思い出しにくくするの』

思い出しにくくするって、ロンドンの霧にそんな効果あったけ？
『なんでそんなことができるの？』
『えっとね、産業革命？のあとの霧には硫酸が含まれていて、それによって被害が出てるのと私たちが霧に生じて女の人を解体したからだよ』
なるほど、ロンドンの硫酸が含まれる霧の災害と切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）が霧に乗じて殺人を起こしていた概念が含まれているのかな。
『それじゃあ、二つ目の宝具は？』
『二つ目はね。解体聖母（マリア・ザ・リッパー）だよ』
『解体聖母（マリア・ザ・リッパー）？』
元気よく頷いてくれるジャック。
『私たちのジャック・ザ・リッパーとしての逸話が宝具になったものだよ』
『逸話ってことは人々のうちで語られるジャック・ザ・リッパーの話が宝具として形になったものってこと？』
『うん、そうだよ。マスター（おかあさん）は頭がいいんだね』
何故か撫でられた。でも、悪い気はしない。
『それでその宝具だけど。何か概念みたいものはあるのかい？』
『うん、この宝具がもっと強くなる条件があるんだよ』

強くなる条件か。
『まずはね、【霧が発生していること】と【相手が女性または雌であること】、最期に【夜であること】。この三つが揃うと呪いが強くなるの』
『呪い、もしかして相手を呪うの』
『ううん。相手にね、一定のダメージを負わせ続けることと傷を癒えにくくするものだよ』
よ、よかった。そう言う呪いなんだ。いや、呪いなんだから良かったとかないんだけど……。それよりも条件が生前のジャック・ザ・リッパーの殺害状況なんだ。
『逸話が宝具になっただけあって、条件も条件だね』
『まあ、そう言うわけで僕たちからの説明は以上だけど…。理解はできたかな?』
『うん、理解はできたよ。後は僕の判断力と魔力で慣れていくよ』
僕の言葉を聞くと二人は笑顔を浮かべていた。
こうして僕はギルとジャックによる能力と宝具に関する講座を無事に乗り越えたのであった。

6話

翌日、土曜日ってことだけど悪魔稼業があるため僕は部室へと向かった。
「おはようございます」
「あら、おはよう。アスカ」
「おはようございますわ、アスカくん」
「おはよう、藤丸くん」
「おはようございます、藤丸くん」
挨拶をしながら部室に入ると挨拶を返してくれました。そこで一人足りないことに気づきました。
「あれ、いち兄は？」
「…イッセーは今日は休みよ」
「そうなんですか？」
珍しいと思った。あの性欲と元気と根性だけが取り柄のいち兄が休むなんて。
「何か、あったんですか？」
「昨日、兵藤くんが依頼主のところに行ったんだ。だけど、そこにはぐれ神父がいてね。

傷を負ってしまったんだよ」
「はぐれ神父？」
　はぐれってことは悪魔のはぐれと同じみたいなものなのかな？
「はぐれ神父は様々な用途で使われていますわ。また、なった経緯も悪魔と違って様々なのですわよ」
「へぇー、てっきりはぐれは悪魔だけなのだと思いました」
「…そうでもないです。悪魔に限らず天使、堕天使側にもはぐれは存在しています」
　はぐれ、ね。それにいち兄は傷を負った。でも、大抵の傷なら姫島副部長とリアス部長のどちらかが治癒をしてくれるはず…。
「傷は治らなかったんですか？」
「イッセーの傷は光によるもの。悪魔にとって天使と堕天使の光は天敵なのよ」
　光。まさか、あの堕天使が使ったものを人間が？
「人でも光って出せるんですか？」
「無理ね。でも、エクソシストたちが使う武器の中には光を放つ銃や剣があるわ。イッセーはそれにやられたのよ」
　なるほど、人間って言うのは何処までもすごいですねって僕ももと人間ですけど。
「さて、暗い話しはここまでよ。アスカ、貴方に依頼が届いているわ」

「はい、それでは行ってきます」
　こうして僕は依頼主のもとへと召喚されたのであった。
　そして、夕方。僕にやって来た依頼を全て終わして部室で塔城さんと寛いでいた。
「それにしても今日は依頼が少ないね」
「そう言う日もあります。食べますか？」
「うん、ありがとう。あ、おいしい」
　塔城さんから貰ったチーズケーキを一口食べて言葉を口にした。
「あらあらうふふ。小猫ちゃんが他人にケーキをあげるなんて珍しいですわね」
「そうなんですか？」
「ああ、小猫ちゃんは結構食べるからね。部長も少し呆れてたりするよ、たまあにね」
　なるほど、塔城さんは見た目によらず大食漢だと。でも、よく太らないなぁ。
「でも、よく食べる女の子って可愛いですよね」
「!?」
　うん？なんか塔城さんが驚いたような表情したと思ったら顔が赤くなった。
「大丈夫、塔城さん。顔が赤いよ？」
「な、なんでもないです…」
「？」

うむ、本人がなんでもないっていってるし追求は野暮だよね。
「あらあら、アスカくんはよく食べる女子が好みのタイプなのですわね」
「え？違いますよ。ただ僕の周りにいた女子って結構少食だった子が多かったので、そう考えると塔城さんの食べっぷりを見てると可愛いなぁーと」
すると、隣から何か爆発したような音が聞こえてきたけど気のせいかな？
「あはは、アスカくんって無意識に女子を堕としていくタイプだよね」
「え？僕、女子を抱えたりしたことないので分からないですけど、落としたりはしませんよ」
あれ？なんかみんな苦笑いを浮かべてる。なんで？
「はぁ、アスカはどうやら天然みたいね。そう言う部分に関しては」
「ほへぇ？」
なんでだろう。リアス部長にまで呆れられてる。
「それよりアスカ。貴方の神器の中にいる英雄たちってまだ二人しかいないのよね」
「あ、はい。でも、ギルの話しによると僕自身が強くなったりしないとダメみたいだったりするみたいですけど」
「そう。ならアスカにはこれから期待できるみたいね」
「？なにか言いましたか、リアス部長？」

「いいえ、なんでもないわよ」
　なにかいっていたような気がしたのだがどうやら気のせいだったみたいた。
「そう言えば、僕といち兄の駒って兵士（ポーン）なんですよね？」
「？、ええそうよ」
「他の駒みたいに何か特徴的な機能とかあるんですか？そこのとこ聞いていなかったなあと思って」
「あら、確かにそうね。ごめんなさいね、気づかなくて」
　なんかリアス部長って天然が入っていたりするのかな？
「そうね、説明すると」
「部長！」
　リアス部長が説明しようとするといち兄が扉を勢いよく開けて入ってきたのだ。
「アーシア、アーシアが！」
　そこからいち兄は切羽詰まった感じでリアス部長に何があったのか説明する。
　どうやら、昨日はぐれ神父と一緒にいたアーシアと言う少女は堕天使のところから逃げたもののみつかりいち兄が守ろうとしたものの相手はいち兄を殺したあの堕天使レイナーレだと言う。そして、いち兄を巻き込みたくなかったアーシアさんはそのまま堕天使のもとへと戻っていった。

「ダメよ。それだけは許可できないわ」
「どうしてですか！」
「今、三竦みの関係は緊迫したものなのよ。そこに証拠もなしに悪魔が堕天使を襲ったという風になれば確実に悪魔と堕天使は戦争するわ」
「でも、アイツらは儀式の準備は整った言っていたんですよ！」
　儀式？儀式、ね。普通、人間を使う儀式と言えば生け贄よる何かの召喚や人柱として何かを鎮めるものだよね。
「もしかしたらアイツらはアーシアの神器が目当てなのかも知れないんです！」
　神器か。でも、そもそも神器って他人から奪えるものなの？
「あの木場先輩、質問いいですか」
　僕は近くにいた木場先輩に質問する。
　ちなみに僕の隣には木場先輩が、ソファに塔城さんが姫島副部長はどこへといってしまった。
「神器ってそもそも奪えるものなのですか？」
「いいや、普通は無理だよ。神器は宿主の魂の一部みたいな形で宿っているからそれを強引に奪ったら」
「どうなるんですか？」

「その所持者は死ぬ…」
死ぬ、まさかそんなことが…。
「木場先輩、もしいち兄が言っている堕天使の儀式というものが相手から神器を奪うものだった場合、リアス部長は動きますか？」
「恐らく動くだろうね。それにここは部長が魔王様から領主として任された場所だからね。敵対関係とはいえ堕天使が自分の領土で何かしているのなら部長は動くさ」
「そうですか…」
「それに、ね」
木場先輩が続けて何か話す。
「僕たちの主であるリアス・グレモリー様は他人を見捨てる薄情なお方じゃないよ」
「…あはは、確かにそうかもしれませんね」
そうだよね。僕たちの主であるリアス部長は薄情な悪魔なんかじゃないからね。
「なら、俺をはぐれにしてください！」
「!?」
はぐれにしても構わないと言うといち兄はリアス部長にビンタされた。
あちゃー、いち兄。それはダメだよ。リアス部長は何だかんだで僕たちの眷属を大切にしてるんだから。

「ふざけないでちょうだい。貴方は私の、リアス・グレモリーの大切な下僕なのよ！そんなことできるわけないじゃない！」
「……」
「いち兄、今のは言い過ぎだよ」
「アスカ……。すいません、部長」
「いいのよ、私こそごめんなさいね。叩いてしまって」
　ふう、とりあえず落ち着いたみたいだね。
「あら、お話は終わったみたいね。リアス…」
　戻ってきた姫島副部長がリアス部長に耳打ちで何か伝えている。
「そう、分かったわ。行きましょう、朱乃」
　リアス部長はそのまま何処かへと向かおうとすると。
「それとイッセーとアスカ。特にイッセーは自分の駒、兵士（ポーン）は一番弱い駒だと思っているでしょう。それは違うのよ」
「…え？」
「プロモーション。王（キング）が敵と認めた場合や陣地に入れば貴方たちは王（キング）以外の駒にもなれるのよ。そう例えば教会とかね」
「リアス部長……」

それをここで言うと言うことは…。
そして、そのままリアス部長と姫島副部長は何処かへといってしまった。
「俺は…行くぞ。止めても無駄だからな」
「兵藤くん一人だけじゃあ、そのアーシアさんは救えないよ」
「くっ」
「そう、一人だけならね」
木場先輩は眷を持って立ち上がり、いち兄の隣に立つ。
「だから、僕も行くよ」
「木場…」
「それに個人的に天使や神父は嫌いでね。憎いほど」
なんだろう、木場先輩から何か暗くて黒い何かを感じたような。
「…私もいきます。二人だけでは心配ですから」
「…小猫ちゃん！」
「はぁ、僕も行くよ。いち兄の友達なら僕の友達でもあるんだからね」
「アスカ！」
「あれ？僕の時とは反応が違うような」
まあ、木場先輩もいち兄と仲良くなればこのくらいになりますよ。

「さて、それじゃあ行きましょう。アーシアさんを助けに！」
「おう！ってなんでアスカがそれを言うんだよ！」
最後の最後でしまらないなぁ。まったく。

7話

いち兄の案内のもと廃れた教会前へとたどり着いた。
「ここにアーシアが！」
「廃れた教会、ね。確かに堕ちた天使たちが集いそうな場所だよ」
「恐らく祭壇の下に地下通路があるはずだよ」
「そこから行きましょう」
塔城さんが扉の前へと立つと拳を握りしめて、扉を殴り飛ばした。
「小猫ちゃん、もうちょっと慎重に」
「彼方もこちらに気づいていたみたいですよ」
「キャハハハ、くそ悪魔四名ご案内～」
そこには神父服を着たいかにも狂ってるような男がいた。
「フリード！アーシアは何処だ！」
「あぁ～、あの憐れな聖女ちゃんならここの地下で堕天使様から神器を抜く儀式にかけれているぜ。キャハハハ」
やっぱり、神器を抜くための儀式だったんだ。

「ここは僕に任せてもらっていいですか」
「藤丸くん、なら僕も残るよ」
「いえ、先輩と塔城さんはいち兄と一緒にアーシアさんのもとへ」
「…一人で相手できる相手でもないですよ」
「あくまで足止めです。それにここで全員残るよりは一人を殿にして残りは救出に向かった方が早いです」
　そう、これはあくまでアーシアさんの救出が目的で相手を殺す事が目的じゃない。勿論、相手がこっちを殺すつもりなら話しは別だ。
「早く、手遅れになる前に」
「…行こう。二人とも」
「良いのかい？」
「ああ。それに一度決めたことは誰に言われてもアスカは曲げないからな」
「よくわかってることで」
「お前と何年の付き合いがあると思うんだよ」
　それもそうだね。ほんと長い付き合いだよ。
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）ｍｏｄｅアサシン」
「おやおや、珍しい神器ですなぁ。総督が喜びそうで。ギヒヒヒ」

「悪いけど、相手になってもらうよ」
いち兄たちが行ったのを確認して僕はナイフを構え、間合いを図る。
「ぎひゃひゃひゃ。先手必勝」
「!?」
銃?部長がいっていた光を放つ銃か！
「くっ!!」
「おお！お見事、でも次は当てるぜ」
「そうは簡単にいくかな」
僕は気配遮断を使い、神父から場所をつかめないようにする。
「チッ、気配を消しやがった」
銃を下ろしたのを確認して、僕は銃の死角になる場所に移動した。
「ここだ!!」
「ちょっ！　」
僕は一気ナイフで銃を弾き飛ばして、畳み掛ける。
「そう簡単に殺られるかよ！」
「剣!!」
今度は刀身が光で出来た剣を使い始めた。

「くっ！」
「あらよっと」
「もう一つ!?」
　僕が弾いた銃とはまた違う銃を取り出され、至近距離で撃たれる前に気配遮断を使った。
「チッ、また気配が」
「危なかった。気配遮断が無かったら撃たれてたよな」
　距離をとり、身を秘めることにした。
「どうする。相手は銃に剣どっちも持っている。あんなのまともに当たったら死ぬとかですまないよね」
『マスター、苦戦してるね』
『ギル…。まあね。近距離と遠距離の武器を両方持たれているからやりづらいよ』
　神器ごしに語りかけてくるギルにそう答える。
『マスター（おかあさん）、宝具使おうよ』
『宝具、か。でも、どれをだい？』
解体聖母（マリア・ザ・リッパー）はただの人間に使うには荷が重い。
『暗黒霧都（ザ・ミスト）だよ。あれはね、認識を阻害してくれるのと同時に人間には有害なんだよ』

『ああ、なるほどね』
ジャックが言いたいことが何となくわかった。
「ふう、宝具　暗黒霧都（ザ・ミスト）」
僕を中心に霧が部屋の中を包み込んだ。
「な、なんだ。なんで霧が発生しちゃってるんですかぁ！」
慌て出す神父。まあ、普通に驚くよね。部屋の中で突然霧が出たら。
「それになんだか、気が遠く」
「ふう、それじゃあ方をつけるか」
僕は気配遮断を使ったまま相手の背後に回り込みそして…。
「がはぁ！」
「ふう、終わりだね」
宝具を解除する。
『なるほど、暗黒霧都（ザ・ミスト）は硫酸を含んだ霧が産んだ災害を逸話とした宝具だからね。ただの人間には毒ってことだね』
『そういうこと。魔術師とか魔法使い相手だとこう簡単にはいかないよ』
気絶したことを確認したあとに武器を探り当ててそれをとりあえず使えないように破壊した。

「さて、急がないと」
僕は塔城さんが破壊したであろう祭壇があった場所にある階段を降りていった。
「アーシア!!」
「この声はいち兄?」
急いで降りていくと、いち兄の叫び声が聞こえてきた。
「もっと早くいかないとでもどうすれば」
考えながら尚且つ早く下へと降りていくとあることを思い出した。
「そうだ!プロモーションだ。あれを使えば」
リアス部長が言っていた兵士(ポーン)の特性。ここで使ってみよう。
「速く降りるなら、やっぱり…」
深呼吸を数回する。そして意を決して唱える。
「プロモーション　騎士(ナイト)!」
すると僕の中にある駒が変わったような気がした。
「行くよ」
僕は素早く走る。と言うか想像以上のスピードに少し怖じけついた。
「は、速すぎる」
でも、とりあえず扉が見えてきた。

　僕は勢いに任せてそのまま扉を開ける。
「はぁはぁはぁ、いち兄！」
「藤丸くん！」
「アスカ！」
　そこには大量のはぐれ神父とあの堕天使の姿があった。
「儀式は終わったわ。早く消えなさい！」
「くっ」
「いち兄、このままじゃダメだ！一旦上に！」
「分かった！」
　僕は指示を出しながら、ナイフで敵を倒していく。
「数が多すぎます」
「これはじり貧かな？」
「木場先輩と塔城さん。お願いがあります」
　僕はふたりにお願いをする。
「あの神父たちを一纏めに出来ますか？」
「…私は出来ます」
「僕も一応できるよ。何かするつもりなのかい」

「僕の神器を使って纏まったところを攻撃します」
　そういたってシンプルな一網打尽の作戦だ。
「わかった。最後は頼むよ」
「…期待してます」
「はい！」
　という事で。
『ジャック、次はギルに代わってくれないか』
『ええー、まだ解体し足りないよ。マスター』
『また今度ね？お願い』
　ジャックは渋々了承してくれた。今度はのびのび使ってあげよう。
『ギル、天の鎖以外でも攻撃はできるんだよね？』
『はい、でも射出量はそこまで多くないですからね？』
『わかってる。今、二人がひとつの場所に神父たちを集めてる。それなら少ない量での射出でも間に合うでしょ』
　ギルは素直に頷いてくれた。よしなら。
「ｃｈａｎｇｅアーチャー」
　ギルの能力に写った僕は早速宝物庫と空間を繋げる。

「今だよ、藤丸くん！」
「今です」
「離れてください！」
　僕の合図にしたがって二人が離れる。それと同時に射出をする。
「ぐぁぁぁぁぁ」
「目がああぁぁぁぁ」
「ぎゃああぁぁぁぁ」
　ゲートから出た宝具たちは神父たちを襲い、倒していく。
「ちっ、使えないわね」
「あとはお前だけだ。レイナーレ」
「ふっ、高々下級悪魔風情が調子に載るな！」
　光の槍が飛んでくる。それを僕たちはうまく避けていく。
「ちっ、それよりアイツを追わないとね」
「な、いち兄をまた殺す気か」
「ええ、だってこのままだと私の任務が失敗したことになっちゃうもの」
「行かせるか！」
　僕は天の鎖で拘束しようとするけど、間に合わなかった。

「クソ！」
「落ち着いて、それにイッセーくんなら大丈夫だよ」
「？あれ、木場先輩っていち兄をそんな風に呼んでましたっけ？」
「ああ、ここに来る途中ね、イッセーくんにこういう風に呼べって言われたんだよ」
　なるほど、まあいち兄も仲間ってことで呼ばせてるんだろうね。
「じゃあ、僕も名前で呼んで大丈夫だよ。仲間ですしね」
「そうかい？なら、アスカくんと呼ばせてもらうよ」
「私も木場先輩と同じように呼ばせてもらいます」
　おお、塔城さんも呼んでくれるんだ。あまり、流れに流されないと思ってたよ。
「あら、終わってたみたいね」
「あらあら、早いですわね」
「リアス部長に姫島副部長!?いつからそこに」
「つい先程よ。それにそろそろイッセーの方も決着が着くみたいよ」
　すごいな。お見通しって訳かな？
「さあ、行きましょう。幸いワープで飛んでいけるから大丈夫よ」
　なるほど、飛ぶんだ。
「いち兄！」

「アスカ？」
　おお、なんというか満身創痍ですなぁ。
「大丈夫かい、イッセーくん」
「遅いぜ、イケメン王子」
　まったく、軽口は叩けるみたいだね。
「あれ？いち兄の神器ってそんな形だったけ？」
　よく見るとなんか形が変わってるような。
「そう、そう言うことなのね」
「リアス部長？」
　なんか一人で納得なさってますね。
「部長、連れてきました」
「ありがとう、小猫。朱乃」
「はい」
　うわー、塔城さんが引きずってきたレイナーレに朱乃さんが容赦なく水をかける。
「お目覚めみたいね。堕ちた天使さん」
「その紅い髪。グレモリーの一族か」
「貴方がイッセーに負けた要因は一つよ。この子神器を間違えたこと」

「神器をですって」
　神器を間違えた？どういうことだろう。
「イッセーに宿っている神器は神滅具（ロンギヌス）の内の赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）。一時的に神すら殺す力を得るという神器よ」
「な、神をも殺す力を得るという神滅具（ロンギヌス）がこんなガキに！」
　そんなものが存在するんだ。じゃあ、僕の神器はそれ以下かな？
「さぁ、言い残すことはないかしら」
「イッセーくん！」
　この堕天使……！
「くっ！部長、お願いします」
「私の下僕に近寄るな！」
　リアス部長の滅びの魔力で堕天使レイナーレは跡形もなく消え去った。
　あとに残ったのはアーシアさんのと思われる神器だけしか残らなかった。
「アーシア」
「いち兄、諦めるのは早いと思うよ」
「え？」
「リアス部長、この子アーシアさんを悪魔の駒（イービル・ピース）で悪魔としての生を与えることは可能で

すか」

リアス部長は少し考え込むとおもむろに僧侶(ビショップ)の駒をとって、神器と一緒に置く。

「異例だけど、やってみる価値はあるわね」

そしてアーシアさんの胸元で輝く駒が入っていく。

「あれ、…わたし？」

「アーシア！」

「成功みたいね」

よかったね、いち兄。

いち兄が涙流しながら喜ぶ姿をみてそう思った。

8話

アーシアさんが転生悪魔として生活をはじめてはや数週間の時が過ぎた。今はいち兄の家でホームステイとして居候させてもらっていた。

『やあ！マスター、久しぶり』

『久しぶりって昨日の夜にあってるじゃないか』

『えへへ、そうでしたね』

悪びれもしない笑顔浮かべるギル。そしてその隣にはジャックと……。

『マスター！今日もいい子いい子してぇ～』

『いいよー。ところでギル、その隣にいる男性は誰なの？』

『ああ、そうだった。今日はね、新しい仲間を紹介しようとして呼んだんだよ』

仲間と言う単語に僕は胸を踊らせていた。今度はどんな英雄が現れたのか。気になってしかないのだ。

『初めまして、マスター。セイバー、真名はジークフリート。よろしく頼む』

『ジークフリートって北欧に起源がある英雄だよね？確かニーベルンゲンの歌に出てくるファヴニールを倒した龍殺しだよね』

『ああ、それであっている。マスターは博識なのだな』
『え、そうかな？えへへ、それほどでもないかな』
誉められるのはやっぱり照れ臭いよね。
『それで、ジークフリートもやっぱり能力とかあるの？』
『ああ、俺はセイバーのクラスだからな。高い剣術と並外れたステイタスは所持している』
『まあ、セイバーは七騎のクラスのなかで優良とされたクラスですからね』
なるほど、セイバーのクラスってそう言われてんだ。
『それと俺は常時発動型の宝具を所持している』
『常時発動型の宝具？』
『まあ、常に発動状態ってことですよ。まあ、名前とかは言わなくてもそのまま発動されますから』
ほへぇ、そんな宝具も存在するんだ。宝具って不思議な武器だね。
『その常時発動型の宝具って何か由来とかあるの？』
『ああ、俺はファブニールの血を浴びたことによって背中以外は変質し、不死身の体となってしまった。その逸話が宝具として昇華したものだ』
そう言えば、ジーク・フリートって背中から矢で刺されたことによって死んだんだよ

ね。しかもその理由と言うのは、妻とその友人とのつまらない張り合いのせいだったような気がしたな。

『俺が主に使っている宝具は幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）だ』

『バルムンク？』

『ああ、俺が邪龍ファブニールを倒した剣が宝具になったものだ。聖剣としての、魔剣としての性質を持っている。これは龍殺しの概念が含まれている』

龍殺しの概念、か。かっこいいなー。

『という訳でこれからよろしくね。ジーク・フリート』

『ああ、こちらからもよろしく頼む』

と言うところで僕の意識は覚醒した。

「ふわぁ～。よく寝た～」

時計を見ると七時半を指していた。

「新しい仲間、か。まさか彼の龍殺しの英雄とはね」

龍殺し。悪龍、邪龍といった龍を、幻想種の中で最強の種族を倒した英雄の事を総じて呼ぶ。

その中でもジークフリートは有名である。

「さて、そろそろ行かないと。今日は用事もあるみたいだしね」

僕は部活をするために制服に着替えて朝食を食べ、歯を磨き、家を出た。
「おはようございます」
「おう、アスカ。お前が最後だぞ」
「うるさいなぁ、いつも遅刻ギリギリの人そんなこと言われたくないよ」
僕の言葉に反論の余地がなかったようでいち兄は黙り混んでしまった。
「おはよう、アスカくん」
「おはようございます、木場先輩」
「おはようございますわ、アスカくん」
「おはようございます、姫島副部長」
「…おはようございます、アスカくん」
「おはよう、塔城さん」
僕が来たことに気づいてくれた人たちから挨拶をしてくれる。
「あら、おはよう。アスカ」
「おはようございます、リアス部長」
最後にリアス部長に挨拶した。
「さて、今日はイッセーとアスカ、アーシアは使い魔と契約しにいくわよ」
「「使い魔？」」

使い魔、か。僕の神器も日本語訳だと使い魔って言葉が使われているんだよね。
「使い魔ですか？」
「ええ、そうよ。イッセーは一度あったことがあるはずよ」
「ええ、そうなの。いち兄」
「え、いや。俺は身に覚えがないんだが」
「うふふ、これが私の使い魔よ」
リアス部長が手をかざすと可愛らしい蝙蝠が現れた。
「う～ん、やっぱり見覚えは」
「ふふ、ならこれならどうかしら」
すると、蝙蝠が突然人形になった。しかも女性である。
「ああ！あのときの…！」
どうやら思い出したみたいだけどあの姿じゃ……。
「まあ、さっきまでの姿じゃわからないよね」
「でも、きれいな人でいいのでしょうか？」
「アルジェント先輩、きれいな蝙蝠ではないでしょうか」
部長は蝙蝠なのか。塔城さんたちも使い魔とか持ってるのかな？
「姫島副部長たちとかも使い魔を持ってるんですか？」

「ええ、持っていますわよ。私はこの子ですわ」
　現れたのは小さな鬼だった。なんか物語に出てくる鬼とは少し違うね。
「僕はこの子だよ」
「お前のはいい」
「いち兄、ダメだよそんなこと言っちゃ。すいません、木場先輩。先輩の使い魔はカッコいいですね」
「ありがとう、アスカくん」
　木場先輩はとりなのか。なんか見事に王子さまって感じがする。
「私のはこの子です」
「うわー、とても可愛らしいですね。小猫ちゃん」
「うんうん、小猫ちゃんにぴったりだよ」
　どうやら、いち兄とアルジェント先輩は塔城さんの使い魔の事を気に入ったみたいだ。それに、しても猫か。
「?…どうかしましたか?アスカくん」
「うん、なんか塔城さんには猫が似合うなぁって。たまに見せるしぐさとか猫ぽいし」
「…そうでしょうか?」
　うーん、自分では気づいていないのかな?

「ほら、たまに陽だまりで丸くなって寝てるし、小さいし、好奇心多いしさ」
「あら、小猫ったらそんなことしてるのね」
「うふふ、可愛らしいですわね」
「しかし、アスカくんもよく知ってるね」
「だって、よく家で遊びに来ては寝てますから」
「「「!?」」」
　あれ、なんか皆驚いてる？
「あの、どうかしましたか？」
「アスカ、それは本当なの？」
「ええ」
「毎日ですの？」
「あ、いえ。祝日と土日とか遊びに来ますね。たまあに悪魔家業がない平日にもふらっと現れては居なくなってますね」
　毎度不思議に思うんだけどどうして家の場所が分かったのかな？
「まあ、詳しい話はまた今度ききましょう聞きましょう。そろそろ来る頃だろうし」
「誰が来るんですか？部長」
　いち兄が質問すると扉を誰かがノックした。

「ちょうど来たみたいね。入って大丈夫よ、ソーナ」
「リアス、あまり学校のなかでその名前を呼ばないでちょうだい」
「え？生徒会長？」
「あら、アスカくん。お久しぶりですね」
　まさか、生徒会長も……。
「あら、二人は知り合いなのね。紹介するわ、私の幼馴染みであり、同じ７２柱の悪魔である支取蒼那こと、ソーナ・シトリーよ」
「初めまして、ソーナ・シトリーです。そしてこっちは私の眷属の」
「初めまして、ソーナ・シトリー様の兵士（ポーン）の匙元志郎です。よろしく」
　匙元志郎先輩って最近生徒会に入った男子だったような。
「初めまして、リアス・グレモリー様の僧侶（ビショップ）のアーシア・アルジェントです。よろしくお願いします、匙さん」
「リアス・グレモリー様の兵士（ポーン）の兵藤一誠だ。同じ兵士（ポーン）としてよろしくな」
「同じくリアス・グレモリー様の兵士（ポーン）の藤丸アスカです。よろしくお願いします、匙先輩」
　いやー、同じ兵士（ポーン）で転生悪魔ならこれから仲良くしていけそうだよね。
「よろしくね、アーシアさん。同じ転生悪魔としてこれからは仲良くしていこう！」

「「……」」
　なんだろう、僕といち兄を無視してアルジェント先輩ばかり握手をしていていっこうに手を離そうとしない。
「…あの僕たちとは？」
「ああ、よろしくな」
　カッチン…。今のは僕でも頭に来たよ。
「おい、テメェなに人の彼女の手をいつまで触ってんだ！」
「「えええぇぇぇ！」」
　いち兄…い、いつのま……。
「いつのまにアーシアさんを脅迫したんだよ！」
「ちょっと待て！なんで俺が脅迫したって事になるんだよ！」
「あら、アスカは知らなかったの？」
「え、リアス部長は知ってたんですか！」
「うふふ、イッセーくんとアーシアちゃんはラブラブのカップルとして有名ですわよ」
　な、な…んだと……。
「木場先輩と塔城さんも知っていたんですか？」
「うん、なんでもイッセーくんはアーシアさんと付き合ってから変わったってね」

「はい、変態な行動をとらなくなったみたいです」
まさか、いち兄が彼女を作るなんて…。おじさんとおばさんもさぞ喜んだだろうな。
「はぁ、それより匙先輩をボッコボコにして良いですか。さっきの態度はカチンときました」
「ダメよ、確かに彼の態度は流石にどうかと思ったけど」
「すいません、後で匙にはお仕置きをしておきますから」
お仕置き、か。なにされるんだろう。
「それより行きましょう。時間がなくなってしまうわよ」
「そうね、朱乃。魔法陣の準備はできてるわね」
やっと行けるんだ。使い魔ってどんなのがいるんだろう。楽しみだな。
「ゲットだぜ!」
「うおっ!なんですか、このパチもんは!」
「彼はザトゥージさんよ。使い魔マスターを目指しているのよ」
本当にパチもんだよ。よく作者とか関連会社の人が怒らなかったなぁ。
「ほうほう、リアス嬢とソーナ嬢が言っていた眷属か。まあ、ここは俺に任せておけよ。ところでどんな使い魔がいいんだ?毒持ちか、強いやつか、または可愛い系か」
可愛い系とかあるんだね。

「それじゃあ、これを渡しておくぜ」
「これって使い魔リスト？」
「おお、そこから選んでもらっても構わないぜ」
「いや、それよりなんか明らかに使い魔ってレベルを越えてるやつが載ってるんだけど」
　そこに載ってたのは、ティアマットと書かれているドラゴンだった。
「ああ、今はドラゴンの時期だからな。もしかしたら出会うかもしれないぞ」
「ティアマットは五大龍王の中でも最強のドラゴンとして有名ね。イッセー、ティアマットを使い魔にしなさい。伝説の赤い龍と最強のドラゴン。いいじゃない！」
「部長！俺には無理です！」
「匙、貴方なら出来ますね」
「無理です、会長！」
　うん、まあ普通に考えたら無理だよね。
「まあ、出会わないことを祈っておくことだな」
　二人は一生懸命祈ってるけどフラグだよね。
「ねえ、木場先輩。あれってフラグじゃあ」
「あはは、まあでも祈って損はないんじゃないかな」
「…憐れですね」

おお、塔城さんが辛辣ですね。今までの恨みでしょうか。誰のとは言わないけど。
「それより五大龍王ってなんですか？」
「うふふ、説明しますわね。五大龍王とはドラゴンの中でも異質な力を持った5体のドラゴンの総称ですわ」
「ほうほう、そんなものを使い魔にしろというリアス部長は鬼ですね」
いくらなんでも無茶じゃないんですかね。
こうして僕たちは使い魔の森を歩き始めた。
「お、あそこにウィンディーネがいるぞ」
「何処だ!?」
匙先輩っていち兄と同類なんじゃ。まあ、僕も気にはなるんですけど。
「…あれがウィンディーネ？」
そこにいたのは歴戦の勇者すら臆するだろう筋肉を持ち、凄まじい肉体美を持つウィンディーネがいた。
「いやいや、あれはウィンディーネじゃないだろ！」
「何か性別と言う壁を越えた存在だよ！」
「まあ、アイツらも住みかを求めて争っていたからな。まあ、でもああいうのもいいだろ」

よくない！と僕たち三人は声を揃えて否定した。そのあともなんとか探すけどなかなか見つからずにいた。
「あれ、あそこにいるのはなんだ？」
「ああ、あれは蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）だな。龍王候補としても有名なドラゴンだ」
ん？なんかこっちに近づいてきているような……。
「え？」
「うふふ、どうやらアーシアを気に入ったようね」
「あらあら、これは決まりですわね」
うん、どうやらアルジェント先輩の使い魔は決まりのようだ。
「しかしこいつ可愛くない目付きだな」
「お、あまり迂闊に触らない方がいいぞ」
「ぎゃあああああ!!」
「そいつはオスでな。他種族のオスを嫌う習性があるんだよ」
なるほど、これは護身用としても丁度良い使い魔かもしれないね。
「はぁ、結局使い魔はゲットできなかったか」
「仕方ないよ。今度に期待しようよ」
「そうだな」

あれから数十分探すも見つからず僕といち兄、匙先輩は完全に諦めモードでした。
「仕方ないわね。今日は帰りましょうか」
こうして帰ることになったのだが。
「あれ？なんか一気に暗くなりました？」
「強い魔力が近づいてくるわね」
「ええ、魔王さまクラスの魔力よ」
魔王さまクラスの魔力の持ち主。しかもこの森でってことは……。
「懐かしい気配がしたからここに来てみたが、まさかドライグの宿主がいるとはな」
「上!!」
そこには言葉にできないほど美しいドラゴンがいた。
「私こそ天魔の業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）ティアマットだ」
龍王最強が来ちゃいました！

9話

前回のあらすじ！使い魔を捕まえに来た僕たちオカルト研究部と生徒会のソーナ会長に匙先輩。幾つかの使い魔を見てきたが結局使い魔を捕まえることが出来たのはアルジェント先輩だけで、諦めて帰ろうとしたときに上空から現れたのは五大龍王の一角にして最強のドラゴンの天魔の業龍（カオスカルマドラゴン）ティアマットだった。

「ドライグはどうやら目覚めてはいないようだな」
「あれが龍王最強のドラゴン……」
蒼い。青よりもとても深く淡い蒼。こんなドラゴンがいるなんて…。
「それに珍しい神器使いもいるじゃないか」
「え？僕のことですか？」
ティアマットさん？は僕を見ながら何やら好戦的な笑みを浮かべていた。
「リアス、アスカくんの神器はいったいどう言うものなのかしら」
「確か、神器のなかにいる英雄や反英雄の魂が宿っていて武器とその能力が使えるみたいよ」

「英雄、ですか？よく悪魔になりましたね」
「まあ、反英雄、つまり英雄ではないけど平和をもたらした英雄もいるみたいだし、不思議ではないでしょ」
　リアス部長がソーナ会長に僕の神器のことを説明していた。その隣で聞いていた匙先輩は驚いているけどね。
「そうだな。ドライグが目覚めていない以上、私は君に興味を持ったぞ」
「僕に？」
　まさか五大龍王で最強のドラゴンであるティアマットさんが僕に興味を持つなんて。
「そこで提案なのだが、私と戦ってみてくれないか」
「ぼ、僕がですか!?」
「なに悪い話ではない。君が勝てば私は君の使い魔になろう。もし負ければ…」
「ま、負けたら…」
　ど、どうなるのかな？
「負けたら私の命令をひとつ聞いてもらうことにしよう」
「わ、わかりました。それで条件みたいのは…？」
「そうだな、私に傷を一つでも負わせることが出来れば君の勝ち、そして私が君を戦えなくさせるまたは君が降参すれば君の敗けだ」

シンプルだろと笑顔でいってくるけど。じょ、条件が厳しいような。
「わ、わかりました。その勝負、受けてたちます！」
こうして僕とティアマットさんの決闘が始まるのであった。
「それではいくぞ！」
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）ｍｏｄｅアーチャー」
僕はギルの力を最初に使うことにした。
『マスター、龍殺しの概念を持つ宝具なら少ないけどあるよ』
『ほんと！でも少ないんだ』
僕は空間を繋いで宝物庫にある龍殺しの概念をもつ宝具を射出する。
「ふん！こんな物では私には通用しないぞ」
「嘘！」
ティアマットさんが放った魔法で僕が射出した宝具は地面に叩き落とされた。
『まさか、全部叩き落とすなんて』
『マスター（おかあさん）、私がやろうか？』
『いや、ジャックじゃ荷が重いよ』
どうしよう、龍殺しの概念ももつ武器は生半可な物だと叩き落とされちゃうよね。
「なら、これでどうです！天の鎖！」

「ほう、グレイプニルと同じような鎖か。だが、そんなもの当たらなければどうとでもないぞ！」
「くっ、まだまだ！」
速い。とにかく速すぎる。目で追えるけどそれでも天の鎖が追い付かない。
『マスター、俺に変わってくれ』
『ジーク。そうか！君なら！』
僕はあることを思い出す。僕のなかには居るじゃないか本家本元の龍殺しの英雄が……！
「ｃｈａｎｇｅセイバー！」
すると僕の手には剣がそしてマントと鎧が装着されていた。
「あれは新しい英雄の力かしら」
「あらあら、どうやらそうみたいですわね」
「見たところ、僕と同じ剣士みたいだね」
「新しいｍｏｄｅ」
「あれがアスカくんの神器…」
「……!?」
匙先輩は驚きのあまりに声を出せていない。オカ研のメンバーは何か興味津々であ

る。
「行くぞ！ティアマット！」
「ふん、見てくれだけが変わった程度では私には勝てないぞ！」
「見てくれだけじゃないぞ。プロモーション騎士（ナイト）！」
　僕はジークの能力を使うためにプロモーションで騎士（ナイト）の駒の特性を使うことにする。
「はあ！」
「ほう、なかなか良い動きだ。だが、まだ甘い！」
「ぐう、そこだ！」
　うう、やっぱりティアマットさんの攻撃は一撃一撃が重たい。まるで鉛の塊を受けてるみたいだ。
「しかし妙な体だ。本来なら致命傷を負っても可笑しくない攻撃をしているのだが」
　なんか聞いちゃいけない言葉が聞こえてきたような気がするよ！
『マスター、ある程度は俺の宝具でダメージを軽減しているがあまり長引くとこちらが不利だ』
『わかったよ、ジーク』
　ジークの言うとおり。こっちはドラゴンであるティアマットさんのように魔力量が膨大な訳じゃない。早めに決着をつけないと。

「これなら」
「ほう、撹乱するつもりのようだな」
僕は騎士（ナイト）の特性を最大限に活かして、まるで猛スピードで左右上下に跳ねるスーパーボールのような動きでティアマットさんを翻弄させる作戦にでる。
「ふん、小賢しい！」
するとティアマットさんは魔法で辺り一帯に攻撃をして来た。
「ぐがぁ！」
これもダメなのか。ならどうすれば……。
『マスター、俺の宝具を使おう』
『ジークの宝具って確か……』
『龍殺しの概念が宿っている宝具だ』
そうだ。でも、それではティアマットさんが……。
『死なないほどの威力に抑えてみよう。できるかどうかはわからないがな』
『わかった。こうなったら自棄だね』
『ああ、その意気だ。マスター』
僕は吹き飛ばされながらもなんとか空中で体制を立て直す。英雄たちの力を使えば簡単にできる。

「これで、決める！」
「ほう、なら貴様の全力。私が受けてたとう」
　僕は魔力を剣に流す。すると一部の部分に魔力が溜まっていくがわかる。
「邪悪なる竜は失墜し、世界は今落陽に至る」
「ほう、魔力を剣に溜めて放つつもりか」
　分かっていても避けるつもりはないみたいだ。なら、僕も遠慮なくいかせてもらう！
「撃ち落とす――『幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）』!!」
　放たれるは蒼い閃光。それはかつて龍殺しの英雄ジーク・フリートが邪龍ファブニールを撃ち落とした逸話が宝具となり昇華された姿。それがティアマットに襲いかかる。
「私も、私も貴様の心意気答えよう！」
「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
　ティアマットさんはそのまま僕が放った宝具に対抗すべく魔法を放つ。
「な、なんて。戦いなの」
「これではこの辺り一体が更地になってまいますわね」
「…膨大な魔力のぶつかり合い」
「こんな戦いはなかなか見れないね」
「アーシア、飛ばされないように掴まってくれ」

「は、はい！」
「凄まじいですね」
「会長、アイツ本当に俺と同じ兵士（ポーン）なんですか!?」
　両者の最高級の魔力をもって放つ技は辺りを巻き込み木々を吹き飛ばし、地を割るとてつもないものになっていた。
『くっ、このままだと押し負ける』
『マスター、大丈夫だ。それに宝具を使うときはそんな弱気になってはいけない』
『そうだよ、マスター。僕たちの宝具と言うのはね、魂みたいなものなんだよ』
『使い手がそんな弱気じゃなダメなんだよ、マスター（おかあさん）』
　魂……。そうなんだね。なら、こんな弱気になってたらダメだよね！
「剣よ！もっと満ちろ！」
「ぐぅ！」
　僕は残りの全魔力を剣へと流し込み、うち放った。
「うおおおぉぉぉぉ!!!」
「はあああぁぁぁぁ!!!」
　そのままぶつかり合った魔力は爆発した。
「くぅ、アスカ！」

「アスカくん！」
「アスカくん！」
「…返事をしてください、アスカくん！」
「アスカさん！」
「アスカぁ！」
「アスカくん……！」
「藤丸！」
リアスたちは爆発による余波に耐え、アスカくんの無事を確認すべく名前を叫ぶ。
「…僕の勝ちです……」
「ええ、そして私の敗けみたいね」
煙が晴れて見えてきたのは満身創痍のアスカと腕から血を流すティアマットの姿だった。
かくして僕とティアマットさんの勝負はギリギリのところで僕が勝利を納めました。
「まさか、私が負けるとはな」
「あの、大丈夫ですか？そのドラゴンであるティアマットさんには毒でしたよね」
「ふふ、なにこれくらいなら大丈夫だ。それより約束を果たそう」
約束……、あっ。

「使い魔になってくれるんですよね」
「ああ、そうだ。お前なら暇はしないだろ」
「あ、あはは」
　暇しないかは別なんじゃとはけして言わなかった。
「うふふ、まさかアスカがティアマットと契約するなんて」
「ええ、予想外のことは起こりうるものですね」
　なんだか、あっちの方でリアス部長とソーナ会長がなにか話しているけどどうかしたのかな？
「さて、私は少し支度をするから待っていてほしい」
「支度？」
「なに、これから主である貴様の拠点で過ごすことにしたのだよ」
「え、いやでもティアマットさんのその姿じゃ」
　間違いなく騒ぎになる。というか最悪研究材料にされちゃないそうだよ。
「なに、心配ない。ここで待っていてくれ」
　そういうとそのまま森へと入っていくと、数秒後に綺麗な蒼い髪の女性が現れた。
「ふむ、久々にすると少し違和感があるな」
「もしかして、ティアマットさん？」

「ああ、それとティアマットさんではなくティアで構わない。よろしく頼むぞ、アスカ」
「こちらこそよろしくね。ティア」
　こうして僕は五大龍王の一角であるティアマットさんことティアを使い魔として仲良くしていくのであった。

10話

　ここ最近のリアス部長は様子がおかしい。
「リアス部長、ただいま戻りました」
「……」
「リアス部長？」
　無視しているわけではないようだ。
「リアス部長！」
「!?、アスカ。お帰りなさい」
「はい、ただいま戻りました。何かあったんですか？なんだか上の空でしたよ」
「いいえ、気にしないで。ちょっと、考え込んでいただけだから」
　そう言うとまたリアス部長は考え込んでしまった。こんなのがここ数日続いている。
「リアス部長はどうしたんだろう……」
「イッセーさん、あーん」
「あーん、うんうまい！アーシアの料理はうまいな！」
「えへへ、ならもう一口どうですか？」

「いただきまーすってアスカやめろ！俺の背中に箸を刺そうとするな！」
　まったくお昼ぐらいはイチャづかないで食べれないのかな……。
「部長が悩んでるんだよな。それはここ最近俺とアーシアもわかってたぞ？」
「はい、部長さんなんだか浮かない顔をしていました」
「やっぱり、二人から見てもそう思うよね」
　このバカップルでさえ気づいているんだから姫島副部長や木場先輩、塔城さんも気づいているんだよね。
「次の休み時間に木場辺りに聞いてみるぜ」
「うん、お願いね」
　心配だ。なにかよくないことでもリアス部長の周りで起きてるのかな？
「それなら僕も思っていたよ。それで朱乃さんに今日聞いてみようと思ったんだ」
「そうなんですか」
　放課後になり僕といち兄にアルジェント先輩、木場先輩で部室へ向かいながら木場先輩にも聞いてみた。
「でも、どうして姫島副部長なんですか？」
「ああ、それは気になった」
「あはは、朱乃さんはあれでも部長の懐刀だからね。何か事情くらいは知っているはず

だよ。それはそうと小猫ちゃんは一緒じゃなかったのかい？」
「ああ、塔城さんなら先に部室へと向かいましたよ。なんでもとっておいたケーキを食べたいみたいですから」
その事を話すと木場先輩は苦笑いを浮かべていた。
そして、部室の前へ着くと木場先輩が不意に止まる。
「まさか、ここに来るまで気づかないなんて」
「え？」
そのまま扉を開くといつも通りリアス部長と姫島副部長、塔城さんがいた。そして、そこにはもう一人、見知らぬ人物がいた。
「リアス部長、その人は…」
「警戒しないで。この人は」
「私はグレモリー家に使えています。メイドのグレイフィアともうします」
メイドって実在するんだなぁーと思った。と言うかリアス部長って本物のお姫様か何かなのかな。
「初めまして、リアス様の兵士（ポーン）をさせてもらっています。藤丸アスカです」
「お、同じく兵士（ポーン）の兵藤一誠です！」
「僧侶（ビショップ）のアーシア・アルジェントともうします」

僕たちが自己紹介すると、グレイフィアさんはそのまま僕といち兄をみて。
「そう、貴方が伝説の赤き龍を身に宿し、貴方はかつての英雄たちを身に宿した者……」
何か言っていたみたいだけど、僕といち兄には聞こえなかった。

「それで部長。なんでグレイフィアさんがここに？」
「それは」
「いいわ、グレイフィア。私が話すから」
うん？なんかリアス部長が深刻そうな顔つきになっているような？
「実はね…」
「な、なんだ!?」
いち兄が騒ぎだした。いや、それは仕方ないことだ。何故なら急に炎と共に魔法陣が表れたのだから。
「フェニックス」
「え？」
フェニックス？たしか不死鳥や鳳凰としてアジアの地方で祀られていたりするあのフェニックス？
「ふう、やっぱり人間界の空気は肌に合わないな」

「ライザー……！」
「よう、愛しのリアス」
　な、なんだ。このホストかぶれの男は！
「触らないで、ライザー」
「あの、この人は？」
「ん、なんだリアス。俺のことを話していないのか」
「話す必要がないもの」
　なんだか、仲がよろしくないようで。
「この方はライザー・フェニックス様。フェニックス家の三男にしてリアス様の婚約者です」
「こ、婚約者!!」
　あまりの真実に僕といち兄の声が部室に木霊した。
「お茶ですわ」
「うん、うまいな。リアスの女王（クイーン）がいれたお茶は」
「ありがとうございますわ」
　うん、今の部室の空気は最悪だ。
　朱乃さんもいつもとは違って能面みたいな笑顔だし、リアス部長は誰が見ても不機嫌

だし、木場先輩と塔城さんは臨戦態勢にいつでも入れるようにしてるし、もう最悪を越えて危険地帯だよ。
「ライザー、私は言ったはずよ！貴方とは結婚しないと。それにお父様とお兄様も急ぎすぎよ。私が大学を出るまでは自由にして良いはずよ」
「ああ、だから大学は自由にして良い。俺と結婚した後でもな」
　思い出したけど、そういえばソロモン７２柱の悪魔のなかにフェニックスがいたことを。でも、こっちだと悪魔と言うよりかは聖なる生き物として認識が根付いているよね。
「何度も言わせないでちょうだい。それに婿養子だってちゃんと見つけたわよ」
「そうか、そうか。それは俺の」
「いいえ、貴方ではないわ。ライザー。私は私が心から愛したヒトと結婚するのよ。そしてそれは貴方では決してないわ！」
　へぇ、リアス部長にもそんな人ができたんですね。なんだか、従僕として嬉しいです。
　リアス部長にボロクソ言われているこのライザーさん。顔つきが明らかに変わった。
「俺もなリアス。フェニックス家の看板を背負ってここまで来ているんだ。それに俺は人間界は好かない。この世界の空気と炎は汚れきっている！もし、このままお前が俺との結婚を拒むと言うのなら眷属を殺してでもお前を連れていくぞ」

ライザーさんから放たれる殺気を感じ、僕たちは臨戦態勢に入ろうとした。そう、入ろうとした。けど、その必要性はなかった。なぜなら……。

「お二人ともそこまでにしてください」

グレイフィアさんからはライザーさんをも遥かに越える殺気が流れ出ていたからだ。

「ライザー様、いきすぎた行為はお慎みください。私は魔王　サーゼクス様の命でここに居ることをお忘れですか」

「ははは、最強の女王（クイーン）と呼ばれている貴方を敵にするのは俺としても荷が重い」

「リアス様もその魔力を消してくださいませ」

「……」

うおおお、リアス部長いつのまに滅びの魔力を手に集めていたんだ。

「はぁ、このままでは話しは平行線のままですね。サーゼクス様はこの事を予感していました。ですから、お二人ともここはレーティング・ゲームで決着をつけては如何ですか」

「「レーティング・ゲーム？」」

初めて聞く単語に僕といち兄、アルジェント先輩声に出していた。

「レーティング・ゲームとは悪魔同士の眷属を使った戦いのゲームだと理解してください」

グレイフィアさんからの分かりやすい説明でとりあえずは納得した。
「なるほど、魔王さまも殊勝なことをお考えなさる。リアス、君の眷属はそこの７人だけなのか」
「ええ、そうよ」
リアス部長がそう答えるとライザーは嘲笑う。
「ははは、それだと俺の眷属とまともに戦えるのは雷の巫女だけじゃないか！それに俺の眷属は」
指をならすとライザーの後ろに魔法陣が展開され、炎とともにライザーの眷属が現れた。
「１５人。フルメンバーだぜ」
「うわぁー」
現れた眷属を見て思わずそんな声をあげてしまった。だって、ねぇ。眷属が全員女性とか、ないわぁ。
「ハーレム野郎かよ」
「いち兄、そんな事を言ってるけど。自分もそれを目指していたんだからね」
まさか、眷属が全員女性だなんて誰が思えただろうか。誰も予想は不可能でしょ。
「なんだ、ハーレムは男のロマンだろ」

「いつの時代の台詞だよ。今時そんな事を考えてる奴はただの変態だよ」
「がはぁ！」
なんか後ろで倒れた誰かがいるみたいだけど気にはしない。
「それに貴方はリアス部長の婚約者でしょ。そんな人がいるのにこんなことをしていいんですか？」
「ふん、さっきから下級悪魔ごときが偉そうに俺に意見するじゃないか。何、安心しろ。リアスも俺のハーレムメンバーの一員として愛してやるさ」
ハーレムメンバーの一員として、だと……？
「さあ、リアス。結婚式の会場を決めよう。なに、ドレスなら我が家に伝わるドレスがある。だから、安心して来るが良い」
そのまま、リアス部長に触ろうとした。が、そんな事を許すわけにはいかなった。
「天の鎖」
「なぁ!!」
僕は伸ばした腕を天の鎖で縛り、リアス部長に触れられる前に止めた。
「汚い手で、リアス部長に触れるな」
「貴様ぁ！」
怒りを露にするライザーは天の鎖を外そうとする。

「くそ！なんで外れない！」
「無駄だよ。それはかつて天の牡牛を捕まえた鎖。いくら悪魔でも、不死鳥や鳳凰と呼ばれている貴方では簡単には外せない」
「黙れ！お前たちあのガキを殺せ！」
「一歩も動かない方がいい」
　僕は宝物庫にある名もない聖剣たちを空間を繋いでライザーの眷属の周りに配置する。
「名はないとはいえそれは間違えることのできない聖剣だ。触れれば悪魔である貴方たちがどうなるかはわかっていますよね」
「「……」」
　聖剣で斬られた悪魔は存在そのものが消えるかのように灰となる。それがわかっているなら動くことはしないはずだ。
「アスカ、もうやめて。私なら大丈夫だから」
「…わかりました」
　僕はそのまま聖剣をしまい、天の鎖もライザーから外し、宝物庫へとしまった。
「ライザー、私は貴方にレーティング・ゲームを申し込むわ。十日後の深夜に私との結婚をかけた試合よ」

「いいだろ！それまで身を清めておくんだな！そして、お前！レーティング・ゲームでは覚えていろよ！」
　そんな台詞を残して、ライザーとその眷属は帰っていった。
「リアス、よろしいの。相手はあのフェニックスよ」
「ええ、わかっているわ。グレイフィア、この事は魔王さまに」
「伝えておきましょう」
「そう、ありがとう」
　グレイフィアさんはそのまま僕たちに一礼すると帰っていった。
「さぁ、私たちは十日後。ライザーとレーティング・ゲームをするわ！勝つために明日から強化合宿よ！」
　こうして僕たちは十日後にレーティング・ゲームを控え、それに向けて特訓をすることになった。

１１話

十日後にライザーとのレーティング・ゲームを控えた僕たちオカルト研究部のメンバーは強化合宿と言う名目（本当の意味での強化合宿）でリアス部長の別荘へと向かっていた。

「ぶ、部長…！まだですかぁー！」

「イッセー、それはさっきも聞いたわよ」

「いち兄、ファイトだよ！」

「ふるせぇ！微妙に似ている声真似で励ますな！」

うーん、僕はそこまで穂○果ちゃんに似せてたかな？

「ほら、イッセーくん。ここに山菜があるよ」

「木場、俺にそんな余裕があるように見えるか？」

「イッセー先輩、情けないです」

「小猫ちゃーん！」

木場先輩も励ますが意味もなく、塔城さんのはもはや蔑みだった。

「まぁ、いち兄が音をあげるのも無理ないよね」

何故なら魔法によって本来の三、四倍近い重さの荷物を背負って坂道を登っている。
塔城さんに関しては僕たちの優に三倍近い荷物を背負っている。
「着いたわよ。ここが私の別荘よ」
「うわー」
「ぜぇぜぇ、し、死ぬぅー」
「本当に情けないですね、イッセー先輩」
目の前にあるのは別荘と言うよりはどっちかと言うと豪邸じゃないのかな。
「それじゃあ、着替えてここにまた集合よ」
「「「「はい！」」」」
「あ、それとイッセー、覗いちゃだめよ」
「し、しませんよー」
「あらあら、少し肩が揺れましたわね」
「図星だったみたいですね」
まったく、アルジェント先輩と付き合うようになっても根本的なところは変わらないなぁ。
「男子も別々の部屋があるみたいですし、さっさとそこで着替えちゃいましょう」
「イッセーくん、覗かないでね」

「誰が覗くかよ！」
　木場先輩ってもしかして同性愛者の人じゃないよね。
　一抹の不安を覚えながらも僕は与えられた部屋で着替えることにした。
「それじゃあ、イッセー貴方から祐斗とやってみてちょうだい」
「はい、部長！やるぜ、木場！」
「うん、それじゃあ始めようか」
　まずは木場先輩が相手みたいだ。二人は木刀を構えている。
「はあああ！」
「甘いね」
　いち兄が木場先輩へと走りながら木刀を斬るように降り下ろすけど木場先輩はなんなく避ける。それを数回繰り返されたあとに今度は木場先輩が攻撃を始める。
「もっと視野を広くした方がいいよ」
「くっ、速すぎだろ！」
「そうかな？これでも目で追えるくらいの速さだと思うんだけど」
　確かに木場先輩の速さは目で追えるギリギリの速さだ。でも、普段から運動していなかったいち兄とってはキツいだろうね。
「くそ、速すぎたぞ」

「あはは、まあこれから頑張ろうよ」
「次はアスカよ」
　僕の番が来た。
「あの、神器の使用は…」
「アスカはありで大丈夫よ。貴方はまず自分のｍｏｄｅに慣れといた方がいいから」
　よ、よかった。正直、禁止だったら僕もいち兄と実力は変わらないからね。
『マスター、最初は誰にする』
『うーん、魔術に関しては皆適性がないよね』
『うん、そうだね。今はキャスターのクラスはいないからね』
　うーん、となると…。
『最初はジークで、戦況を見て変わってもらうよ』
『わかったよー』
『了解した、マスター』
『うん、分かったよ。マスター』
　それじゃあ、行くよ！
「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆ｍｏｄｅセイバー」
　マントと鎧に剣を身に付けていた。

「行きますよ、先輩」
「うん、僕の方も準備できたよ」
　木場先輩も神器を使って剣を作っていた。
「木場先輩も神器を持っていたんですね」
「うん、まあね。僕は魔剣を作れるって言う能力だけどね」
　魔剣、か。たしかこの剣も魔剣としての性質を持ってるんだよね。
「はあ！」
「ぐっ！中々やるね！」
「先輩こそ！」
　鍔釣りあい、何度も剣同士で弾き会う。
「!?」
「今だ！ｃｈａｎｇｅアーチャー！」
　バランスを崩した木場先輩に向けて天の鎖を射出する。
「とった！」
「うん、これは僕では無理だね」
「そこまでよ。どうだったかしら、祐斗」
　戦い終え、リアス部長が木場先輩に問いかける。

「はい、アスカくんはよく相手を見ていますね。その証拠に僕がバランスを崩したのを見逃しませんでしたから」
「そうね。状況判断も中々だったわ」
なんか照れ臭いなぁ。誉められるのに慣れてないからな。
「それじゃあ次いくわよ」
木場先輩との特訓は終わり、次へと向かった。
「…えい」
「ぐへぇ！」
「いち兄！」
いち兄が綺麗に放物線上に飛んでいった。
「と、塔城さん。もう少し手加減を」
「これでもしています」
「し、してるんだ。あれでも…」
いち兄が飛んでいく様をみて、戦慄する。
「イッセーが気絶したみたいだし、次はアスカよ」
気絶！そんな一撃を食らったら、僕の体もたないんじゃ。
「早くしましょう、アスカくん」

「え、もうちょっと待って。心の準備は」
「行きます」
「ちょ、ｍｏｄｅアサシン！」
　僕は急いでジャックの力を使った。
『マスター（おかあさん）、あの子斬り刻んでいいの？』
『だ、ダメだよ！仲間なんだから』
　ヤバイよ、ジャックが少し興奮していると思うよ。流石、切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）。
「うまく避けますね」
「これでもいっぱいいっぱいだよ」
　ヤバイ、ナイフで迫り来る拳をいなしていくけど正直キツい。一撃一撃が重たく、手が痺れてきた。
「くっ、手が痛くなってきた」
「すごいですね、よくもっている方です」
「あ、あははは」
　このまま防御し続けても意味がないよね。でも、なかなか攻撃を仕掛けることができないよ。
『マスター、変わろうか？』

『ええ、いいところなんたから邪魔しないでよ』
『あ、あはははは。もう少し頑張ってみるよ』
ギルが変わるかと提案してくれるけど、ジャックも少し怒り始めたから、ギルの提案は断っておいた。
「二人ともそろそろ終わりよ。イッセーも気がついたみたいだわ」
やっと、いち兄が目覚めてくれたお陰で終わりを迎えた。
「もう少しやっていても大丈夫でした」
「か、勘弁してください」
これ以上やったらナイフとか手とか壊れそうだった。
「それじゃあ、次いくわよ」
いち兄も意識がちゃんと覚醒したのを確認して次へと移った。
「次はスクワット五十回を3セットよ」
「はい！」
次はリアス部長からのスパルタ体作りを始まった。
「終わったみたいね。次はこれを背負って坂道を走ってもらうわ」
「こ、これは」
「岩よ」

そう、岩が目の前におかれていた。
「これを背負うんですか？」
「ええ、そうよ。さあ、始めるわよ！」
リアス部長はスパルタ女王でした！
「それじゃあ、魔力を集めるところから始めますわよ」
「「はい！」」
最後は朱乃さんからの魔力による料理教室だった。
「このように体に流れる魔力を手に集めてみましょうか」
「うーーん」
「「できました！」」
「嘘！」
僕とアルジェント先輩は初めてものの数秒で出来たが、いち兄は中々出来ていなかった。
「あらあら、二人は魔力の才能があるようですわね」
「くう、俺だって！」
いち兄が一生懸命魔力の球体を作ろうとしているけど、どんなにやって無理だった。
「それじゃあ、食べましょうか」

あれから結局いち兄は魔力で作ることはできたけどとても小さいものだった。本人はがっかりしていたけど、まあ何とか三人で協力して夕食を作り終えた。
「それで三人の意見を聞きたいのだけど」
「はい、アスカくんに関してはとてもいいですね。力もちゃんと状況で使い分けていますし、能力も個々で違いますからとても相手しずらいですね」
「アーシアちゃんは魔力の才能が高いですわね。これなら、攻撃魔法を簡単なものなら覚えられるかもしれませんわよ」
なるほど、結構分析されてるんだなぁ。
「そして、イッセー先輩がもっとも伸び代がありますね」
「まあ、そうでしょうね。さて、この後はお風呂にでも入りましょうか」
こうして、僕たちの長い特訓が終わりました。
「うーん、喉が渇いたなぁ」
夜中目が覚めてしまい、水を飲みに行くために部屋から出る。
「あれ?リアス部長?」
「あら、アスカじゃない」
リアス部長はいつもはかけていない眼鏡をかけながら何か本を読んでいた。
「それって…」

「ああ、これね。伊達よ。人間界に長くいると癖になってしまったのよ」
「そうなんですか。似合ってますよ」
「あら、ありがとう」
　お世辞とかではなく、本気でそう感じた。
「あの、リアス部長。聞いていいですか？」
「なにかしら」
「どうして、あそこまで結婚を拒否るんですか？確かにライザーのあれには僕も腹が立ちましたが」
　そう聞くと、リアス部長は少し間をあけて話してくれた。
「私はね、グレモリーなのよ」
「……」
「私はリアス・グレモリー。誰もがそんなことは知っているわ。でも、私には必ずグレモリーの名がついてくる。けして、グレモリーでいること嫌気が差しているわけではないわ。誇りに思っているもの。でも、結婚相手は、人生を共にする人だけは、私をグレモリーとしてではなく、ただのリアスとして、グレモリー家とか関係なく私を愛してくれるヒトと結婚したいのよ。それが、私の我儘で、夢なの」
　リアス部長の夢。それは一人の少女が誰しもが夢見る普通のものだったけど、リアス

部長にはそんな事を夢見ることすら難しかった。
「大丈夫ですよ。リアス部長」
「…アスカ」
「その夢は僕が、いえ、僕たちリアス・グレモリーの眷属が守って見せます！だから、そんな悲しそうな顔はしないでください。いつもの凛々しい貴方でいてください」
「…ありがとう、アスカ」
リアス部長は涙を流していた。そして、僕は誓う。ライザーとのゲームは必ず勝って見せると。

１２話

ライザーとのレーティング・ゲーム当日。今は各々で戦いに向けて準備を進めていた。

「なんだか、張り詰めていますね」

「まあ、何だかんだで僕たちにとって初めてのゲームだからね」

初めてってことはリアス部長も素人なのかな？

「初めてなんですか？」

「うん、まあね」

「…元々は成人した悪魔のゲームですから」

なるほど、成人した悪魔のゲーム。だから、リアス部長は猶予を申しで、それが許可されたのかな。

「すいません、遅くなりました」

「遅れてすいません、皆さん」

「大丈夫だよ、まだ部長と朱乃さんも来ていないからね」

確かにまだリアス部長と姫島副部長の姿が見えなかった。何かしているのだろうか。

「遅れてごめんなさいね」
「あ、リアス部長に姫島副部長。それに…」
「グレイフィアです、アスカ様」
　な、なんだか申し訳ない。
「す、すいません。名前を覚えてなくて」
「いいえ、まだ二回しか会っていないので無理もありません」
　確かにまだ二回しか会っていないけど、名前を覚えてないのは失礼だよね。
「リアス様、非公式とはいえ魔王様がお見えになっています」
「…そう。お兄様が来ているのね」
「え、お兄様？」
「あらあら、そう言えばアスカくんにイッセーくん、それにアーシアちゃんは知らなかったのですわね。現四大魔王のお一人である魔王サーゼクス・ルシファー様は部長のお兄様なのですわよ」
「えええええええええええ!!」
「お、驚きです。まさか部長さんのお兄様が魔王様だなんて」
　アルジェント先輩、驚きですとか言うレベルの話じゃないよ。これはすごい主の眷属になっちゃった。

「それよりこれからライザーとのレーティング・ゲームが始まるわ。朱乃、準備はできてるのよね」
「はい、部長。皆さん、あちらにある魔法陣の中に入ってください」
　姫島副部長が指差す方向には大きめの魔法陣が描かれていた。
「それではお嬢様、どうか御武運を」
「ええ、ありがとう。グレイフィア」
　転移するときにグレイフィアさんが見せた笑みは何処か慈しみを帯びたものだった。
「あれ？転移失敗ですか？」
「いいえ、アスカ。外を見てみなさい」
　言われた通りに外を見てみると…。
「な、なんじゃこりゃあ！」
　校庭にある柵の向こう側だけではない、空も何処か紫色を帯びたものに見えた。
「こ、これは一体何なんですか!?」
「悪魔の技術で作ったレプリカよ。本物とさほど変わった事はないわ。ただ場所が次元の狭間なのだけど」
　次元の狭間？なんだろう、その中二心をくすぶる言葉は……。
『マスター、少し想定外の事が起きたよ』

『ギル…。どういう意味?」
突然ギルが喋りかける。
『この場所じゃ強力な宝具は使えないんだ』
『え?宝具が?』
宝具が使えない?それはちょっとキツいんじゃない。
『場所が少し不安定すぎるからかな?それに人数が多すぎるよ。マスターとあのライザーとか言う雑種を含めた眷属だけならまだしも、今回はマスターの仲間もいる。それだけの大人数を一つの空間に留めておくには相当な魔力が必要になる。そんな場所で僕やジークさんの宝具を使ったら…』
『使ったら…』
嫌な予感しかしないし、あまり聞きたくないよ。
『この空間が崩壊する』
『…崩、壊だって』
そんな…。それだと厳しすぎる。ジャックは一対一の宝具だ。それじゃあ戦力差がありすぎる。
『それだとギルの攻撃方法が使えないの?』
空間を繋いで射出するあの攻撃方法まで使えないとなると。

『使えるけど、そこまで強い宝具は出せないよ。数も今まで以上に少なくなる。最悪、天の鎖だけってこともあり得るよ』

天の鎖だけ、となると…。

『人数を減らしても無理かな？』

『どうだろ。いくら人数が減っても相手との人数の差が有りすぎるよ』

確かに、こっちはまだ全部の駒が揃っている訳じゃない。だけど、あっちは全部の駒が揃ったフルメンバーだ。

『時間をかけずに減らすよ。なるべくね』

『うん、たぶんそれが一番良い手だよ』

ここで一旦話をやめて、準備へと取りかかる。

「皆これを身に付けてちょうだい」

「あの、部長これは？」

「これは通信機みたいなものよ。これを使って私が指示したり状況を報告しあったりするのよ」

なるほど、これでやり取りするのか。慣れないからちょっと不安かも。

「それじゃあ、作戦を言い渡すわ」

そして、リアス部長の口から作戦内容が言い渡される。

「わかったかしら。それじゃあゲーム開始よ。貴方たちの力をライザーに見せつけてきなさい！」
「「「「はい!!」」」」
さあ、いよいよあいつを倒すための戦いの始まりだ。
「体育館までご丁寧に作ってあるよ」
「再現力が凄いね」
「…それより早く中へ入りましょう」
僕といち兄、塔城さんは体育館へとやって来た。部長曰く、ここは重要な場所あるらしい。だから、ここをとれば僕たちも動きやすいと言うこと。
「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆ｍｏｄｅアサシン」
僕はジャックの能力を使うためにアサシンのモードになる。
「僕が先に偵察するよ。合図とともに二人は入ってきて」
「わかった。それにしてもアスカの神器っていいよ。使い勝手がよくて」
「まあまあ、いち兄は伝説の龍を宿してるんだから我儘はよくないよ」
僕はそのまま気配遮断の能力を使って中へと入った。
「本当にすごい神器ですね」
「ああ、それじゃあ小猫ちゃん。アスカからの報告を待とうか」

「そうですね」
　イッセーと小猫はそのままアスカからの合図を待つことにした。
「なるほど、敵の数は三人か」
（恐らく、戦車（ルーク）一名に兵士（ポーン）二名ってところかな）
　天井から推測して、イッセーたちに報告する。
「いち兄と塔城さん。相手の数は合計で三人。駒は恐らく戦車（ルーク）一人に兵士（ポーン）が二人だと思われる」
「わかりました、ではこちらはアスカくんの合図に従います」
「なら、まずは舞台裏まで気配を消して入ってください。そこから三秒数えてゼロの合図と共に奇襲をしましょう」
「了解！」
　二人は僕の指示にどうやら従ってくれるみたいだ。
『ジャック、宝具を使うけど。大丈夫？』
『うん、マスター（おかあさん）の使いたいときに使えるよ』
　そして数分後、どうやらいち兄と塔城さんが舞台裏についたみたいだ。
「それじゃあいくよ。３、２、１、０！」
　僕の合図と共にいち兄はよく似た二人の女子の片割れを、塔城さんは戦車（ルーク）と思われる

女子の相手をしていた。
「此よりは地獄。私たちは炎、雨、カーー殺戮を此処に…解体聖母（マリア・ザ・リッパー）！」
僕は宝具を発動と同時に鉄骨を蹴り、一気に距離を近づける。
「な、一体どこから…」
「やあ！」
僕はそのままナイフで斬り、体を更に反転させながら相手にもう一度斬りつけた。
「キャアアアア」
宝具を使い終え、斬られた女の子はそのまま消えた。
『ライザー・フェニックス様の兵士（ポーン）リタイア』
どうやら倒されると消えるみたいだ。まあ、無事なんだろうけど。
「おーい、アスカ！部長から合図来たぞ！」
「わかった！塔城さん！」
「…はい」
僕たちはそのまま体育館を抜けていく。
「な、ここを立ち去るつもり。ここは重要な場所のは…」
ドカーン！音をたてながら体育館は天井を貫く雷が落ちた。
「うふふ、上手くいきましたわね」

「はい、どうやらそうみたいですね」
撃破（テイク）。上手くいけば相手をまとめて倒せる戦略だけど、タイミングを間違えればこちらが危なくなる作戦だ。
「それじゃあ、次にい…」
「撃破（テイク）」
　なんと塔城さんが爆発されてしまった。
「塔城さん！」
「あはは、やはり敵が油断しているときが一番の戦略ですわよ」
　そこには恐らくライザーの女王（クイーン）である女性がいた。
「しっかりして塔城さん！」
「…うっ、もっと、部長のおやくに…」
　そのまま塔城さんは消えてしまった。
『リアス・グレモリー様の戦車（ルーク）リタイアです』
　そこに放送が入る。
「テメェ！よくも小猫ちゃんを！」
「あらあら、赤龍帝はいきが良いみたいね。赤子レベルの魔力のくせして」
「くっ！」

敵の女王（クイーン）がいち兄を挑発する。
「イッセーくん、それにアスカくん。作戦通りこのまま祐斗くんの元へと行って下さい」
「で、でも！」
「行こう、いち兄」
「アスカ！」
「大丈夫だよ、塔城さんの仇は姫島副部長がとってくれるよ。でも、もし副部長が負けたときは」
僕はありったけの殺気を込めた視線をあの女王（クイーン）に向ける。
「僕が殺（倒す）すから」
僕はそのまま作戦通りに木場先輩の元へと行く。
「ああ、アイツがキレちまったよ」
「あらあら、どうやら貴方は怒らせてはいけないメンバーを怒らせたみたいですわよ」
「……」
イッセーはそのままアスカの元へと走り、朱乃は戦闘体勢に入る。
まだまだ、ゲームは始まったはがり。ここからどうなるかは誰にもわからない。

１３話

　僕といち兄は作戦通りに木場先輩と無事に合流することができた。途中でライザーの眷属が何人かリタイアした放送が入ったときは木場先輩の仕掛けた罠が決まったんだなと思った。
「小猫ちゃんのことは残念だったね」
「ああ、今日の小猫ちゃんはなんだかとても気合いが入ってたからな」
「…うん、そうだね」
　木場先輩も塔城さんのことを放送で知っていた。
「それより二人は気づいているかい？」
「ああ、何人かこっちに来てるよな」
「ううん、僕たちと同じく隠れているだけだと思うよ」
　そう、先程から気配が伝わってきているのだ。恐らくライザーの女王（クイーン）以外の眷属全員だと思われる。
「どうする、二人とも」
「いつまでもここにいるよりは先にこっちから仕掛けた方が良いと思います」

「俺もこう言う腹の探り合いって言うのか？そういうの苦手だからなぁー」
　どうやら、僕たちがやるべきことは一つのようだ。
「それじゃあ、僕はモードを変えるよ。ｃｈａｎｇｅセイバー」
『よろしく、ジークフリート』
『了解した、マスター』
　僕は鎧とマントに背中には剣を背負う姿になった。
「よっしゃあ！グレモリー眷属男子トリオであの焼き鳥野郎の眷属にめが飛び出るくらいビックリさせてやろうぜ！」
「うん、そうだね」
「うん、それじゃあ行こうか」
　僕たちはそのまま表に出る。
「出てこい、ライザーの眷属共！俺たちが相手だ！」
《Ｂｏｏｓｔ！》
　いち兄は倍増しながら前に、木場先輩は剣に手をかけて、僕は背中にあるジークフリートの愛剣を抜き構える。
「堂々と正面から敵の前に現れるなど、正気の沙汰とは思えん――だが！」
　出てきたのは恐らく騎士（ナイト）の駒の眷属である。

「私はお前らのようなバカが好きだ！」
「「……」」
　僕といち兄、木場先輩も思っただろうなぁ。ああ、この人も同じバカなのだと。
「私はライザー様に仕える騎士（ナイト）のカーラマインだ。グレモリーのナイトよ、名乗れ！」
「グレモリー様に仕える騎士（ナイト）の木場祐斗。騎士（ナイト）同士の戦いを望んでいたよ！」
「よく言った！リアス・グレモリーの騎士（ナイト）よ！」
　おお、あっちはあっちで始めちゃったよ。と言うか、木場先輩って案外騎士道とかに忠実なのかな？
「…まったく、カーラマインの頭のなかは剣、剣、剣、剣。脳筋なのですから」
「ええっと、囲まれちゃったね」
　どうやら、残りの眷属を全員引き連れてきていたようだよ。
「いち兄、とりあえず二人で頑張ろう」
「お、おお。そうだな」
　少し圧倒されちゃったよ。
　現れたのは金髪の縦ロールの少女に、仮面をつけたいかにも武道家見たいな女の人に、猫耳が似合っている双子かな？、それに大剣を背負っている女の人。たぶん女王（クイーン）を除いたフルメンバーだ。

「それにしても随分と落ち着いているな、リアス・グレモリーの兵士（ポーン）に騎士（ナイト）よ」
「あ、僕も兵士（ポーン）です」
「なに…!?」
あ、うん。この見た目だとやっぱり騎士に見えるよね。モードはセイバーだけど。
「そうか、なんだかすまないな」
「あ、いえ。おきになさらず」
まあ、仕方ないよ。間違えは誰にでもあるからさ。
「それでは行くぞ！」
す、すごい動きだよ。素手だけで彼処までやれるなんて。
「よそ見は」
「いけないにゃ！」
「ッ！」
ええ、なんで僕にだけそんな大人数で押し寄せてくるの!?もしかして初対面の時の事を根に持たれてる!?
「はあ！」
僕はセイバーの力を存分にとはいかないけど、ほれなりに使って相手をする。
「木場、合図したら神器を解放しろ！」

いち兄が何かするみたいだし…。
「せいっ！」
僕は剣である程度ライザーの眷属を後退させるとその場から急いで離れた。
「行くぜ、赤龍帝からの贈り物（ブーステッド・ギア・ギフト）！」
《Ｔｒａｎｓｆｅｒ！》
「今だ、木場！」
「わかったよ、魔剣創造（ソード・バース）！」
す、すごい。地面に刺した状態で発動した木場先輩の神器が今までより強くなってる！
「イッセーくん、今のは…？」
「へへ、特訓の成果のお陰で俺が貯めた力を相手にも送れるようになったんだよ」
うわぁ、すごいなぁ。僕のって自分にしか使えないからもしもの時かに仲間である皆に力を送れないんだよね。
「さて、残りはお前一人だぜ」
「あら、私は戦いませんよ」
「「はあ？」」
どういう意味だろう。と言うか、どうしてここにいるの？

「自己紹介がまだでしたわね。私はレイヴェル・フェニックスですわ。以後お見知りおきを」
「え、フェニックスって……」
「お前はライザーの親戚なのか？」
「妹ですわ」
「え、えええええええ!!」
妹、ｓｉｓｔｅｒ！マジで言ってんの！というか……。
「アイツは変態かよ（なの）！」
実の妹を眷属にするとか変態じゃん！ほら見てよ。木場先輩だって苦笑いを浮かべているよ。
「お兄さま曰く『ほら、妹萌えーとか羨ましがる奴とかいるじゃん？まあ、形だけの眷属だよ』だそうですわ」
なんと言うか、あんな兄貴に付き合わせれているこの人のことが可哀想に見えてきた。
「まあ、それでも貴方たちではお兄さまや私には勝てませんわ」
「それはフェニックスが不死であるからかな？」
「それもありますが」

なにか言おうと仕掛けたそのとき、誰からか通信が入ってきた。
『た、大変です！皆さん！』
「どうした、アーシア」
どうやらアルジェント先輩からのようだ。でも、何処か様子が変だ。
『部長さんが相手の王（キング）からの申し出で一騎討ちをしに屋上に！』
何てこった！ヤバイ、部長がやられたら僕たちは一発で終わりだ！
「急ごう！」
「ああ、アスカの言うとおりだ！行くぞ、き…」
すると、今まで木場先輩がいた場所が急に爆発した。
『リアス・グレモリー様の女王（クイーン）一名、騎士（ナイト）一名、リタイアです』
今の爆発は搭城さんのときと同じ…!!
「女王（クイーン）の仕業か！」
「でも、可笑しいだろ！朱乃さんと戦ってあんな爆発出せるほど魔力が残っているはずがねぇ！」
そうだ！いくらなんでも可笑しすぎる！
「貴方たちが勝てませんわ。ユーベルーナにはフェニックスの涙を持たせてありますもの」

「フェニックスの涙だって」
「ええ、どんな傷すらも忽ち癒えてしまう、私たちフェニックス家の一部と言っても過言ではありませんわ」
　そんなものを持っていたの？なら、姫島副部長はそれのせいで……。
「いち兄、急ごう！」
「ああ！」
「な、勝てないとわかりませんの！」
「勝てる勝てないじゃない。絶対に勝たないといけないんだよ！」
「アスカの言うとおりだ！」
　僕といち兄はそのまま走って屋上へと向かった。
「はぁ、はぁ、はぁ」
「諦めろ、リアス。お前では俺には勝てない」
「諦めないわ！」
　リアスはそのまま滅びの魔力をライザーに向けて放つが効果はなかった。
「私を信じて戦っている下僕がいるのに私がここで諦めたらその子達に顔向けできないわ！」
　そう、アスカがあの日私に言ってくれた。私の夢を眷属全員が守ってみせると。だか

ら……。
「私は絶対諦めない！」
「はぁ、花嫁である君を傷つけたくなかったが」
　ライザーが魔力を放つ。
「少しくらいなら仕方あるまい！」
「くっ！」
　ああ、負けてしまう。この一撃を食らえば、私の負け。
『リアス部長！』
『大丈夫ですか？リアス部長』
『いつもの凛々しい貴方でいてください』
　ああ、どうしてかしらこんな時なのにあの子を、アスカを思い出してしまう。
　そうだ。私はあの子に…きっと…。
「てあ！」
「え…？」
「リアス部長、大丈夫ですか！」
「アーシア、無事か！」
「イッセーさん！」

危ない。あと少し遅かったらリアス部長にあの火の玉が当たるところだった。
「チッ！あのときの糞餓鬼ぃ！」
「申し訳ありません、ライザー様」
「良い、アイツは俺が直々に倒してやる」
「いち兄、女王（クイーン）を任せて平気？」
「ああ、大丈夫だ。それに丁度力もたまったみたいだしな」
それならよかったよ。
僕は剣を構える。
「行くぞ、ライザー！お前の相手は僕だ！」
「調子に乗るなよ、下級悪魔がぁ！」
僕は一気に距離を縮めて剣で薙ぎ倒す。
「その程度か！」
「くっ、無駄に回復力だけある」
一応、これは聖剣としての性質もあるはずなのに。やっぱり相手が龍じゃないとそこまで威力を発しない。
「ならｃｈａｎｇｅアーチャー」
『ギル、なにか良い方法はない？』

『不死殺しの宝具なら幾つかあるよ』
　不死殺しの宝具ならアイツにも通じるはず！
「ふん、たかがこんな剣で俺を倒せると思うのか！」
「せい！」
　僕は一気に射出するが、ライザーはものの見事に避けていく。
『ダメだ、まっすぐにしか飛ばせないんじゃ当たらない』
『マスター、アイツの回りにゲートを』
『わかった！』
　僕はライザーの周りにゲートを作り、射出する。
「ぐかぁ！」
「よし！」
　当たったけど、この方法は一回しか通用しなそうだ。
「天の鎖！」
「くっ、まだまだ！」
　チッ！予想以上にしぶとい！
「がぁぁぁぁぁ！」
「いち兄！」

どうやらいち兄も苦戦してるみたいだ。
「ライザー様、これを」
女王(クイーン)がなにか渡した。もしかしてあれがフェニックスの涙なのか。
「くっ、こうなったらギルの宝具を」
『ダメだよ、マスター！残りの魔力も少ないのにこんなところで宝具の展開なんて無茶だ！』
『それでも！それでも、やるしかない！』
『マスター(お母さん)、あの女の人なら確実に倒せるよ』
ジャックがそう言う。
『もしかして……』
『ジャックの宝具ならあの女王(クイーン)を倒せるよ。でも…』
『他のモードにはなれなくなる』
ジークの言うとおりだ。残りの魔力的にもジャックの宝具を使えば確実に他のモードにはならなくなる。
『それでも良い！後はいち兄の協力してアイツを倒すしか方法がない！』
僕は意を決してチェンジする。
「ｃｈａｎｇｅアサシン！いち兄、あの女王は僕が倒すからライザーを少しの間お願い

！」
「任せろ！」
やるしかない、いち兄を信じて、リアス部長のためにも！
「宝具　暗黒霧都（ザ・ミスト）」
霧が僕を中心にライザーの女王（クイーン）を、包んでいく。
「ふふふふ、この程度で私を倒せるとお思いで！」
確かにこんな宝具じゃ女王を倒せないであろう。でも…。
「此よりは地獄。私たちは炎、雨、力――、殺戮を此処に」
「くっ、何処からで掛かってきなさい！」
さて、これで準備は整った！
「…解体聖母（マリア・ザ・リッパー）！」
相手は僕を認識すら出来ずにそのまま消えた。
『ライザー・フェニックス様の女王（クイーン）一名リタイアです』
よし…、なんとかなった。あれで倒せなかったとしても呪いが発動して遅かれ早かれリタイアだったろうね。
そう、今は深夜と言っても夜。そして霧と女性。条件が揃っていたから彼処までの威力を発することができた。

「さあ、残るはお前だけだ！」
「チッ、ユーベルーナめ。油断しやがったな」
「行くぜ！」
「お前ら下級悪魔が二人係りで来ようとも俺に勝てるわけがない！」
ライザーが放ってくる火球を切り払う。ナイフがすぐにダメになった。
「最初はお前からだ！」
「ぐっ！」
「はあぁ！」
「チッ、邪魔だ！」
クッ、さっきの宝具の使用で相当体に負担が……！
「落ちろ、赤龍帝！」
「がぁあ！」
「いち兄！」
「イッセーさん！」
いち兄が吹き飛ばされる。そして僕がその隙にライザーに向けてナイフを投擲するけど、炎でナイフを溶かされる。
「どうした！さっきまでの威勢は！」

「くっ！こんの！」
「無駄だ！」
「ぐがあっ！」
　ヤバイ、意識が……。
「ドラゴン・ショット！」
「!?」
　いち兄が放った魔力弾を避ける。それが当たった校舎は吹き飛んだ。
「チッ、まだそんな力が残っていたとはな。だが、これで終わりだ！」
「いち兄、アルジェント先輩！そこから離れて！」
　だが、僕が忠告したときには遅く二人は炎に包まれてしまった。
『リアス・グレモリー様の兵士（ポーン）一名、僧侶（ビショップ）一名、リタイアです』
　くそ！
「残るは貴様だけだ！」
「ぐっ」
　その後、ライザーは僕に向けて攻撃してくる。
「どうした、もう終わりか？」
「ガハッ！」

くそ、もう少し力があれば……。
「アスカ、もういいの。もういいから…」
「リアス部長…？」
「お願い、ライザー。投了（リザイン）するから。もうこれ以上…」
下僕を傷つけないで……！
それはリアス部長の心の叫びだった。あの特訓の日の夜に見たときと同じ顔をしている。
「ウオオオオオオオッ！」
「な、グハァ！」
「ｃｈａｎｇｅセイバー！」
「アスカっ！」
ダメだ！ダメだダメだダメだダメだダメだ！リアス部長にあんな顔をさせちゃダメだ！
「邪悪なる龍は失墜し、世界は今落陽に至る――」
『マスター、やめろ！そんな事すれば肉体が持たないぞ！』
それでも構わないッ！今はこの男さえ倒せれば！
『『『マスター（おかあさん）！！』』』

ありがとう、三人とも。でも、これだけは……。

「譲る訳にはいかない！」

どうか、力を！

「撃ち落とす――幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）！」

僕はそのまま宝具をライザー目掛けて降り放った。そしてそこで僕の意識は無くなった。

14話

僕は今、正座させられていた。

『僕たちが怒っている理由はわかるよね。マスター』

『……はい』

正直、怖いです。ギル君はこれから先怒らせないようにしないと。

『まあ、あのときのマスターの心情は僕たちにも流れ込んできましたから、同情する余地はあります』

『ほ、本当！』

『だけど、あんな無茶な戦いかたは納得いかないよ』

ぐぅ、余地はあっても納得はされないのはわかっていたけど、僕もあのときはあれしか方法が思い付かなかったんだもん。

『はぁ、まあお説教はこの辺でお仕舞いにしときます。そろそろ、来る頃ですから』

来るって誰のことなんだろう？

『ハッ、過去の我に説教されているとは情けないな』

『ギル、そんな事をいっちゃダメだよ。僕たちのマスターに』

そこに現れたのは斧と石板を持ったギルに似ている男の人と僕と同じくらい中性的な顔立ちをしている緑髪のマントみたいな服を着た人だった。
『えっと、ギルこの人たちは』
『紹介するよ。このいかにも王さまぽいのが未来の僕で、クラスはキャスターのギルガメッシュ。で、こっちが僕の唯一無二の友でクラスはランサーのエルキドゥだよ』
『ふん、我もあの戦いを見ていたが不様な戦いをしおって。だが、賢王である我が来たのだ。敗北は許されぬぞ、マスター』
『もう、あまりきついこといっちゃダメだよギル。おっと、ギルは二人いるんだよね。じゃあ、子供の方のギルは子ギルでいいかな』
おお、まさか同じ神話の英雄が来ちゃったよ。しかも、一人は同一人物。
『えっと、もう一人のギルガメッシュの方はなんて呼べばいいかな?』
『ふん、貴様の好きなように呼ぶが良い』
なんと言うか、傲慢さが消えたから潔いね。
『じゃあ、王さまで良いかな?ギルだと被っちゃうし、一応三人?が出てる神話の物語は知ってるからね。再国した方なんでしょ?あと、傲慢が消えた王さまでしょ』
『ほう、我の事をよく知っておるようだな』
なんか嬉しそうだね。

『それじゃあ、エルキドゥはそのままで良いかな？』
『うん、僕はそのままで平気だよ。マスターはギルの事を知っているってことは僕の事も知っているんだよね？』
『うん、まあね。神々が作った土人形でウルクで最強の兵器でもあったんだよね。そして、ギルガメッシュと対等に戦い、唯一無二の友でもあるとか』
　ギルからの説明にもあった事を混ぜて説明しちゃったけど平気だよね。
『それより、二人の能力と宝具について…』
『すまないが、その時間はないようだ。マスター』
『え、どういうことジーク？』
『マスターの意識がそろそろ覚醒しちゃうんだよ』
　そんな時間か。……ん？
『そう言えば、僕ってどらくらい寝てたの？』
『三日ぐらいだな』
『み、三日！』
　三日も寝ていたの！まあ、体に無理言わせてジークの宝具を使ったらから負担が凄かったんだと思うんだけど。
『二人の宝具は起きたときに軽く話すよ。それでいいですよね、キャスターの僕にエル

キドウ』

二人はどうやらギルの提案を承諾したみたいで軽く頷いていた。

「ん、ここは……？」

「どうやら、目が覚めたようですね」

横を向いてみると、グレイフィアさんが座っていた。

「グレイフィアさん、どうしてここに」

「あなた様に治療を施していました。リアス様の僧侶（ビショップ）の神器の力である程度回復した後に私が回復魔法を少しかけていただきました」

「そうですか」

体を少し見てみると、目立つような傷痕がないところを見ると本当のようだ。

「あのグレイフィアさん。リアス部長たちは…」

「ただいま、ライザー様が開いている宴の方へと行っております」

そうか、三日も寝ていたんだからそれだけことが進んでいるよね。

「行くのですか？」

「はい、僕はリアス部長を助けにいきます」

「全悪魔が貴方の敵になるかもしれませんよ。それでもですか？」

確かに僕がしようとしていることは全ての悪魔を敵に回す行為なのかもしれない

……けど！

「僕は約束しましたから。下僕である僕たちがリアス部長の夢を守ってみせると。それに……」

リアス部長はあの時……。

「あの時、リアス部長は泣いていました。下僕である僕たちの為に涙を流していました」

そうだ、あの時リアス部長は泣いていた。

「泣いている女の子一人も守れないでいるのはダメなんです」

「何故守れないとダメなのですか？」

そんなの……！

「そんなの決まってます！僕は英雄たちを宿しているからです！どんな英雄たちにも守れるべきものがあった！大切な人たちや国、物があった！反英霊たちにだってそれはあった！」

多く神話や歴史を知っていくなかでその事を知った。

「だから、僕はリアス部長を助けにいきます。例え、それで悪魔が全員敵になったとしてもです！」

「……。ふふ、そうですか。サーゼクス様からもしもの時はひっぱたいてでも覚悟を決めさせろと言われてきましたがその必要はないようですね」

グレイフィアさんに渡されたのは魔法陣が両面に書かれている紙だった。
「あの、これは?」
「それを使えばリアス様たちがいる会場へと転移できます」
えっと、つまり僕に…。
「密入国しろと?」
「いいえ、それは魔王さまがかかれた魔法陣ですので、不法入国にはなりません」
魔王直々に書いたの!?というかそんなものを僕みたいな下級悪魔に渡して良いの?
「魔王様からの伝言です。『妹を助けたければ、殴り込んでこいだ』そうです」
「あ、あはははは」
魔王様からの殴り込みの許可もらっちゃったよ。
「はい!ありがとうございます、グレイフィアさん!それと魔王様にもそうお伝えください!」
「うふふ、はい。後程、お伝えしておきます」
グレイフィアさんはそれだけ言って魔法陣で何処かへといってしまった。恐らく、魔王様のところなんだろう。
『さて、僕たちの能力と宝具の力の説明をするよ。マスター』
『うん、お願いね』

早く説明の方をよろしくね。

『まずは我からだな。我は元々キャスターのクラスとしては向かないのだが、幸い我の宝物庫のなかにはAランク相当の魔具などを生成できる宝具があるためこのクラスになった』

『なるほど、魔具などの生成による攻撃ね。もしかして空間を繋ぐの？』

『それしか方法がないであろう』

なるほど、やっぱり同一人物ってだけで方法は変わらないね。

『後はこの斧でも攻撃はする』

『ほうほう、接近戦もすると』

『だが、我のクラスはどれもあまり接近戦は得意ではないから、期待はするなよ』

まあ、確かに子ギルもあまり接近戦が得意じゃないよね。

『そして我の宝具は王の号砲（メラム・ディンギル）だ。これは我だけではなく神代を生きたウルクの住人たちも出てくる。城から放たれるは宝具によって作られた矢だ。注意しろよ、この宝具は範囲が広い。故に仲間が前にいる場合は下げさせろ』

なるほど、範囲が広い分危ないのか。

『それじゃあ次は僕だね。僕は体その物が武器みたいなものだからね。こんな風にね』

エルキドゥの袖から天の鎖が出てきた。

『え、天の鎖？』
『ああ、マスターはこれの真名を知らないんだね。これは天の鎖（エルキドゥ）って言って僕自身でもあるんだよ』
『え、でもギルは』
『きっと、照れてるんだよ』
　照れてるのかな？絶対違うと思うけど。
『それで僕の能力は体を万象の物に変えたり、足を地面とどうかさせることによってその場や森などを支配できるんだよ』
　なるほど、もしかして土人形であることが概念みたいな形で能力に反映されてるのかな？
『それで僕の宝具は僕自身が宝具になる人よ、神（ヌマ・エリシュ）を繋ぎとめようだよ。これは他の宝具と違って対粛清宝具って呼ばれるんだ』
『粛清宝具？』
『そう、僕は世界の抑止力と呼ばれるガイア・アラヤの力を自分に纏わせて光の槍となって攻撃するんだ』
　光って僕、悪魔だけど大丈夫なのかな？
『纏うのはこの世界の抑止力だから平気だよ』

『心の中読むのやめてください』
ヤバイな。これはエルキドゥに向かって何か考え後とするのはやめよう。
『あ、あとマスター』
『ん、どうしたのギル？』
『僕たちの力を完全に解放出来るようになったよ。簡単に言うなら禁手（バランス・ブレイカー）ってところかな？』
ば、禁手（バランス・ブレイカー）だって！
『できるの！』
『うん、まあね。普段のあれは枷みたいなものだらかね』
枷ってあれで本気じゃなかったの。
『英霊ごとに解放することができるよ』
英霊ごとってことは英霊たちが増えれば増えるほど変わるってことだよね。
『まあ、簡単に言うと僕たちの姿が変わって能力と宝具が強くなるって感じだよ』
なんかあっさりしてるよ。
「ふう、さて！」
リアス部長を助けにいこう。今度こそ、リアス部長の夢を守って見せる！
「あ、アスカ！目が覚めたのだな」

「てい、ティア！」
「行くのか…？」
「うん、僕は行くよ」
　ティアの顔に影が射す。
「なら、私も行こう」
「え？」
「何、私は露払いだ。アスカの邪魔などさせはしない」
　はは、邪魔した悪魔の人たちは可哀想だよね。まさか、龍王最強のドラゴンの相手をするはめになるんだから。
「ありがと、ティア」
「ふん、なにアスカのためでもあるのだ。使い魔として当たり前の事をするまでよ」
　こうして僕は紙に魔力を流した。

15話

リアスside

「アスカは目を覚ましたかしら」

私は今、新婦室にいる。そこでドレスに着替えさせられた。

「あの時、アスカは無理に力を使ったんだもの。そう簡単に目を覚ますはずはないわよね……」

アスカの事を考えると胸が締め付けられるような感覚に陥る。

「これが……」

胸の中にある言葉を口にすることはできなかった。わかっていてもうこれは叶うことはないのだから。

「でも、もしアスカが目覚めているのなら」

あの日の約束を守りに来るのだろうか。

「私の夢を守ってよ、アスカ……！」

私は必死に願った。アスカが来てくれることを…。

リアスsideend

オカルト研究部ｓｉｄｅ

オカルト研究部のメンバーは会場にいた。

「アスカの奴、無理しやがって…！」

「イッセーさん」

メンバーはアスカがあの状態になった理由を聞かされていた。無理に神器の力を解放したことによるダメージが深く、いつ目覚めるかわからない状態であること。

「うふふ、イッセー君。大丈夫ですわよ。きっとアスカ君は来てくれますわ」

「そう…すよね」

「まあ、来なかったらお仕置きですわね」

うふふふと笑顔を浮かべる。それを見て一誠は怯えていた。

「アスカくんは大丈夫ですよね」

「うん、きっと彼なら大丈夫だよ」

小猫は不安そうな表情で聞いてくると祐斗は笑顔で答える。

「うふふ、どうやら諦めているわけではないようですね」

「ソーナ会長」

「彼は大丈夫ですか？」

「はい、ですが近いうちに目覚めるか分からないそうです」

ドレス姿で現れたソーナに祐斗は紳士的に答える。
「そうですか。アスカくんは来ると思いますか？」
「思うかじゃなくて、来ますよ。絶対に」
「幼馴染みの勘ってやつですわね」
「い、言えそうじゃなくて。その…」
「どうしたんだい、イッセーくん？」
なんだか、すごい顔してる一誠を見て皆ははてなマークを浮かべている。
「えっと、ですね。見ちゃったんですよ」
「「「何を？」」」
その場にいたアーシアに祐斗、朱乃、小猫、ソーナは聞き返す。
「その特訓の日にアイツが部長に誓うところをです」
「「「誓う!?」」」
「はい、アイツは部長の夢を俺たち眷属が守ると言いました」
「それがどうしたんだい？」
祐斗が不思議そうに聞き返す。
「アイツは誓いを建てると絶対にそれを守ります。どんなことがあっても絶対に」
「あ、あはは。それは考えすぎじゃないかな？」

「いいや、そうでとないぜ。何せアイツは英雄が宿っているんだからな」
一誠の言葉に何故か根拠はないが皆一応に納得してしまった。
「それじゃあ、アスカくんが来なかったら。アスカ君を殴り飛ばします」
「あらあら、でしたら私は魔法で追い討ちをかけましょうか」
二人の言葉に四人は苦笑いを浮かべた。
「なあ、木場。これって止めといた方がいいか？」
「あ、あはは。無理に止めたら僕たちに矛先が向きそうだね」
二人は決して止めることなく、そのまま流したのであった。
「さあ、冥界に名だかる悪魔の皆さん！お待たせしました！今日は冥界の、悪魔の歴史に刻まれるよき日になります！ご紹介しましょう、我妃リアス・グレモリーを！」
炎と共に現れたのはリアス・グレモリーだった。このとき彼女の瞳には涙が流れた。誰にも気づかれるのとがない涙を。
オカルト研究部ｓｉｄｅｅｎｄ
「ねえ、ティア。こういう場合って派手に現れた方がいいのかな？」
「ああ、その方が良い。注意も引けるからな」
おお、ティアがこう言ってるし派手にやった方がいいよね！
「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）と絆ｍｏｄｅセイバー！」

僕はセイバーにしてジークの力を使う。
『ジーク、派手に行くよ！』
『ああ、俺もあの悪魔に少し怒りを覚えている』
剣を強く握る。
「はあぁ！」
一気に斬り刻み、直後魔力を解放して斬られた扉を吹き飛ばす。
「な、何事だ！」
「一体どうしたんだ！」
おお、大騒ぎしてますね。なら、こっちもやることやりますか！
「リアス・グレモリー様の兵士（ポーン）藤丸アスカ！主であるリアス様を取り戻しに来た！」
「何をいっている、衛兵はどうした！」
「なに、あんな雑魚などアスカの相手をさせる必要などない」
後ろから現れたティアに会場が驚き始める。
「てぃ、ティアマット！」
「何故貴様がここに……！」
「なに、私はここにいるアスカの使い魔なのだ。ここにいては悪いか？」
更に騒がしくなる。まあ、仕方ないよね。龍王最強が目の前に現れたら誰もが騒ぐ

よ。
「さて、リアス・グレモリー様を返してもらおうか！」
「貴様ぁ！」
　おお、怖いか押してますなぁ。
「ライザー様これは一体…」
「グレモリー卿もこれは…」
　周りは慌ただしくなる。そこに一人の男性が現れた。
「私が用意した余興ですよ」
「お、お兄様！」
「サーゼクス様ッ！」
　サーゼクスってことはこの人が現魔王の一人サーゼクス・ルシファー。明けの明星と呼ばれた悪魔。
「どういうことですか、魔王様」
「やあ、ライザー君。私も先日のレーティング・ゲームを見させてもらったよ」
「はっ」
「だけど、君は成人して何度もレーティング・ゲームに参加している。それに比べリアスはまだ成人していない上、初のゲームだった。これは些か不利ではないかな」

「つまり、ゲームは無効と言うわけですか?」
ライザーの問にサーゼクス様は首を横に振った。
「私がそれを否定してしまったら、レーティング・ゲームの意味がなくなってしまう。だから、今ここで君はそこの悪魔くんと戦ってもらえないかな」
「なっ!」
サーゼクス様の一言に会場全体が慌ただしくなる。それもそうだ。魔王でもあるサーゼクス様の一言は絶対に近いのだ。
「私は会場の皆さんに見せたいのです。聞けば彼の神器には英霊が、英雄が宿っているそうではないか。フェニックスと英雄。どちらが強いのか見てみたくありませんか」
周りはまた更に慌て出す。僕の中に宿っている英雄たちに恐れているかのようだ。
「良いでしょう、このライザー。結婚する前の餞にいたしましょう」
「さて、下級悪魔くん。君には褒美を授けたい。何が良い?爵位かい、それとも絶世の美女かい」
「サーゼクス様!下級悪魔に褒美など」
周りにいた一人の悪魔の言葉に低い声でサーゼクス様は反論する。
「下級だろうと上級だろうとこちらから頼んでいるのだ。それなりに褒美を与えるのが普通だ」

　これがカリスマって言うのかな？
「そんなものいりません。僕はリアス部長を、主であるリアス・グレモリー様を返してもらえればそれだけで構いません！」
　その言葉を聞くとサーゼクス様は他の人には分からないように笑みを浮かべていた。
「では会場は私が用意した。ああ、ティアマットは出ないでくれ。君が出てはバランスが悪いからね」
「ふん、最初からそのつもりだ」
　あ、あはは絶対出るつもりだったよね。
「アスカ…」
「約束を守りに来ました」
「…バカっ！」
　そういわれて抱きつかれちゃいました。
「リアス部長…」
　早く離れてください。身に覚えのない殺気二つが突き刺さってきます。
「また、ボロボロになったらどうするのよ！最悪今度こそ……」
　リアス部長が言いたい事はわかる。でも……。
「大丈夫です。今度こそ負けません」

僕はリアス部長の手を取り、騎士の誓いのように膝をつく。
「僕はここに誓います。主、リアス・グレモリーに勝利を捧げることを」
キザかな?さて、あっちも待ちきれないかもしれないからね。
「お待たせしました」
「ふん、お前の実力は認めてやる。だがな、お前はこの俺様に勝てることはできねぇ!」
転移されて場所はまるで中世の闘技場のような場所で、そこにはライザーだけがいた。
『それではライザー・フェニックス様対リアス・グレモリー様の兵士(ポーン)藤丸アスカの一騎討ちを始めます』
審判はどうやらグレイフィアさんと言う点は変わらないようだ。
『それではスタートです!』
合図と共に僕はセイバーの力を存分に使う。
「はあぁ!」
「ふん!」
ライザーは炎の翼を生やして、上空へと回避する。
「ハッ!飛べない貴様では俺には勝てない!」
「なら、打ち落とせば良い!リアス部長!ここでプロモーションの許可をください!」

映し出された映像を見るとリアス部長は頷いてくれた。
「プロモーション女王（クイーン）」
さて、これで扱いやすくなったかな？
「ｃｈａｎｇｅキャスター！」
僕の服装はさっきまでの鎧ではなく、まるで占い師のような服装に変化する。
『この状態で禁手（バランス・ブレイカー）は可能？』
『ふん、貴様の好きようにしてみろ』
あ、あはは。王さまなりの許しなのかな？
「はっ、そんな姿になったところで貴様に勝ち星などない！」
「それはどうかな？」
僕は石板を用いて空間同士を繋げ、魔杖等の魔具を出す。
「やれ」
魔杖から放たれる攻撃をうまく避けているみたいだけどそう容易く続くかと思っているのかな。
「はっ、当たらなければ意味などないぞ！」
「確かに、でも当たらないなら当たるようにすれば良い」
石板の魔術を発動させる。

「なっ、なんだこれは！」
「拘束する」
　文字の縄によって拘束されたライザーはそのまま落ちる。
「ぐっ、こんなもの！」
「簡単に解けると思うな！」
　僕は一気に詰めより斧で攻撃し、円上に空間を繋いで魔具を出し、ガトリングガンのように回転させながら魔術を放つ。
「ぎゃぁあああぁぁぁぁ！なんだ、これは体がぁ！」
「効くだろう。それは僕お手製の不死殺しの概念が含まれる魔具が放つ魔術は！」
　Aランクの不死殺しの概念を持つ魔具を作るのには結構魔力を持ってかれるけどね。
「調子に、乗るなぁ！」
「ぐわぁ！」
　余りに高火力の炎を撒き散らされ、攻撃がやんでしまった。
「く、やってくれたな。このくそ下級悪魔が！」
「ぐわぁぁぁぁあああ！」
　あ、熱い！まさしく業火だ。
「はあぁ！」

炎をなんとか振り払う。膝をつきながら息を整える。
「チッ、しぶとい奴が」
「それはお互い様だよ」
ヤバイね。さすがに調子乗りすぎたよね。
『マスター、僕が変わろうか？』
『大丈夫だよ、エルキドゥ。それにエルキドゥの攻撃はさいあくライザーを殺しかけるかもしれないからね』
光は悪魔にとって害だ。纏う僕には効かないかもしれないけどライザーにとっては害以外なんにでもならない。
『マスター（おかあさん）、なら私たちが変わる？』
『ライザーが女だったら変わっててかも』
やっぱりここは…！
『禁手（バランス・ブレイカー）　手を使うよ。王さま！』
『ハッ、好きにするが良い』
よし、許可ももらったし。行くよ！
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）ｍｏｄｅ　ｃａｓｔｅｒ（キャスター）　Ｇｉｌｇａｍｅｓｈ（ギルガメッシュ）、禁手（バランス・ブレイカー）！」
僕を中心に光輝く。そして僕自身もなにかが変わっている感じはしていた。

「ふぅ…」
　ターバンのような服装に代わり、右手には鎧のようなものに石板には装飾が施されていた。
「ふ、ふはははははは！たかが姿が変わっているだけか!?」
「それはお前の目で確かめてみろ」
　僕は鎧がついた方の右手を翳すと…。
「なあっ！」
「射て」
　ゲートの数が増え、ライザーに一斉発射する。
「ぐうぅ、数が増えただけでここまでとは…」
「数だけだったら良かったな」
　飛んでいるライザーの背中の上に一つだけゲートを開き、魔具を使って魔術を放つ。
「がああああぁぁぁぁぁぎゃあああぁぁぁ!!」
「威力も上がってるんだよ」
　さすがにここまでとは思わなかった。
「まだだ、まだだ！貴様のような下級悪魔にぃ！」
「ぐっぅ」

火事場のばか力と言うのかな。ライザーの一撃が重くなった。

『おい、マスター。禁手(バランス・ブレイカー)はそう長くは続かんぞ』

長くは続かないんだ。なら、宝具を…。

『宝具を使う！』

『ふっ、良い判断だ』

なんだ、王さまって案外素直じゃないか。

「矢を構えよ、我(オレ)が許す！至高の財を以てウルクの守りを見せるがいい！」

「ふっ、なんだ。今ごろ怖くなったか！」

ライザーの言葉を機に求めずに、そのまま詠唱する。すると辺りが暗くなり、僕の後ろにはウルクの国が、住民があらわらる。

「大地を濡らすは我が決意！王の号砲(メラム・ディンギル)！」

「な、なんだ！」

ウルクから放たれてきたのは無数の魔術の矢。それがライザーを襲った。

「があああぁぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁ！」

終わるとそこには傷ついたライザーがいた。

「き、さ…まぁ！」

僕はゲートを開く。

「分かっているのか！これは悪魔の未来にとって大切なことで、お前みたいな下級悪魔がどうこうしていいものじゃないんだよ！」
「そうですね。僕がやっていることは、悪魔の未来を潰す行為です」
　確かに僕はこれからの悪魔の未来を潰すことになる。
「でも、一つだけわかっていることがあります。誰か一人が望まない未来なんて、そんなものは要らない！誰かが涙を流す未来なんて必要ない！」
「そんなものは、夢物語だ！」
「確かにそうかもしれません。僕が語っているのは夢物語です。でも……！」
　突っ込んでくるライザーに向かって魔術を発動させる。
「この思いは決して間違いじゃない！」
「がああああああぁぁぁぁぁぁっ！」
　ライザーは一発の魔術が当たると倒れ込んでしまった。
『勝者　藤丸アスカ様です』
　グレイフィアさんの放送と共に会場が無くなっていく。それと同じくらいに妹のレイベル・フェニックスが兄を庇うようにたったいた。
「文句があるならいつでも来てください！その時は全力を以てお答えしますよ」
「…!!」

さて、そろそろ解除しないと。
「って…うわあああああぁぁぁぁぁ！」
お、落ちるぅぅぅぅぅ！翼の出し方なんて知らないよ！
「…お疲れさまです、アスカくん」
「と、塔城さん…。ありがとう」
なんで、お姫様だっこなんだろう。
「お疲れさまですわ、アスカ君」
「お疲れさまだね、アスカくん」
労いの言葉をかけてくれる、姫島副部長に木場先輩。
「それじゃあ、えい…」
「って、ちょ、うわあああああ！」
投げられた。塔城さんが僕を投げたよ！
「あれ？痛くない？」
「お疲れさま、アスカ」
「リアス部長…？」
なんと、今度はリアス部長に抱き締められていた。男としては嬉しいのですが、反面少し恥ずかしいです。

そのまま下に降りて、サーゼクス様の前に立つ。
「約束通り、リアス部長は返させてもらいます！それとすみませんでした！」
僕はそのまま数秒頭を下げたあと、皆のもとへと向かった。
「これは……？」
「グリフォンですね」
「あらあら、それでしたら部長はアスカ君に送ってもらいましょうか」
「え？僕ですか？」
えっと、僕なんかでいいのでしょうか？
「お願いしてもいいかしら、アスカ？」
「はい、リアス部長がそう望むのならば」
僕はそのままリアス部長をのせて皆より先に人間界に戻ることにした。
「ありがとう、アスカ。助けに来てくれて」
「いいえ、それにいったじゃないですか。リアス部長の夢は下僕である僕たちが守るって」
傷だらけだけで、一度死にかけたけど。
「それでも今回は破談にできたけど、次も同じようにいくとは限らないわ」
「確かにそうかもしれませんね…」

　リアス部長は上級悪魔で、グレモリー家の次期当主だ。これからもこんな話が来るかもしれない。
「リアス部長が望まないであれば、何度だってゲームしてその度に勝って見せますよ。誓いましたから、勝利を捧げると貴方に」
　そうだ、このヒトに誓ったんだ。勝利を捧げると。なら、勝っていかないとね。
「アスカ、ちょっとこっちを見なさい」
「え、なんですかぶ」
　何が起きたかは一瞬分からなかった。でも、部長の顔がすぐ近くにあって唇には柔らかい感触。ここまで来ればわかるよね。キスされちゃいました。
「うふふ、私のファーストキスよ。日本では大切なヒトにあげるものなんでしょ」
「ふぇ、リアス部長、今のは」
　頭がショートしそうになるけど、なんとかこらえる。
「リアス・グレモリーっ!!」
「な、ティア!」
「貴様、よくもアスカのファーストキスを!」
「あら、早い者勝ちよ」
　あ、あのリアス部長。できれば今のティアを挑発しないでいただけないでしょうか。

なんかヤバイ気がします。
「いい度胸だ！貴様を消し炭にしてくれる！」
「やれるものならやってみなさい！」
「ちょ、待って！今はやめて！ティアの攻撃を避けながらグリフォンなんて操れないから！」
僕の叫びむなし人間界に入るまでティアとの空中鬼ごっこが始まったのであった。
「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

小話

アスカの休日

リアス先輩の婚約を破棄されてから早三日過ぎた。

「アスカ、起きなさい」

「う、ううん。あと…3分……」

「早く起きないとキス…するわよ」

僕はその言葉を聞いて勢いよく起き上がる。

「おはようございます！リアス部長！」

「あら、起きなくても良かったのよ」

「い、いえ。あの…それと部長。服を着てください！」

「うふふ、良いじゃない。それに体には特に胸には自信があるのよ」

た、確かに女子高生とは思えない体つきだけど…。

「だ、ダメです！嫁入り前の女性が男性の前で肌を晒すなんて！グレイフィアさんに怒られちゃいます！」

「良いのよ、そのグレイフィアが居ないのだから」

確かにここにはグレイフィアさんはいない。だけど…。
「アスカ、そろそろ起きろ。朝食の準備ができたぞ」
「あ、うん。ちょっと待ってて！」
「あら、ティア。少し待ってなさい。私も手伝うから」
リアス部長が話すと僕の部屋の扉が壊れるんじゃないかってぐらいの勢いで開かれる。
「…アスカ、これは一体どう言うことだ？」
「え、えっと、その」
「あら、私が下僕の部屋にいちゃいけないのかしら？」
何故かわからないけど、二人の間に火花が散っているように見える。
「は、早く食べちゃいましょうよ」
「そうね、アスカ期待してちょうだいね」
「ふ、箱入り娘が料理など出来るのか？」
朝から元気だなぁー。現実逃避をしながら僕は階段を降りて顔を洗ったりした。
『王さまー。宝物庫の中身を見してください！』
『ふん、良いだろう。存分に我の宝物庫を見るがいい！』
朝食を食べ、家の事などを終わした。リアス部長はなんでも家の事で用事があると言

うことで冥界へと、ティアはアルジェント先輩の使い魔であるラッセーを連れて何処かへといってしまった。

そして、僕は暇になったので神器の中にいる英霊と戯れることにした。

『へぇー、やっぱり子ギルより多いんですね』

『ふん、幼き我より中身が多いのは当たり前だ』

王さまにお礼を言って今度はエルキドゥの元へと向かった。

『ねえ、エルキドゥって性別とかあるの？』

『うふふ、マスターもそう言うのを気にするんだね』

『うーん、どちらかと言うと中性的な顔立ちだから気になっちゃって』

エルキドゥは神話上だと体が土で出来ている人形である。でも僕の目の前にいるのは人と何ら変わらない姿をしているのでちょっと好奇心を刺激されるのだ。

『僕は性別は不詳だよ。まあ、マスターは神話とかを知ってるみたいだから理由は想像はつくでしょ？』

『うん、質問に答えてくれてありがとうね』

さて、今度は誰と話そうか考えていると誰かがインターホンを鳴らした。

「うん、誰だろう？」

玄関へと向かい扉を開ける。

「こんにちは、アスカくん」
「あ、塔城さん。いらっしゃい」
「今日は忙しかったですか？」
「ううん、大丈夫だよ。さっきまで王さまとかと話していただけだから」
家にやって来た塔城さんを招き入れた。
「相変わらず、綺麗な部屋ですね」
「あはは、ありがとね。はい、麦茶で大丈夫？」
「はい、ありがとうございます」
お茶を差し出して、話をした。
「それで今日は何しに来たの？」
「アスカくんが暇だと思って遊びに来ました」
暇と言うのは確定なんだね。事実だけど……。
「それじゃあ、何して遊ぶ？」
「このゲームなんてどうでしょう。昨日、悪魔の仕事でいただいたものなんですが」
「うん、それにしよう」
丁度、僕の家にもＷｉｉはあるしね。
こうしてリアス部長たちが帰ってくるまでの数時間を塔城さんと共にスマブラで乱

闘して過ごすことになった。

アスカの休日ｅｎｄ

アスカと黒猫の二年間

これは僕の中学一年の時の話。中学時代は部活動は文化部だったけど幽霊部員だったので放課後は家に早く帰っていた。

「ふう、今日は宿題とかないし図書館にでもいってようかな」

中学の時から両親は既に海外赴任に出ていた為、独り暮らしである。

そんなある日。

「ふう、そろそろ閉館時間だし家に帰らないと」

閉館時間が迫っていた為、読んでいた本を元の場所に戻して外へと出た。

「やっぱり、暑いなぁー。今日の夕飯はうどんにしようかな。…ん？」

薄暗くなってきていた為、最初は判らなかった。少しずつ近づいていくと怪我だらけの黒猫が倒れていた。

「死んではないね、お腹は動いてるし」

よーおく見ないとわからないけど、腹部が少し動いていた。これは呼吸をしている証だ。

「このままだと死んじゃうよね」
僕は優しく黒猫を抱き抱え急いで家へと帰っていった。
「待っててね。すぐに手当てをするから」
趣味が読書のため色々な本を読んでいる。その中には動物の手当ての方法がのっている物も読んでいた。
「ふぅ、こんなものかな?あとは目を覚ますのを待とう」
黒猫が目を覚ます前に僕も腹ごなしするために夕食を作り始めた。
「みゃあー」
「あ、起きたみたいだね」
翌日、丁度休日だったこともあり家のことを済ませたあとに猫の包帯を取り替えていると目を覚ましたようだ。
「あー、そんなに怖がらないで。僕は君を助けたいだけだから」
「ううぅぅぅ」
「大丈夫。何があったかは知らないけど僕は君の敵じゃないよ」
そのまま取り替え続けるとどうやら分かってくれたようで抵抗しなくなった。
「ふふ、良い子だね。それに毛並みが綺麗だし、飼い猫だったのかな?」
包帯を取り替えながらそんなことを呟く。

「さて、これで包帯の取り替えは終わり。それじゃあ、ご飯をあげるね」
　僕は台所に向かい、昨日のうちに買っておいた猫のえさ（缶詰）を目の前においた。
「ほら、お食べ」
　最初は警戒していたけど、よほどお腹が空いていたのか一口食べると凄い勢いで食べ出した。数十分後には缶詰の中はきれいになっていた。
「にゃあー」
「満足したのかな？でも良かったよ」
　僕は背中を撫でてやると、気持ち良さそうにしていた。
「さて、これからどうしようかな。幸い家はペットを飼っても平気だけど、母さんたちが何て言うかな」
「にゃぁー」
「あはは、傷も治りきってないしこのまま飼っちゃおうかな」
　僕はこうしてこの黒猫を飼うことを決心した。
「さて、まずは君の名前を決めないとね」
　うーん。シンプルにクロとかだと味気ないよね。だからってこった名前にする必要もないし…。
　そのまま数十分名前を考えた。

「よし、君の名前はヒメカだよ。お姫さまの姫に歌で、姫歌だよ」
「にゃああー」
「お、どうやら気に入ってくれたみたいだね」
こうして僕たちの生活が始まった。姫歌はいたずら好き。
「ああー、また僕の腕時計を隠したなぁ！」
「にゃー」
「くぅ、ふてぶてしいけど可愛いなぁ！」
姫歌は何故か僕のものをやたらと隠していた。構ってもらいたいらしい。
「うーむ、君はこの缶詰以外は食べないね」
「にゃぁー」
「うん、まあ高級感があるって言うなら仕方ないけど」
姫歌は気に入ったもの以外は決して口にしない。好き嫌いと言うよりかは食わず嫌いだ。
「うん？また僕と一緒に寝るのかい？」
「みゃあー」
「まあ、湯タンポ代わりで丁度良いけど」
「にゃあ!?」

冬の寒い時期に一度、一緒に寝てしまったことがあり、温もりとか覚えてしまったのか。いつも僕と一緒に布団に被って寝ていた。
「さて、少し匂うしお風呂入ろうか？」
「みゃあー！」
「そうかそうか、そんなに嬉しいか」
姫歌は以外と綺麗好きである。一週間に三回は洗っている。
こんな日々を二年間過ごしていた。だが、いつの間にか姫歌は何処かへと向かってしまった。
自由奔放な所があった為、すぐに帰ってくると思っていたがその日以降姫歌が帰ってくることはなかった。
「はぁ、あの子は今ごろどうしているのかな」
たまに思い出しては心配でたまらなかった。まるで一人娘の帰りを待つ父親の気分だよ。
「いつでも帰っておいで、姫歌」
僕はこのときまだ知らなかった。予想外の形で姫歌に再会することに。

16話

どうも、僕は藤丸アスカだよ！今日は久々の部活動なんだけど、部室が業者の清掃で使えないので僕の部屋で部活動をすることになったんだけど……。

「これが小さい頃のアスカ…」

「あらあら、可愛いですわね」

「純真無垢みたいです」

「とても可愛らしいですね、イッセーさん」

「ああ、この頃から女子からも人気だったからな」

「うん、元気そうな男の子だね」

「皆さん、アルバムを置いて活動に移りましょうよ」

そう、皆はティアがいつの間にか見つけ出した僕のアルバムを見てなごんでいた。

「はあ、ティアも良くこんなものを見つけたね」

「ふ、なに少しこの部屋をせんさ…、整理していたら見つかっただけだ」

「いま、詮索って言おうとしたよね」

「……」
「目をそらすな」
　まったく、まあべつに見られてダメなものは無いしほとぼりが覚めるまでこのままでも良いかな。
「ねえ、アスカくん」
「？どうかしましたか、木場先輩？」
「この写真に写っている…」
「え？」
　見せられたのはいち兄と僕の幼馴染みである子が写っている写真だった。
「ああ、これは僕のもう一人の幼馴染みのイリナくんですね。懐かしいです」
「いや、アスカ。あいつはなその…」
「いや、それじゃなくてこの後ろに写っている剣だよ」
　指で示されたところを見ると確かに剣が飾ってあった。
「あ、本当ですね」
「これはどういうものなのか知っているのかい？」
「すいません、何分昔のことなので聞いたかもしれないんですけど覚えてはいないですね」

なんだろう、気のせいかもしれないけど木場先輩の纏う雰囲気がいつもと違うような気がする。
「これはね、アスカくん。聖剣だよ」
その言葉を口にしたときの木場先輩の瞳には復讐の火が灯っていたことを僕は知らないでいた。
次の日、来週開催される球技大会に向けていつものメンバーで練習していると
「裕斗、いくわよ！」
「……」
木場先輩はリアス部長の声が聞こえていないのかボーとしたままだった。そんな状態だと分からなくてリアス部長が打ったボールが木場先輩の元へと飛んでいく。
「危ねえぞ、木場！」
「…イッセーくん」
どうやらいち兄が間一髪のところでカバーに入ってくれたお陰で木場先輩にボールは当たることはなかった。
「これで目が覚めたかしら」
「…すいません、部長。僕はしばらく休みます」
「裕斗！」

練習後、リアス部長が木場先輩のあまりにもひどい態度に叱りつけると木場先輩は何処かへと行こうとしていた。
「お、おい！木場、どうしたんだよ！お前らしくないぞ！悩みがあるならいえよ、仲間だろ！」
「仲間…ね。イッセーくん、僕は根本的なことを思い出したんだよ。僕がどうして悪魔になったのかと言うことをね」
木場先輩の目はどこまで暗い闇を映していた。
「僕は聖剣〝エクスカリバー〟を破壊するために悪魔になったんだよ」
エクスカリバー。それはケルト神話だけではなくアーサー王の伝説にも出てくるアーサー・ペンドラゴンの代名詞とも言える武器の名前である。
それを破壊する。木場先輩はそのまま何処かへといってしまった。
「木場先輩は一体どうしてしまったんだろう」
「部長はなにか知っているんですか」
「ええ、裕斗があそこまで聖剣を憎む理由を私は知っているわ。裕斗はね、とある研究で唯一生き残った生存者なのよ」
「そのとある研究って言うのは一体なんなんですか？」
それが木場先輩の現状の原因なのだろう。

「名前は聖剣計画。人工的に聖剣を扱える人間を増やそうとしたものよ。聖剣を扱うには特別な粒子が必要なの。でも、裕斗たちは一人一人のそれが弱くて少なかった。だから、それらを無理矢理抜き取り不要になった裕斗たちを殺そうとしたのよ。裕斗は危機一髪のところで私が悪魔に転生させることができたけど、他のメンバーはそうはいかなったわ」

「そんなことが…」

「教会がそんな非道なことをしていたなんて私は知りませんでした」

「仕方ないわ、アーシアがシスターになる前には口にすることも禁止されたみたいだもの。知らなくて当然だわ」

どうやら、リアス部長も木場先輩を助けた後も多少調べていたのだろう。それなりに詳しく話してくれた。

『エクスカリバーか。まさか存在しているなんて…』

『ふ、悪魔が存在しているのだ。聖剣の一つや二つ存在していても可笑しくはないだろう』

『まあ、ギルの言う事は間違ってはいないかもね』

『はい、賢王の僕の言っていることは一理あるよね』

三人がいっていることは別に間違ってはいないけどさ。

『だが、喉から手が出る程の物は名のない無銘の物が多いはずだ』
『うん、まあ聖剣の代表格と言えばエクスカリバーだけど、他にもグラム、デュランダル、カリバーンとかも聖剣だよね』
　聖剣が存在するなら魔剣も存在するよね。
『それより、木場先輩が心配だよ』
『あの男の人？たぶん一歩間違えたら戻れなくなるよ、マスター』
『戻れなくなるって…』
『ジャックが言っていることは間違いではない。マスター、あの騎士は今、危ういところだ』
　ジャックとジークが危うい、戻れなくなると言うことは……。
『復讐に取り憑かれた者の末路ほど哀れなものなどない』
　復讐、木場先輩は一体どういう気持ちでいたのだろう。
「復讐はやってはいけない何て言う一般論じゃ、きっと木場先輩は止まらないよね」
　家に帰り、ギルたちと話を終えたあとベットに座り込んだ。
「どうすれば良いんだろう」
　同情する部分もあるよ。でも、やっぱり賛同できることではないよね。
「はぁ、これからどうなるんだろう……」

僕はこの時知らなかった。新たな騒動が僕たちに近づいてきていることに。

１７話

木場先輩が部活を休むようになってから二日たった今日、教会側からの使者が来たと言うことで僕たちは部室で待機していた。今回は木場先輩も強制的に集められた。

「そろそろね」

リアス部長がそう言うとドアがノックされた。

「失礼する」

「……」

入ってきたのは見るからに怪しいフードを被った二人組だった。と言うか、警察に職務質問されなかったのか不思議に思うよ。

「貴様がこの地を治めている悪魔のリアス・グレモリーで良いのだな」

「ええ、そうよ。そして、後ろにいるのが私の下僕よ」

「ふ、まあ良いだろう。それでは話し合い、いや警告を聞いて貰おうではないか」

フードをはずすとそこには青い髪に緑のメッシュが入った女子と栗色の髪をツインテールにしている女子がいた。

「警告、ね。一体、貴女たちは何をしようとしているのかしら」

「それではまず経緯から話そう。数週間前にとあるバチカンの教会が堕天使に襲われエクスカリバーの一つが盗まれた」
「なんですって!!」
　エクスカリバーが盗まれた!?って、一つ?
「エクスカリバーって存在しているんですか?部長」
「いいえ、違うわよ。イッセー。エクスカリバーは先の大戦で折れて存在しなくなったのよ」
「「お、折れた!?」」
　え、エクスカリバーって折れるものだっけ?確かに聖剣のなかでは折れてしまったものとかあるけど、エクスカリバーはアーサー王が部下に命令して泉に返したはずじゃ。
『それより、おかしいぞ。マスター』
『どうしたの、王さま』
『神造兵器であるはずの約束された勝利の剣(エクスカリバー)が折れる筈がない。あれは星の輝きとまで言われた宝具なのだからな』
　え?神造兵器って神様が造ったて言うあれのこと?でも、実際にリアス部長たちは折れたっていってるよ。
『だから、マスター。僕たちが知っている約束された勝利の剣(エクスカリバー)とこの世界のエクスカリ

バーは別物ってことだよ』
　まさか、そんなことが？でも、それなら王さまが驚いた事と理由が合致するね。
「ああ、今はこんな姿になってしまったがな」
　意識を戻してみるとどうやら話が進んでいたようだ。
「これが私が所持している〝破壊の聖剣（エクスカリバー・デイストラクション）〟だ」
　布で巻かれていた大剣の刀身を見せるこの人の名前は…。
『マスター、彼女の名前はゼノヴィアだそうだ』
『あ、ジーク。代わりに聞いてくれてたんだね』
　どうやら自己紹介もされていたみたいだけど僕は王さまと話をしていて聞いていなかったからね。
「そして、私のは〝擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）〟よ。こんな風に姿を様々なものに変えられる特性を持っているのよ」
「おい、イリナ。あまり悪魔に聖剣の事を教えるな」
「いいじゃない、ゼノヴィア。友好的にいかないと」
　うん？今、あの人なんっていった？イリナって言ってたよね？同名の人かな？
「それで用件は貴女たちの任務に介入しないでほしいと言うことで良いのね」
「ああ、悪魔側がもしかしたら堕天使側と手を組んで何かしようとしていると上の人間

は考えているようだ」
　ふむ、こんな条件はきっとリアス部長は呑めないよね。自分が管理している場所で変なことされるんだもん。良い気がしないよね。
「私たちからの警告は以上だ。行くぞ、イリナ」
「ええ、でもちょっと待ってゼノヴィア」
　するとイリナって人がアルジェント先輩の前に立って話しかけた。
「お久しぶりね、アーシアちゃん」
「イリナさん、本当にイリナさんなんですね」
「ええ、そうよ。ごめんなさいね、あのとき守ってあげられなくて。それと、こっちも久しぶりだねイッセーくんにアスカくん」
「お前、本当にあのイリナなんだよな」
　ん？何々知り合いなの？と言うか、僕も知り合いなのかな？
「おい、アスカ。ほら、紫藤イリナだよ。俺たちと良く一緒に遊んでたろ」
「え、イリナくんって男の子だよね？」
「はぁ、お前はまだ勘違いしてるのかよ。イリナは女の子だったんだよ」
「あ、あはは、まあ仕方ないよね。あのときは男の子みたいだったし、間違えてても不思議じゃないよ」

「え、えええええ！」
　うそ！マジで!?女の子だったの!?
「マジで！僕今まで男の子だと…」
「最低ですね、アスカくん」
「あらあら、今まで誤解していたみたいですわね」
「うふふ、アスカらしいわね」
　く、みんなにまで呆れられている。
「それより、イリナく、じゃなくてイリナちゃんはアルジェント先輩と知り合いなんだね」
「ええ、教会が一緒だったのよ。でも、私なあのときアーシアちゃんを守ることができなかったわ」
　あのときと言うのはきっと魔女として烙印を押されて迫害されたときの事をいっているんだろうね。
「いいえ、イリナさんだけが最後まで私の事を信じてくれました。それだけで私は救われていたんですよ」
「そっか……。それなら良かったわ」
　うん、仲良き事は良いことかな？三竦みの関係もこうなったら良いよね。

「待ってくれるかい、君たち」
「うん、君は先程から私たちに殺気を向けてきた少年か」
　木場先輩の顔がヤバイよ。憎悪に、復讐に取り憑かれているよ。
「僕は聖剣計画の生き残りだよ。早速だけど君たちが持っているエクスカリバーを破壊させてもらうよ」
「ほう、あの計画の生き残りか。なら、受けてたとう。だが、こちらとしてもあの計画は触れてはならないくらいに嫌悪されている。首謀者は追放され今では堕天使側の人間になっているがな」
　やっぱり、自分達の組織の人間が行った事であるが故に嫌悪されているんだね。
「じゃあ、早速だけどやろうか」
「ああ良いだろう。イリナも誰か一人と戦ってみてはどうだ」
「そうね…、じゃあアスカくんと戦おうかしら」
「え？僕？」
「ええ、神器持ってるんでしょ？」
　あ、あははバレてるみたい。
「あ、そうそうイッセーくんにアーシアちゃん。お幸せにね」
　イリナちゃんの言葉聞くと二人して顔を赤くしていた。ドストレートに言われたら

そうなるよね。

「それじゃあ、ルールを確認するわ。相手を傷つけるような攻撃は禁止よ。危険だと判断したら即止めるわ」

リアス部長が審判のもと試合が行われる。僕は誰で戦うか迷っていた。

『あの擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）は刀身の長さすら変えられるよね』

『なら、僕の力を使ってみたらどうだい』

名乗りをあげたのはエルキドゥだった。

『ええ、マスター（おかあさん）、私たちに殺らせてよ』

『うーん、ジャックだとやっぱり厳しいかな？相手は予測不能の斬撃を繰り出してくるだろうし、かといって王さまやギルの力では間合いを詰められないかもしれないけど形を変えられるんじゃ意味がないからね。ジークだとカウンターもらったらヤバイからね』

ジャックにこういう風に説明すると少し拗ねてしまった。

『なら今度はジャックの力で誰かと戦うからそのときに一杯戦うから。ね？』

『うう、わかったよマスター（おかあさん）』

ふう、なんとか理解してくれたみたいだし。それじゃあ！

「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆ｍｏｄｅランサー」

僕の服装とかが変わる。マントのような服にネックレスのような物を首から下げ、髪の色も緑色へと変化した。
「あら、姿が変わるんだね。可愛いよ、アスカくん」
「えーと、お世辞は良いかな?」
なんかガチなトーンで言われたからどう言って良いか分からなかったよ。
「それじゃあ、始め!」
リアス部長の合図と共にイリナちゃんが攻撃を仕掛けてくる。
「先手必勝よ!」
「なら、後手必勝だね」
僕は袖から天の鎖を大量に出してイリナちゃんを拘束した。
「ちょ、なにこれ!?」
「これがエルキドゥの能力なのか」
すごいや。まるで自身が武器そのものみたいだよ。
『みたいじゃなくてその物だよマスター』
おおっと、エルキドゥにつっこまれてしまった。
「木場先輩!?」
木場先輩の方へと目を移すと危険な状態になっていた。

「くっ、初めてだけど。うまくいって」
　僕は足を地面と同化させて、木場先輩の前に盾を作り上げた。
「ほう、これは貴様の神器の力なのか」
「一部だけどね？これ以上はやめてもらえるかな？」
「ふ、良いだろう。イリナをそろそろ解放してくれ、私たちはもう行かなくてはならないからな」
「わかったよ」
　僕はイリナちゃんの拘束を解いた。
「ごめんね、手荒な真似しちゃって」
「ううん、良いわよ。それにしても相変わらず優しいね、アスカくんは」
「あはは、イリナちゃんも変わっていなくて安心したよ」
「うふふ、それじゃあまたね」
　イリナちゃんとゼノヴィアさんはそのまま学園を去っていった。
「あれ？木場先輩は？」
「それが、いつの間にかいなくなってたみたいで…」
「今、部長が使い魔で探しているところです」
「木場の野郎、大丈夫か」

「心配ですね」
皆、心配してますよ。どこにいってしまったんですか。
「…ねぇ、いち兄。木場先輩の手伝いをしちゃダメかな?」
「手伝いって復讐のか」
「うん、別に人を殺すとかじゃなくてあくまでも木場先輩の目的は恐らくエクスカリバーの破壊。それなら大丈夫じゃないかなって」
いち兄は考え込む。
「よし、それなら部長たちにばれないようにしよう」
「うん、そうだね」
「あと、協力できそうなやつも探そう」
こうして僕といち兄は木場先輩を助けるべく行動するのであった。

１８話

　僕はいち兄と約束した場所に塔城さんと一緒向かっていた。
「本当に良いの？」
「…はい。元々、アスカくんが相談してこなかったら私からしていたので、問題はないです」
「そうなんだ。でも、なんだか巻き込んだみたいなことになってごめんね」
　どうやら塔城さんも同じ気持ちだったみたいで快く受け入れてくれた。
「おーい、アスカ！」
「いち兄、声が大きい。恥ずかしいよ…」
「イッセー先輩にも話したんですね」
「うん、まあね。お互いに協力できそうなヒトにも声をかけようって話もしたんだ」
　いち兄の隣には生徒会に所属していてソーナ・シトリーさんの眷属である匙先輩がいた。どうやら協力を頼んだみたいだ。
「匙先輩に協力を頼んだんだね」
「おい、兵藤。協力ってなんのことだよ！」

「わ、悪い。まだ話してなくてさ。ちょっと話してくるから」
　そう言って匙先輩に事の始まりを話した。
「イッセー先輩って抜けてるときがありますよね」
「まあ、そこもいち兄の良いところでもあるんだけどね」
「はぁ、なんだか少し揉めているみたいですよ」
　何やら言い争いが始まってしまった。と言うか、匙先輩が逃げようとしているところをいち兄がなんとか引き留めていた。
「…何をやってるんですか？」
「小猫ちゃん！頼む、手伝ってくれ！」
「急にどうしたの」
「匙が話を聞いた途端に逃げるからよ」
「帰らせてくれー！会長にこの事がバレたらきついお仕置きがぁ！」
　きついお仕置き？
「大丈夫だって、会長にバレたらアスカと俺で一緒に謝るから」
「え、まあそうですね。こっちから誘ったんですから弁明の手伝いくらいは」
「お前たちは会長の恐ろしさを知らないからそんなことが言えるんだよ。それに藤丸なら兎も角として兵藤が弁明しても意味がないと思うんだが」

「それは言えてますね」
「小猫ちゃん、フォローしてくれよ…」
「普段の行いだと思うよ」
　塔城さんにフォローされなかった事がショックだったのか落ち込んでいるけど普段の行いを振り返ってから言ってもらいたいものだ。
「でもソーナ会長ってそんなに厳しいんですか？」
「藤丸は知らないんだったな」
「いえ、オカ研のメンバーは皆知らないんじゃ」
「いいえ、ソーナ会長は厳しいことで有名ですよ」
「ああ、俺もあのヒトが目の前に現れたら顔がひきつるぜ」
「兵藤は例外として俺も結構厳しくされてるぞ」
　ふむ、皆の話をまとめると結構厳しい。僕は特に厳しくされたことはないけど…。
「うーーん？」
「？匙先輩、どうかしたんですか？」
「あ、いや。藤丸の顔がさ。会長が大事にしている写真に写っている男の子と似てるんだよ」
「ほえ？」

ソーナ会長が大事にしている写真に写っている男の子と？
「一度だけ見せてもらったことがあるんだけど、なんでも初恋の相手なんだとか」
「匙先輩、ドンマイです」
「なんで慰められてるの!?」
「匙先輩、後でお菓子をプレゼントします」
「何か勘違いされてるけど、俺は会長に憧れを抱いているけど恋心は一切ない！」
あれ？そうなのん？匙先輩がソーナ会長に向ける目が他の人たちに向けるものと違うから、てっきりそうなんだと思ったんだけど。
「はぁ、良いからさっさと本題に移ろうぜ」
「あ、そうだった」
話がそれてしまったのをいち兄がもとに戻した。あのいち兄がだ。
「アスカ、お前何か失礼なことを考えたろ」
「気のせいじゃない。それよりいち兄は何か手がかりがあってそんなことをいってるんだよね」
「え？あ、それ…その…」
はぁ、当てもなくもしかして提案したのかな？まったくもう……。
「今どきあんな格好してる人は珍しいからね。こんな風に」

「「おぉ!!!」」

スマホに映ったＳＮＳの投稿を見せた。そこには怪しげな格好をした女子二人が映った写真があった。

「迷える子羊に恵みをー」

「恵みをーーーー!」

ああ、なんと言うか。幼馴染みがあんな風になっているなんて誰が想像できたかな?と言うか、唖然としてしまった。

「もう、ゼノヴィアが路銀を全部食べ物に使っちゃうからこうなっちゃったのよ!」

「うるさい!大体、この国が宗教に関心が無さすぎるんだ!」

うん、まあ日本って何を信じるのかは自由な国ですからね。キリスト教の人は少ないんじゃないかな?

『マスター、一応俺もキリスト教に属するんだが』

『あ、そう言えばジークはそうなるのか』

待てよ。英霊には時代とか関係ないんだから色々な宗教を持つ英霊もいるのかな。

『マスター、それより目の前の事が大事じゃないの?』

『そうだぞ。幼き我の言うとおりだ』

『まあまあ、落ち着いてよ。マスターだってそんなことは分かっているだろうからさ』

『そうだよ、マスターは賢いからわかってるんだよ』
おお、ギルと王さまがいっていることは正論のはずなのにエルキドゥとジャックが僕の事を庇ってくれた。なんと言うか嬉しいです！
「アスカ、あれに声をかけなきゃダメか？」
「いち兄、あれでも幼馴染みだから…ね？」
「…ドンマイです、二人とも」
「なんつうか、ドンマイ？」
ああ、世も末だよね。
「ねえ、二人ともちょっと良いかな？」
「え、アスカくん!?」
「な、なぜ貴様がここに」
「えっと、とりあえずあそこのお店に入ろうよ。奢るから。話を聞いてくれないかな？」
奢ると言う単語に反応した二人は首がもげるんじゃないかってくらいに縦に振っていた。
「う～ん、これこそがふるさとの味よね！」
「いや、ファーストフードがふるさとの味って…」
「すまないが、追加でこれも頼む」

「こいつらには遠慮って言葉がないのか」
「私でもここまで食べませんね」
「小猫ちゃんもこのくらいは普通じゃ…」
「イッセー先輩、余計なことを喋るともぎますよ」
「どこを!?」
　これはお金を余分に持ってきておいて正解だったかも。二人分の料金じゃすまないもん絶対。
「ふぅ、ご馳走さま。ごめんね、アスカくんも大変なのに」
「うーん、そうでもないかな?最近だと仕送り以外にも悪魔家業とか稼いでるし、それなりに余裕があるよ」
「ちなみに一回だけこいつの月の仕送りを見せてもらったことがある」
「…どれくらいだったんですか?」
「月に百万近く送られていた」
　いち兄、それは一応個人情報だからあまり公言しないでほしいかな?世の中最近物騒だからね。
「それで話と言うのは」
「聖剣の任務についてです」

「と言うのは？」
「イリナちゃんたちが奪還する聖剣〝エクスカリバー〟のうちの一本だけでも破壊させてくれないかな？または任務の手伝いをさせてほしい」
「それはあの騎士のためか」
　騎士って言うのはきっと木場先輩の事だろう。
「話はわかった。だが、私たちが所属する組織と貴様らが所属する組織は敵同士だ。協力がバレた時はどうするつもりだ」
「貴女たちの上司にバレたら悪魔ではなく赤龍帝の力を借りた、または英霊の力を借りたとでも言えば良いです」
「英霊…ですって？過去の英雄たちと繋がりでもあるの？」
　繋がりって言うのは当たっているかもしれない。なんせ名前に絆と言う単語が入っているんだから。
「僕の神器の名前は使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆。過去に英雄としてまたは反英雄、世界に守護者として死期を売り渡した英雄たちの力が使えるんだよ」
「な、それじゃあ主とかも…」
「いや、流石に神霊が高い人たちは無理だよ？」
　流石に神様とかは無理だよね？

『そうでもない。霊格を落とし人間の体へと憑依と言う形で英霊として存在する神もいる』
『そうなの？王さま？』
『それに神がダメなら我のような半神半人の英霊も無理になるぞ』
　ああ、そうか。英雄とかって人間とかもいるけど半分が神様の血を引く英雄も数多く存在するんだよね。
「それで提案のほうは受けてもらえますか」
「ああ、良いだろう。元々回収が難しかったら破壊してもよいと言う命令でもあったからな」
「ちょ、ちょっとゼノヴィア！良いの、そんな簡単に決めちゃって」
「イリナ、良く考えてみたまえ。相手は堕天使の幹部なんだ。私たち二人だけでは奪還どころか何もできないままやられてしまう可能性だってあるんだぞ」
　なんかイリナちゃんを論しているけど、大丈夫なのかな？
「でも、主に仕える私たちが悪魔と手を組んだと言うのがバレたら」
「それこそお前の幼馴染みである奴が提案した通りに赤龍帝、ドラゴンと英霊の力を借りたと言うことにすれば良いであろう」
「…はぁ。もうわかったわよ」

「話はまとまったみたいだね？それじゃあ、こっちももう一人の協力者を呼ばなきゃね」
　そう言っていち兄に電話を掛けてもらった。勿論、相手は…。
「まさか、君たちが了承するとは思わなかったよ」
「なに、私たちも自分の命は惜しいからな」
　木場先輩が来てくれたのはよかったけど、険悪なムードだ。
「君が私たち教会側の人間を恨む気持ちは分かる。だが、最初にもいった通りだ。あの計画は私たち自身でも触れることを禁止している。そして首謀者の男の名前も知れ渡っている」
「その男の名前は？」
「バルパー・ガリレイ。皆殺しの大司教だ」
　皆殺しの大司教、ね。通り名は格好いいけどやったことを知っている人間にとっては忌み嫌うものだろうね。
「さて、話はここまでだ。協力といったが具体的にはどうするんだ」
「とりあえずは二グループに別れて散策しましょう。もし、聖剣を持った人間が現れたら連絡することが約束です」
「わかった。それでは私はそこの男子三人と組もう。イリナは藤丸アスカと言ったか？そいつとそこの女子と組めば良いだろう」

バランス的にはそれでいいのかな？

「それじゃあ、明日から行動開始ってことで！」

こうして僕たちは秘密裏に同盟を結んだとさ。

19話

　イリナちゃんたちと協力関係になってから四日が過ぎた。いっこうに情報すらつかめない状況になっていた。
「イリナちゃん、盗まれたエクスカリバーってどんな物なの？」
「えっと、話によると盗まれたのは三つで一つは持ち主の速さを上げる天閃（エクスカリバー・ラピッドリィ）の聖剣よ」
「持ち主の速さをですか。強力ですね」
「ええ、そして二つ目が夢幻（エクスカリバー・ナイトメア）の聖剣よ。これは相手に幻を見せることができる聖剣よ」
「幻か。それって自力で抜け出すことは不可能なの？」
「ええ、強い精神力があれば大丈夫のはずよ。そして、最後が透明（エクスカリバー・トランスペアレンシー）の聖剣よ。これは自身の姿を消せるのよ」
　どれも厄介なものだけど、三つ同時には使うのは難しいから相手は恐らく一つの聖剣だけを今は持ち歩いているよね。
「…それより、問題は堕天使のほうです。一体何のために聖剣を盗んだんでしょう」
「たぶん、戦争の続きだと思うよ。塔城さん」

「どういうこと？」
「聖剣を盗めば確実に天使側とは戦争になる。そしてここに来た目的も」
「…アスカくんが言いたいことはわかりました。堕天使はここで何かするつもりなんですね。私たち悪魔とも戦争の続きをするために」
「なるほど、それなら妙に納得いくわね。でも、どうしてコカビエルだけがそんなことをしているのかよ」
　そう、そこが問題なのだ。これはきっと…。
「これはきっと、コカビエルが組織に関係なく一人で行っていることなんだよ」
　そう、これは堕天使側の組織『神の子を見張る者』全体でくわでたものではなくコカビエルだけが起こしたものなんだ。
「でも、ならどうして組織のトップであるアザゼルは止めに入らないの？」
「入らないんじゃなくて入れないのでないんですか？」
「そう、塔城さんの言うとおり。たぶん、アザゼルもこの事を認知できていないんだよ」
　仕事してるのかなって思うけどね。と言うか、部下の管理ぐらいはしっかりしてほしいよね。
「まあ、良いわ。次はあそこに向かいましょ」
　向かった先は小さなドーム状の建物がある場所だった。

「あれ？いち兄？」
「お、アスカ。お前たちもここに来たのか？」
「はい、ここ以外はあらかた探しましたから」
「イリナの方も収穫なしか」
「ええ、ゼノヴィアの方もないみたいね」
　偶然、合流した僕たちはそのまま進むことにした。
「ここにもいないとなると手詰まりだよ」
「ああ、そうだな。藤丸の言うとおりだぜ」
「ああ、流石にここまで見つからないとなると」
　その場の全員が悩んでいると僕はある気配を感じた。
「ｍｏｄｅセイバー！」
「ちょ、なんでこの速さについこれんの？」
「やっぱり、奇襲をしようとしていたか」
　こいつを知っている。
「クソ悪魔が調子に乗んな！」
「ちっ！」
　僕は一旦後ろに下がり、剣を構える。

「な、お前はフリード！」
「はーい、久しぶりですね。クソ悪魔ども」
「イッセーくん知ってるの？」
「ああ、少し前にアスカに倒されたはずなんだけど」
　そう、アルジェント先輩を助けるために僕一人で相手をしたあの腐れ神父だ。
「なんで貴女がその聖剣を持っているのよ！」
「おお、これすっか？シシシッ俺様はコカビエル様に選ばれたんだよ！聖剣使いとしてな！」
「くっ、速い！」
「僕も手伝うよ！」
「私たちも援護するぞ、イリナ！」
「ええ、そうねゼノヴィア！」
　となると剣士が僕を含めて四人になるのか。なら、僕は後方で援護しよう。
「なら、僕はいち兄と匙先輩と共に三人を援護します。塔城さんは、部長に連絡を！」
「わかりました」
　とりあえず、部長には連絡しとかないと。もしかしたら、情報が手にはいるかもしれないからね。

「ｃｈａｎｇｅアーチャー！」

僕は子ギルの能力を使う事にした。流石にスピードが速い相手に王さまとジャック、エルキドゥは相性が悪いからね。

「伸びろ、ライン！」

「匙先輩もドラゴン系の神器なんですね」

「ああ、と言ってもまだまだ使いなれていないけどな！」

あれはリアス部長から話を聞いたことがある。ブリトラと呼ばれたドラゴンの神器だ。魂をいくつかに分けられたからいくつかの種類があるって聞いた。

「ラインよ！」

「天の鎖！」

「ちょ、なんすかこの鎖と舌は！」

「いち兄、今のうちに木場先輩に！」

「おう、木場！受けとれ赤龍帝からの贈り物（ブーステッドギア・ギフト）！」

《Ｔｒａｎｓｆｅｒ》

僕と匙先輩でフリードの動きを塞ぎ、その間にいち兄は貯めていた力を木場先輩へと送る。

「ありがとう、イッセーくん！魔剣創造（ソード・バース）！」

木場先輩は地面に剣を指して、神器の力でフリードの周りを魔剣で覆い尽くした。
「ちっ、これはピンチってヤツじゃないでありますか!?」
「おとなしく、お縄についてもらおうか！」
「何をしている、フリード」
すると、建物の屋根の方で誰かの声が聞こえてきた。
「バルパーの旦那。助けてくださいよ。ちょっと、この舌と鎖が邪魔で動けないっすよ」
「ふ、なら私がお前に授けた因子を聖剣に集中させろ。そうすれば、斬り離せる。まあ、鎖の方も弾き返せるだろう」
「おお、さすが旦那。わかりやすい！」
すると聖剣に何かが集中して集まり、匙先輩の神器から伸びているラインは斬られ、僕の鎖も弾かれた。
「それにしても魔剣創造（ソード・バース）か。宿主によっては無類の魔剣を造れるそうだな」
月明かりに照らされた男を見や否やゼノヴィアさんとイリナちゃんたちが驚きの表情をしていた。
「バルパー・ガリレイ！やはり貴様が手引きをしていたのか！」
「あれが、バルパー・ガリレイ。聖剣計画の首謀者…！」
「バルパー・ガリレイ！」

すると、木場先輩がバルパーに向かってもうスピードで近づいた。
「おっとと、そうはさせちぇんよ。クソ悪魔！」
「邪魔だ！」
「木場先輩、ダメです！迂闊に近づいちゃ！」
「あらヨット！」
「がぁっ！」
木場先輩は弾き落とされ、いち兄が走って向かう。
「ｃｈａｎｇｅセイバー！」
「おお、ちみが相手かい？このクソちび！」
「はああ！」
「ちょ、なんでだからこの速さに追い付けるんだよ！」
フリードの持っている聖剣は天閃（エクスカリバー・ラピッドリィ）の聖剣だ。速いだけならまだ勝機はある。
「フリード、遊んでいる暇はないぞ」
「分かってますぜ、旦那！」
「な、逃がすか！」
「ほな、チャイなら！」
フリードは隠し持っていた閃光弾を使って何処かへと逃げていった。

「逃がすか！行くぞ、イリナ！」
「ちょ、待ってよ！」
「逃がすものか！」
「あ、木場先輩！」
　木場先輩もフリードたちの後を追うゼノヴィアさんとイリナちゃんの後に続いて走り去ってしまった。
「さて、どう説明しよう」
「そうね、ちゃんと説明してほしいわね。アスカ？」
　後ろを向くとご立腹とリアス部長とこちらもお怒り気味のソーナ会長がいた。
「あはは、はい」
　塔城さんは何処か申し訳ないような表情をしている。まあ。仕方ないよ。
「なるほど、貴方たちなりに考えてやったってことで良いのかしらアスカ」
「はい、勝手だと言うのはわかっています。でも、木場先輩を放って置いたら取り返しがつかないと思って」
「はぁ、アスカは少し人がよすぎるわね」
　呆れられてしまったのか。リアス部長は少し困った表情をしていた。
「まあ、それが貴方の良いところなのだけれどもね」

「うふふ、部長はアスカくんに甘いですわね」
「な、からかわないでちょうだい朱乃」
　ほ、こっちはなんとなったみたいだし、匙先輩の方を助けにいかないと。正直、みてるだけで辛い何故なら。
「ヒィー、やめてください会長！」
「ダメです、あと九十七回残っていますよ」
　そう、魔力で強化した手で制服のズボンの上からとはいえお尻を叩かれているのだ。
「なんか、匙の奴が怖がってた理由がわかる気がする」
「イッセー先輩と同じことを考えてました」
　うん、僕もそう思うよ。流石にあれは辛いよ。
「あ、あのソーナ会長…」
「なんでしょうか、アスカくん。今は取り込み中なのですが」
　こ、怖いです。普段からおとなしい人を怒らすのはやめといた方がいいですよ！って誰にいってるんだろう？
「その匙先輩のお仕置きは止めてもらえないでしょうか？」
「ふ、藤丸……」
　なんか見てるだけで罪悪感がすごいんです。

「どうしてですか？」
「えっと、匙先輩は僕が無理矢理頼んで協力してもらっていただけなので、そのお仕置きなら僕が代わりに受けるので匙先輩をお咎め無しにできないでしょうか」
「…それは本当ですか、匙」
「え、そ、それは」
　僕はアイコンタクトで気にしないでと言うと匙先輩はすまないと言ってきました。
「は、はい。本当です」
「…はぁ。わかりました、今回の件での貴方のお仕置きは無しにします」
　よ、よかったぁー。いち兄なんて少し涙目になってるよ。あれはきっと同情していたんだよね。
「それではアスカくんには来週から一週間生徒会の方を手伝ってもらいます。いいですか、リアス」
「ええ、それで良いわよ。アスカやイッセー、小猫も反省してるみたいだしね」
　ほっ、なんとかひと安心だ。でも、来週は生徒会の手伝いってことは依頼の方は今週残り少ない期間で頑張らないと。
「それじゃあ、私たちは一旦アスカの家で話し合いましょうか」
「では、こちらは学園の方で待っています」

「ええ、お願いね」

こうして、匙先輩をなんとかお仕置きから救い。リアス部長からは特に咎めはないという事で、一旦幕を閉じた。

２０話

一旦、僕の家に集まった僕と塔城さんといち兄はリアス部長と姫島副部長に今日までに到る経緯を話した。
「そう、聖剣計画の首謀者が黒幕に」
「はい、木場先輩はそのままバルパーを追って」
「一応、木場の奴には連絡しろと言っといたんですが…」
「ええ、あの子は今は復讐で頭が一杯でしょうね」
リアス部長の言う通りだ。木場先輩の頭は今は復讐のことでいっぱいいっぱいだ。
「それにしてもコカビエルはこの町で一体何をしようとしているのかしら」
「なに、前の大戦の続きだよ」
僕達は窓の方へと近より空へと目を向けるとそこには堕天使が居た。
「貴方はコカビエル！」
「ふっ、はじめましてだな。魔王サーゼクスの妹よ。その赤髪をみると忌々しいあいつを思い出させられるがな」
あれがコカビエル。聖書にも名前を残した堕天使の一人。

「それとこれは手土産だ！」
「うおっ！イリナ！」
「イリナちゃん！アルジェント先輩、治癒を！」
「は、はい。分かりました！」
　酷い怪我だ。それにイリナちゃんが持っていたはずの擬態（エクスカリバー・ミミック）の聖剣も無くなっている。
「貴方はさっき前の大戦の続きと言ったわね。また、あれほどまでの大きな戦争を起こそうというの！」
「ふっ、ああそうだ。あの戦いはあのまま戦っていれば我々の勝利は目前だったというのにアザゼルの奴は戦争はしないと言いやがった」
「そんな理由で…」
　戦争に固執しすぎている。ううん、違う。この場合は勝利への執着に近いのかもしれない。
「それにそろそろ俺様の計画も完遂する。そうすればまた大戦が始まる」
「そうはさせないわ！私の領土で好きにできると思わないでちょうだい！」
「ふ、ならば止めてみるがいい」
　そのままコカビエルは何処かへと転移した。

「アルジェント先輩、手伝います」
「え、でもアスカさんの神器に治癒の力は」
　治癒の力は無いけど、それに似た物を持っている人なら知っている。
『王さま、治癒の力を持つ神器を貸して下さい』
『確かに我の財宝の中には癒しや治癒といった概念を持つ宝具はある。しかし、あれ位の傷なら治癒の概念を持つ魔具を作った方が利口だ』
『ギルの持つ宝具は力が強いものが多いからね』
　確かにギルのでさえ力が結構強いのに大人である王さまの宝具はその倍は強力なのかな。
「使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆ｍｏｄｅキャスター」
　僕はゲートを開いて作った魔具でイリナちゃんの傷を癒した。
「あら、さすが魔術師の英雄の力ね」
「あはは、王さまは、ギルガメッシュは純粋な魔術師ではないですけどね」
　傷を癒しているとイリナちゃんは気がついたようだ。
「…ここ、は……？」
「気がついたんだね、イリナちゃん」
「アスカくん、私は……」

「コカビエルにやられたんだよ。今は僕とアルジェント先輩の神器で傷を癒した所だよ」

簡単に説明するとイリナちゃんはそのまま窓がある方向へと目を向ける。

「そう、なんだ。私、エクスカリバー奪われちゃったんだ…」

「ねぇ、イリナちゃん。木場先輩やゼノヴィアさんはどうしたの？」

「私が殿を申し出て、二人を逃がしたの」

やっぱり、ショックだよね。

「アスカ、今から私達は学園に向かうけど」

「コカビエルがそこに居るんですね」

「ええ、そしてそこには」

「絶対に木場の奴が来るはずだ」

そうか、木場先輩は逃げたんだよね。

「分かった。僕も行きます」

「私も、イッツ」

「ダメだよ、イリナちゃんはこのままここに居て。怪我だってまだ完全に治りきって無いのに」

いくら僕とアルジェント先輩の力で傷を癒したとはいえそれは完全にではない。表

面上は傷が塞がっていても中はまだ完全に塞がっていないのだから。
「それでも、よ。これは私達の任務でもあるの。途中で投げ出すなんてしたくはない」
「でも……」
「アスカ、連れて行きましょう」
「部長！」
「イッセー、アスカ、本人がここまで覚悟を決めているのよ。それを私達がとやかく言うのは彼女の覚悟を踏みにじるのと同じよ」
　僕はそのままイリナちゃんを見る。正確にはその瞳をだ。そこには覚悟の炎が灯っているように見えた。
「わかりました、リアス部長の言う通りにします。でも、危険だと思ったらティアを呼んで家に運ばせます」
「ええ、それで構わないわ」
「ところでリアス・グレモリーよ。貴様の兄であるサーゼクスには報告しなくていいのか」
「それなら、朱乃に任せてあるから平気よ」
　ティアが何時の間に部屋に居たのか分からないけど、誰一人としてそれを疑問に思うことはなかった。

「そうだ、イリナちゃんに何か武器を渡しとかないと」
最悪、自分の身は自分で守ってもらわないといけなくなる時が来るかもしれないからね。
『ギル、何かイリナちゃんに貸せる宝具ある？』
『そうですね、銘がない聖剣なら貸せますよ』
『じゃあ、それをちょっと借りるね』
ギルの許可も貰ったし早速渡さないと。
「イリナちゃん、ちょっと待って」
「え？」
「ｃｈａｎｇｅアーチャー。えーと、これかな」
僕はゲートを開いて覗き込みながら聖剣を探した。
「これでいいかな？はい、イリナちゃん」
「これって、聖剣？」
「そう、といっても銘がないやつだけどね」
僕はイリナちゃんに聖剣を渡す。
「それである程度は自分の身は守れるよ。でも、本当に危険になったらティアに向かいに来てもらって僕の家に運んでもらうからね」

「分かったわ。約束する」
　さて、早く僕達の学園に向かおう。コカビエルを止めるために。
「ソーナ、ごめんなさいね。結界を頼んでしまって」
「良いのですよ。それに魔王さまが来るまでの辛抱とでも思っていれば気が楽です」
　学園に向かうとソーナ会長と生徒会のメンバーが結界を張っていた。
「良い、今から相手するのは聖書にも名を残した堕天使の幹部よ。魔王さまが来るまで辛抱するつもりはないは、私達で止める覚悟で行くわよ！」
「「「「はい」」」」
　そのまま結界の中に入る。そこにはまるで王座に座っている王さまのごとく空中に浮かんでいる椅子に座ったコカビエルが居た。
「セラフォルーかサーゼクスが来るのか」
「お兄様が来るわ。でも、その前に私達で貴方を止めるわ！」
「ふっ、雑魚ほどよく吠える。まあ、良いだろう。バルパーの話ではエクスカリバーの統合までは時間がまだ掛かるみたいだからな。それまでに私のペットと遊んでいてもらおう！」
　二つの魔法陣が展開される。そしてそこに現れたのは首が三つある犬だった。
「まさか、ケルベロス！なんてものを人間界に呼び寄せるのかしら！」

「それって、地獄の番犬をしている犬の事ですか。部長！」
「いち兄、今はそんなことを聞いている場合じゃないよ！」
二匹のケルベロスは敵であるアスカ達を目で捉えると勢いよく襲いかかってきた。
「ギルじゃキツいね。ｃｈａｎｇｅアサシン！」
ジャックの力を使って、ケルベロスの足に斬りかかる。ナイフで素早く斬るも吹き飛ばされてしまう。
「があっ！このっ！」
「アスカくん、手を貸すわ！」
「…私も手伝います」
一匹に僕とイリナちゃんと塔城さん。もう一匹にはリアス部長といち兄と姫島副部長が相手していた。アルジェント先輩は後方で傷ついた仲間を癒すために待機してもらっていた。
「せいっ！今だ、イリナちゃん！」
「ええ！これでもくらいなさい！」
「…隙やりです！」
「がぁぁぁあああぁぁ！」
だが、咆哮によって三人は吹き飛ばされてしまう。

「くっ、ジャックの能力じゃ力不足だよね。相手が雌なら効果があるんだけど」
　そもそも、この生物に性別があるのか怪しい。
「なら、ｃｈａｎｇｅセイバー！」
『ジーク、ドラゴンじゃないけど力を貸して』
『勿論だ、マスター』
　剣をそのまま構えセイバーの身体能力をフルに活用してまずは足の間接部分を斬り付けた。
「はあ！」
「ぎゃあああぁぁ！」
「今度こそ今だ！」
　アスカの言葉に頷いた小猫とイリナはそのまま思うがままにケルベロスに攻撃し、なんとか倒したのであった。
「後はリアス部長の方だけど。あっちは苦戦しているね」
「はい、部長と副部長でなんとか戦っていますけど、イッセー先輩の倍加の時間が長すぎますね」
　だけど、助けに行こうにも下手に動けば三人を危険にさらすことになる。
『エルキドゥ、少し力を借りるよ』

『何かするのかい』
『あれを天の鎖で縛り付けるよ』
　地面と同化すれば、それなりの数の天の鎖を作れるはずだからね。
「ｃｈａｎｇｅランサー」
　足を地面と同化させ準備する。いち兄が離れた瞬間に鎖で縛り付ける。
「そこだ！」
　僕はタイミングよく地面から鎖を作り出し、遠距離で操作して縛り付ける。
「これはアスカの力ね」
「部長！今のうちに」
「ええ、そうね。朱乃やるわよ！」
　部長達もなんとかケルベロスを倒した。そして、僕達はコカビエルへと向き直る。
「さぁ、お前のペットはすべて倒したぞ！」
「ふ、ふはははははは！これで全部と誰がいった」
　すると先程の二匹を呼び出した魔法陣よりも大きな魔法陣が展開される。そこに現れたのは百匹近い数のケルベロスが現れた。
「先程まで貴様達が倒したケルベロスなど氷山の一角にすぎない」
「まさか、人工的にケルベロスを作ったとでもいうの！」

　これは予想外だよね。まさか、ここまで準備をしていたなんて。
「私達が手を貸した方が良さそうだな」
「ゼノヴィア！」
「部長、すいません」
「祐斗、これが終わったらお仕置きよ」
　おお、ヤバイんじゃないんですか。木場先輩。
「折角ですけど、そろそろエクスカリバーの統合が終わってしまうかもしれません。だから、ここは僕一人でケルベロス達を殲滅させます」
「ちょ、無理よ！いくらアスカくんでもあの数を一人でなんて」
「ｃｈａｎｇｅキャスター」
　僕は王さまの能力を使うことにした。
『王さま、宝具を使います』
『ふっ、良かろう。我の力を存分にあの鳥に見せつけてみろ』
　さて、王さまからの許可がとれたし早速使いますか！
「皆、僕の前には決して出ないで下さい」
「分かったわ。皆、アスカの後ろに移動するわよ」
　さて、皆も急いで僕の後ろに行ってくれたみたいだし……。

「覚悟は良いか！地獄の番犬！」
　僕は斧を地面に突き刺し、石板を開く。
「矢を構えよ、我(オレ)が許す。至高の財を以ってウルクの守りを見せるがいい！」
　ケルベロス達は本能で何かを感じたのか大群でアスカに襲いかかるが時すでに遅し。
何故ならアスカ達の後ろには古代ウルクの国とその兵士達が召喚されていたからだ。
「王の号砲(メラム・ティンギル)！」
「「ぎゃあああああぁぁぁぁ」」
「「がああああぁぁぁぁぁぁ」」
　百近くいたケルベロスは一瞬で死に絶え、そこには血の海が広がっていた。
「ほう、貴様のその力はウルクの神の力か」
「さあ、どうだろうね。それを教えるほどお人好しじゃないからね」
　正確には半神半人だけどね。
「まぁ、良いだろう。それよりも」
「遂に、遂に完成した！」
　その声がする方へと視線を向けるとそこには一本の剣が浮かんでいた。

２１話

「エクスカリバー、統合が完了した…」
　あれがエクスカリバー？形がなんだか歪だ。未完成だからなのか？
『やはりな。マスター、あれは約束された勝利の剣（エクスカリバー）などではない』
『え？』
『元々、約束された勝利の剣（エクスカリバー）はアーサー王が部下に命令して泉の貴婦人に返還したはずだ』
『そうだね。僕もそれが不思議でしかたなかった。どうやって天使がアヴァロンに入ってエクスカリバーを手にいれたのか』
　あれは正当な担い手ではない人物には扱えないし、貴婦人が渡すとは思えない。
『なら、答えは一つです。マスター、あれは約束された勝利の剣（エクスカリバー）の偽物』
　偽物か。なら、納得いく。そもそもエクスカリバーが折れて七つに分割してそれぞれに能力を与えるとか無理だもんね。
「なら、最初の通り。あれは破壊しないとね」
「その役目、僕に譲ってもらえないかな？」

木場先輩が僕の肩に手を置きながら前へと出た。
「バルパー・ガリレイ。僕は聖剣計画の生き残り、嫌、死んで悪魔になった身だ。お前に聞きたいことがある。どうして僕たちが殺されなくちゃならなかった！」
「ほう、あの計画の実験台（モルモット）の生き残りが悪魔になったのか。なに、私は昔から聖剣が好きだった。好きで、好きでたまらず研究ばかりしていた。その時、聖剣を扱うには因子が必要だと分かったが、私にはそれがなかった」
因子？そんなものが必要なのか？
『ジーク、君のグラムは因子が必要なの？』
『いいや、そんなものは必要ないはずだ。そもそも、聖剣は元々存在していて認められるか後付けからなったものの二つに分かれる。俺のその後者だ』
だよね。
『それに私たち英霊は時空なんて定まってない。あらゆる可能性の世界から誕生した』
『つまり、この世界では因子がなければ聖剣が扱えないってこと』
なるほど、ジャックとエルキドゥの説明で何となくは分かったと言うか、皆は僕たちがいる世界から生まれた英雄じゃないんだね。
『当たり前だ。英霊を管理する座に時間軸など存在しなければ世界すら定まっていない。いかなる世界や時代にも呼ばれるのだ』

驚きだね。皆がそれぞれ違う世界に存在した英雄たちだなんて。まあ、そんなことより目の前のことだよね。
「そしてそんな中因子が取り出せることが分かった。だから、貴様らから因子を抜き取った。用済みの貴様らなど価値がない。じゃから、殺したんだよ」
身勝手な。そんなことで木場先輩たちは殺されなくちゃならなかったのか！
「許せない。許せないぞ、バルパーっ！」
「おっと、くそ悪魔の相手は俺っちだぜっ！」
「ぐっ！」
木場先輩はバルパーに斬りかかるがフリードに阻まれてしまう。
「ｃｈａｎｇｅセイバー」
『ジーク、木場先輩を助けるよ』
『了解した、マスター』
鎧とマントに身を包み、木場先の援護へと回る。
「なんだい、くそちび悪魔も相手してくれるんですか？ギヒヒヒヒ、いいねいいね！」
「良くないよっ！」
今回は速さだけじゃない。なら、ここは慎重攻撃を仕掛けないと。
「藤丸、君はコカビエルの相手を頼む。あの騎士（ナイト）への援護は私がしよう」

「…わかりました。お願いします」
僕はそこをゼノヴィアさんに任せて僕はコカビエルのもとへと向かった。
木場ｓｉｄｅ
「はあ！」
「残念、それも幻でちゅよ！」
「クソ！」
僕はエクスカリバーを持ったフリードに挑むも統合されたエクスカリバー能力の前では歯が立たなかった。
「ほらほら、早く俺っチを見つけないと死んじゃうぜ」
「ぐっ」
こういうときにアスカくんの神器が羨ましく思う。戦況に合わせて攻撃方法が変えられる彼ならこの状況を打破できるかもしれない。
「なら、速さで勝てれば」
「オイオイ、忘れちまったのか？速さでもお前は俺っちには勝てないんですよ！くそ悪魔！」
騎士（ナイト）の能力を使っても勝てないなんて。
「くふふ、無様だな。まあ、所詮はあの計画の生き残り。でき損ないの貴様にはお似合い

か」
「ぐっ、バルパー……！」
「そうだ。冥土の土産に良いものを見せてやろう」
　バルパーが出したのはひし形の結晶のようなものだった。
「これは貴様らの計画で抜き取った因子の結晶だ。だか、これよりも上質な結晶を取り出せる今となっては不要なものだ。ほら、貴様にくれてやろう」
　投げられた結晶を僕は手に取った。
「…ごめん。ごめんよ。僕では君たちの仇を、エクスカリバーを壊せない。僕が弱いから」
　涙が結晶に落ちる。すると、その結晶が光だした。
「な、なんだ……!?」
　バルパーも慌てている。すると、放たれた光は何人かの人の形を成してきた。
『泣かないで、貴方は弱くなんかないわ』
『そうだよ。君は今までずっと僕たちの事を思っていてくれたじゃないか』
　それはかつて僕を逃がすために命を落とした同胞たちだった。
「どうして、あの時…僕だけを助けて」
『俺たちはお前に希望を見たからな』

「希望？」
『ええ、貴方はどんなときでも明るかった』
『君が勇気づけてくれた。そして僕たちにとってそれは希望だった』
　いくつもの人影が生まれてゆく。
「でも…」
『それに君は片時もなくあたしたちの事を思って泣いてくれていた』
『強くなろうとしてくれた』
「違う、僕は弱い。強くなんかない」
　首を降りながらも否定する。
『ううん、強くなった。だって、君には頼れる仲間たちと過ごして強くなっていったじゃないか』
『特にあの全ての英霊を従えるあの子と共に』
　僕は後輩であるアスカくんを思い出した。
「そうだ、僕は…アスカくんと、いや、グレモリー眷属の仲間と共に強くなっていたんだ」
『うふふ、やっと分かったね。それにこれからは私たちも一緒に戦うわ』
『だから、剣をとって』
　ああ、そうだ。僕は一人で戦っている訳じゃなかった。

『例え、神がいなくとも』
『君ならきっと成し遂げられる』
　だから、共に……。
「だから、共に強くなる。そしてこれが僕の新たな力だッ！」
　解る。皆が力を貸してくれる。
「禁手（バランスブレイカー）・双覇（ソード・オブ・ビトレイヤー）の聖魔剣」
　これが僕の新たなる剣。仲間との想いの剣だ!!
「オイオイ、ここに来てそんなチート設定は要らないんだよぉ！」
「はあ！」
「君は…」
「何、手助けに来た。君一人では厳しいだろ？」
「あはは、そうだね。それじゃあ、一夜限りの奇跡の共闘と行こうか！」
「ふふ、悪魔の癖に粋なことを。では、私も本気で行こう」
　彼女はそう言ってこことは別の空間にある剣を取り出した。
「行くぞ、デュランダル！」
「な、デュランダル…だと!?あれはまだ実用には至れてないはず」
「なに、私は天然でね。元々はデュランダルの使い手でエクスカリバーも兼用していた

のだよ」
　あはは、何とも頼もしいね。
「だから…今さらそんなチート設定は要らないんだよぉ！」
「ふん！」
　彼女の一振りでエクスカリバーにヒビが入ってしまった。
「ほう、壊すつもりだったが流石に伝説の聖剣とあって中々頑丈だな」
「だけど、それもここまでだ」
　僕の聖魔剣で今度こそ完璧に壊した。
「な、ちょっとちょっと伝説の聖剣がこんな簡単にしかもポットでのクソ剣なんかに負けるのかよ!?」
「終わりだ！」
「ガハッ、こんなの…ありか、よ」
　フリードを斬り、そのまま僕は空を見上げた。
「皆、やったよ。僕たちはエクスカリバーに勝てたんだ」
　木場ｓｉｄｅｅｎｄ

２２話

　木場先輩の方は決着がついたようだ。
「さて、残りはお前とバルパーだけだ。覚悟しろ！」
「下級悪魔ごときが意気がるな」
「な、何故だ。本来、聖と魔が混じり合うことはない。反発し合う力が一緒になるなど……まさかっ!?」
　なんだ、バルパーの様子が可笑しい。木場先輩の禁（バランス・ブレイカー）手を見てからなにやらぶつくさと言っている。
「そうか…そう言うことなのか！あの大戦で死んだのは魔王だけではなく、神も。グハッ！」
「「!?」」
　何をした？なぜ、コカビエルは仲間であるバルパーに光の槍を投げた。
「ふふふ、ふはははははは。流石はバルパーだ。その結論に至れたことは褒めてやろう。だが、貴様はすでに用済みだ」
「コ、カビ…え…、る」

「お前、仲間じゃなかったのか！」
「仲間？違うな、アイツは駒だ。俺の思い通りに動くな。まあ、ここまで来た以上役にはたたないがな」
　役にならないから殺したって言うのか…？そんな理由で……。
「まあ、良いだろう。さて、そろそろ終わりにしよう。サーゼクスが来た瞬間に目に写るのは貴様らの無様な死体だけだ！」
　コカビエルは光の槍を作り出して僕たちへと投げ飛ばす。
「く、ジークの状態だとさばききれない。ｃｈａｎｇｅランサー」
　エルキドゥの力を使おうとすると髪が翡翠色に、服がマントをそのまま被ったようなものになった。
『前から何となく思っていたんだけど……。僕って性別が女性の英霊の力を使うと性別が変わるんだね』
『ふん、何を今さら言っているのだ。サーヴァントの力をそのまま使っているのだ。性別が変わることくらいで取り乱すではない』
『まあ、体の作りが変わるとうまく扱えないからね』
『大丈夫だよ、お母さん。可愛いもん』
『気にすることはないとは言えないが諦めるしかないんじゃないのか？すまない、こん

なことしか言えなくて』
『まあ、ボクには性別はないけどね』
　なんてお気楽なんだ。この英霊たち……。
「行くよ」
　僕は手を地面に乗せ、飛んでくる光の槍を土から作った槍や剣などをぶつけて破壊していく。
「魔剣創造（ソード・バース）！」
「デュランダル！」
「私だってやれるのよ！」
「ドラゴン・ショット！」
「雷よ！」
「喰らいなさい！」
　木場先輩やゼノビアさんに一兄に姫島副部長、リアス部長もうまく光の槍を破壊していく。
「無駄なことを。ならば、これでどうだ」
　な、数を増やしやがった。
「死ねぇ！」

「まだまだ！」
　僕は皆に光の槍が当たらないように武器を作り出してはそれを光の槍に当て破壊していく。
「雷よ！」
「ふん、俺の邪魔をするか。バラキエルの力を宿しものよ」
「私をあの者と一緒にするなぁ！」
　バラキエル？確か神話ではコカビエルと同じくアザゼルと言われる堕天使の部下で幹部だったような。
「はぁ、はぁ…」
「ヤバイ…」
　姫島副部長の魔力が限界に来てるんだ。
「ふはははは。悪魔に落ちるとはな。まったく愉快な眷族を持っている。リアス・グレモリー、赤龍帝、聖剣計画の成れの果て、英霊使い。そして、バラキエルの娘！」
「なっ!?」
「マジかよ…」
「なんだと！」
　姫島副部長が堕天使の娘？でも、それならなぜ悪魔に？

「ふふ、リアス・グレモリー。貴様は兄であるサーゼクス同様ゲテモノ好きのようだな」
「くぅっ。兄の我らが魔王への暴言は許さない！何より私の下僕への冒涜は万死に値する！」
　そうだ。今はそんなことはどうでもいい。
「ならば、俺を倒してみろ！お前達の目の前にいる相手はお前らの宿敵なのだぞ。ここで倒さなければお前の程度の低さが分かるぞ。それにしても滑稽だな。今だに神がいると信じている者がいるとはな」
「どういう意味？」
「ほう、知らないのか？神もあの大戦で魔王ともども死んだのだよ！」
　神が死んだ？でも、それは聖書のなかでの神がってこと？
「そ、そんな…嘘、よ」
「主が死んでいるだと」
「そんなの……」
「ふ、ミカエルの奴も上手くやっている用だが、所詮は天使だ。神が扱うべき奇跡と言うシステムを完全に制御できるわけではない。故にバグが生まれる」
　なるほど、だからアルジェント先輩の神器は悪魔をも癒し、木場先輩の聖魔剣が生まれたのか。

「まさしく滑稽だな」
「ふざけるなよ……。堕天使」
「アスカ？」
　僕の怒りに呼応するかのように魔力があふれでる。
「これ以上、僕の仲間を、大切な人たちを悪くいってみろ」
「なにこれ」
「これはアスカ君の魔力なのか？」
「すごい力です」
「やべぇな。アスカの奴…」
「アスカ君、キレてる」
　溢れ出た魔力が地面を回りを破壊しいく。
「姫島副部長は姫島副部長だ。堕天使の娘だろうと知ったことか。ここにいるのは姫島朱乃と言う一人の人物で僕たちの仲間だ。それに神様が居なくなったって信仰続けている人たちがいる。何より、そんな信者たちを絶望しないように手を打ったミカエルは悪魔の僕からでもよく分かるお人好しだ！何より、我らが主であるリアス・グレモリーへの冒涜は許さない！」
「ふ、ならばどうする」

「ここでお前を倒す。ついでにこの校庭を中心とした魔法も壊す」
「ほう。気づいていたようだな。」
　コカビエルは驚いたような表情をしている。
『ふ、この程度の術式など我に掛かればいくら隠そうとも簡単に見つけることなどできる』
『まあ、破壊に関してはあの堕天使（カラス）を倒せば消えますしね』
『マスターが決めたことだ。付き合うのがサーヴァントの役目だ』
『マスター（お母さん）が思うようにやればいいよ』
『ボクの状態で禁手（バランス・ブレイカー）するといいよ』
　さあ、始めよう。本当の戦いを……。
「使い魔との絆（ボーンズ・サーヴァント）ｍｏｄｅ　Ｌａｎｃｅｒ（ランサー）　Ｅｒｕｋｉｄｕ（エルキドゥ）、禁手（バランス・ブレイカー）！」
　翡翠色の髪が踵まで伸び、服が大きくなる。そして何より力が溢れてくる。
「ほう、禁手（バランス・ブレイカー）か。良いぞ、これこそが戦」
「黙れ、堕ちた天使」
　僕は地面から無数の天の鎖（エルキドゥ）を作り、空中にいるコカビエルに巻き付ける。
「ふっ、こんなものでこの俺を拘束したつもり……!?な、何故だ！なぜほどけない！」
「無駄だよ。いくら堕ちたとはいえ元は天使であったお前にその鎖が簡単に壊せるわけ

ないだろ？」
　それにいくら堕天使とはいえ聖書にも名前を刻み、信仰されている神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）の幹部ならある程度の神聖があるはずたからな。
「そのまま串刺しにしてやるよ」
「俺を、舐めるなぁ！」
「!!」
　天の鎖を無理矢理壊した？いくら神聖が低いとはいえ天の鎖（エルキドゥ）を壊すなんて……。
「良くもこの俺を虚仮にしてくれたな」
「……」
「今度はこちらの番だ！」
「アスカだけにやらせるわけないでしょ！」
「邪魔だ！」
「リアス部長！」
　リアス部長の滅びの魔力を消し去り、光の槍をリアス部長に投げる。それを僕が同化した地面で盾を作り何とか止める。
「はあ！」
「デュランダルの力を食らえ！」

「小賢しい、蝿どもが！」
「すきあり、です」
「甘いわ！」
　光で剣を作り木場先輩とゼノビアの攻撃を受け止める。その隙を塔城さんが上から殴りかかろうとするが凄まじい力で三人とも吹き飛ばされてしまう。
「小猫ちゃん、今傷を癒しますね」
「よし、貯まったぜ！アスカ、受け取りやがれ！」
　すると一兄が僕の肩に触れる。
「赤龍帝の贈り物（ブースト・ギア・ギフト）」
『Ｔｒａｎｓｔｅｒ!!』
　これは力の譲渡？
「ありがとう、一兄。そろそろ終わりにしようか、コカビエル」
「ふ、終わりだと？ふざけるな！この俺は貴様らごときにやられるようならあの大戦で死んでいる！」
　最大規模の光の槍を作り出すコカビエル。だけど…ね。
『エルキドゥ、宝具使わせてもらうよ』
『ああ、良いよ。性能を競い合うんだね』

地面に手を乗せる。

「呼び起こすは星の息吹。人と共に歩もう、僕は。故に――」

無数の天の鎖が空へと伸びていき僕が跳躍すると僕を中心として集まりだして、一つの大きな光の槍に、天の鎖(エルキドゥ)へと変わる。

「な、なんなんだ…それはぁ!!」

「人よ、神を繋ぎとめよう(エヌマ・エリシュ)っ!」

コカビエルが投げた光の槍を破壊し、コカビエルはそれに驚き動けず宝具をまともに喰らったのであった。

「こんなところでええええええええええええ、俺様があああああああアアアアアアア!」

地面にめり込み、魔法陣ごと破壊した。

「終わったの?」

「どうなのかしら」

「アスカの奴が戻ってくれば」

「あれほどの威力の攻撃を受けて生きていられるか」

「無理だろうね」

「アスカ君、強かったんだね」

「当然、です」
「大丈夫でしょうか？」
　メンバーが心配するなか、煙が晴れていく。
「はぁ、はぁ、はぁ…」
「アスカ！」
　こちらへと向かってくる僕を見て、皆が駆け寄ってくる。

23話

フラフラになりながら僕は一歩ずつ仲間たちがいる場所へと歩いている。
「アスカっ」
「リアス部長」
皆が駆け寄ってくる。途中で躓いて倒れかけた僕をリアス部長が受け止めてくれた。
「アスカ、大丈夫か！」
「なんとかね、いち兄」
「無茶しすぎです」
「ごめんね、塔城さん」
「今、傷を塞ぎますね！」
「ありがとうございます、アルジェント先輩」
「大丈夫、アスカくん」
「大丈夫か？」
「うん、大丈夫だよ。イリナちゃん、ゼノヴィアさん」
「アスカ君…」

「決着、ついて良かったです。木場先輩」
「っ、ありがとう」
　かけよって声かけてくれる中で姫島副部長だけはすこし距離を開けていた。
「…姫島副部長」
「アスカくん、私は」
「大丈夫です。今はオカ研副部長でありグレモリー眷属の女王（クイーン）である姫島副部長として見てますから」
　僕がそういうと姫島副部長は涙を流しながら手を握ってくれた。
「ソーナに結界を解除しても大丈夫と伝えておかないと」
「コカビエルは気絶しているのか」
「うん。一応ランサーの能力で作った鎖で縛り付けてあるけど、引き渡したりするなら早くした方がいいかもね」
　リアス部長は姫島副部長にソーナ会長に言伝てを言い渡す。結界は解かれてソーナ会長たち生徒会メンバーがこちらへと向かってきた。
「アスカくん、大丈夫ですか!?」
「はい、なんとか。ソーナ会長たちも大丈夫ですか？結界の維持は大変だったと思うんですが」

激しい戦いだったから結界を張っていたソーナ会長たち生徒会メンバーもそれなりに疲れているはずだ。
「私と椿姫は大丈夫ですが匙を含めた他のメンバーは魔力の消費が激しいですね」
「そうですか」
匙先輩たちを見てみると疲れているのがよくわかる。僕も宝具を二回放っているからその余波とでも結界の維持に苦労したはずだ。
「ほう、まさかコカビエルが負けるとはな」
「「!?」」
声がした方へと一斉に向くと、そこには白い鎧を身に纏った誰かがいた。
「しかも赤龍帝ではなく英霊使いに負けるとはな」
「白龍皇！」
ソーナ会長の言葉に皆が臨戦態勢をとる。
「安心しろ、今日は戦いに来た訳じゃない。それにそこの英霊使いならともかくとしてそれ以外のメンバーでは俺には勝てないな。まあ、その英霊使いもその有り様では戦力としては皆無だが」
そのまま白龍皇はコカビエルとはぐれ神父フリードを担いで去ろうとする。
『無視か、白いの』

するといち兄の展開している赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）の緑の宝玉が光出すと同時に声を発した。
『起きていたか、赤いの』
お互いに赤と白と呼び会う。
『せっかく出会ったのにこの状況ではな』
『いいさ、いずれ戦う運命だ。こういうこともある』
赤い龍（ウエルシュ・ドラゴン）と白い龍（バニシング・ドラゴン）。この二体の龍は必ず争う運命にあるってティアが言っていった。というかこの二体のドラゴンたちってアーサー王の伝説にも出てくるんだよね。
『しかし、白いの。以前のような敵意が伝わってこないが？』
『赤いの、そちらも敵意が段違いに低いじゃないか』
『お互い、戦い以外の興味対象があるということか』
お互いに運命で決められた戦いよりも今の宿主たちの事に興味があるみたいだ。話を聞いている限りでは。
『そういうことだ。こちらはしばらく独自に楽しませてもらうよ。たまには悪くないだろう？また会おう、ドライグ』
『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』
もう、話すことはないのか。二体のドラゴンたちの声はそのまま聞こえなくなった。
「それじゃあ俺もここで失礼するよ。いずれ戦う宿敵くんに英霊使い君」

そのまま白龍皇は去っていった。
「これが木場先輩の禁手（バランス・ブレイカー）『双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）』、聖魔剣ですか」
「白と黒が混ざりあって綺麗だな」
「アスカくん、それにイッセーくん。僕は……」
木場先輩が何か言いたそうにしているけど、
「ま、細かいことは言いっこなしだ」
「そうですよ。木葉先輩の中では区切りがついたんですよね？聖剣のことも仲間のことも」
「なら、いいじゃねえか。こうしてまたオカルト研究部とグレモリー眷属の仲間として戻ってこれたんだからさ」
「うん」
憑き物がとれたような爽やかないつもの表情を見せてくれた木場先輩。そして三十分後に魔王様の加勢が到着して事件は一件落着なのだが……。
「やあ、赤龍帝に英霊使い」
「なんで、ここに!?」
数日後。オカ研の部室へと入るとそこにはゼノヴィアさんがいた。
「神がいないと知って破れかぶれ悪魔に転生したのさ。幸いなことに所有しているデュ

ランダルが凄いだけで私自身には特別な力があるわけではなかったから駒一つで転生できたわけだ。これからはこの学園の二年生として通うことになったわけだ。これからよろしくね、アスカくんにイッセーくん♪」
「いきなりかわいい声出すんじゃねえ」
「ふむ、イリナの真似をしたわけだが」
「イリナちゃんは（声は）可愛いですけど。ゼノヴィアさんの場合は（声は）凛として綺麗な方だと思うんですけど」
「う、うむ。そうか…その、なんだ。真顔でそんなことを言われると照れるな」
　何故か照れられてしまった。そしてリアス部長と塔城さんがいる方から冷たい視線を感じる。
「ところでイリナちゃんは」
「イリナなら私のエクスかリバーを含めた5本とバルパーの遺体をもって本部に帰らせた。神の不在を報告したのは私一人であったお陰でイリナは異端とされなかった」
「イリナに報告しないようにに言ったのか？」
「ああ、彼女の信仰心は私以上だ。主の不在を知ってもそれは変わらないだろう。だから、私だけが異端の烙印を押されることでなんとかなったと言うわけだ」
　ゼノヴィアさんの表情はどこか晴々としていた。

「しかし、この学園は恐ろしいな。まさか魔王の妹が二人も在籍していたとはな」
「二人？」
「一人は部長さんですから」
「この学園にいるのは生徒会長？」
　僕といち兄とアルジェント先輩は驚きの声をあげた。
「今回の事は堕天使の総督であるアザゼルから神側と悪魔側に真相が伝わってきたわ。エクスカリバーの強奪はコカビエルの独断によるもので、そのコカビエルも三竦みの関係を脅かして再び大戦を引き起こそうとした罪により『地獄の最下層（コキュートス）』で永久冷凍の刑が執行されたようだわ」
　落ち着いた僕たちに堕天使側からの報告を説明してくれたリアス部長。
　永久冷凍ってことは二度と外の世界には出れないってことらしい。
「本来なら白龍皇の介入によって事を収めるつもりだったみたいなのだけれどもその前にアスカが収めてしまったのよね。だから、近いうちに正式に天使側の代表と悪魔側の代表、それとアザゼルが集まる会議が開かれるそうよ。そこで謝罪と話したいことがあるらしいのだけれど、アザゼルが謝るかしら」
　リアス部長の話から察するに堕天使総督のアザゼルは豪胆な人物のようだ。
「一応、その会議には私たちも招待されているわ。事件に直接関わっているし解決もし

ているからね」
「マジですか…」
　そんな会議にお呼ばれされていいのかな？
「……白い龍は堕天使側なのか」
「ああ、そうだ。堕天使の総督であるアザゼルは神器（セイクリッド・ギア）の所有者を集めている。何を考えているのかはわからないがろくなことではないだろう。その中でも白い龍は『神の子を見張る者（グリゴリ）』の幹部を含めた強者たちのなかでも五番目か四番目に強いと聞く。更に完全な禁手状態。現段階ではライバルである君より遥かに強い」
　ゼノヴィアさんの言葉に聞いたいち兄は言葉をなくす。話終えるとゼノヴィアさんはアルジェント先輩へと向き直した。
「アーシア・アルジェント。私は君に謝らなければならい。主が居ないのであれば、救いも愛もなかったわけだ。君の気がこんなことで晴れるとは思わないが私を殴ってくれても構わない」
「……そんな、私はそんなことをしません。確かに最初は辛かったです。でも、今は大切なヒト、大切な方々と巡り会うことができたこの出会いと環境だけで、幸せなのです」
　その言葉にどこか救われたような表情をするゼノヴィアさん。そんな瞬間を見た僕はまるで聖女の慈しみを受け救われた咎人のような絵だった。

「さて、新しい仲間も増えたことだしここからまた活動を再開するわよ！」

こうして再び平穏な日々がやって来たのであった。

２４話

　コカビエルの野望を止めることに成功した僕達オカルト研究部は新しい仲間であるゼノヴィアさんを迎えて再び平穏な日常へと戻っていった。
「やあやあ、悪魔君。今日も召喚(喚び出し)に応じてくれてありがとうな」
「いえいえ、こちらとしても悪魔家業が繁盛して大助かりですから」
「そうか？なら今日はこのゲームで遊ぼうぜ」
「これはまた古いゲームですね」
　再び始まった悪魔家業も最近はとても繁盛している。契約の方もそれなりの数と交わす事が出来た。
『マスター、気付いていると思うけど彼が人間じゃないことに』
『まぁね。少し魔力を探れば分かるよね』
『では、何故なにもしない。幼き我も警戒している』
『今は、下手にこっちから手を出すのは危険なんです。只でさえコカビエルのせいで天使と堕天使、悪魔と堕天使は一触即発の緊張状態。このオジサンがもし天使側の人物だったらさらに危険な状態に、最悪戦争何て事も有り得るんですよ!?』

『確かにここでマスターが手を出せば良くない方向に事が進んでしまうかも可能性が出てくる』
『正しい判断かもしれないね』
『マスター、解体しないの？』
『もう少し様子を見てみようよ。ジャック、そう言うわけだから今回は解体は見送りね』
　子ギル達はどうやらこのオジサンの事を酷く警戒しているようだった。確かに持っている魔力の量も普通の人が持っている量を遥かに越えている。警戒していても損はない筈だ。
「お話はおわったかな？英霊使い君」
「ええ、今しが・・・え？」
　この人今なんて言った？
『マスター、すぐに距離をとれ!!』
　王様、言う通り一気にオジサンとの距離を開けた。そして神器を展開する。
「おお、いい反応だ。ヴァーリが興味を持つ訳だ」
「やっぱりオジサン、人間じゃなっかったんだね」
「あー気付いてやがったか。あぁ、俺は人間じゃねえ」
　そう言うとオジサンは立ち上がる。そして背中には6枚二対で鴉のような漆黒の羽

が現れていた。
「6枚二対の羽・・・もしかしてアザゼルッ。神の子を見張る者の総督」
「ほう、俺の事は知ってるみたいだな」
「堕天使がなんでここにいる」
「ん、なにこの街で三竦みの会談が行われるからな。だから、ここにいるわけだ。争いに来た訳じゃねぇんだから警戒するなよ」
「三竦みの会談？もしかしてリアス部長が話していた会議のことか」
「なんだ知っているみてぇじゃねか。ま、それを口実に仕事をサボっているだけなんだけどな」
　こんなのがトップで大丈夫なのか。さすが、多種族とのハーレム作ったが故に堕天した男だ。
「目的は理解した。じゃあ、なんで僕に接触してきた」
「なに、俺は戦争とかよりも趣味である神器研究に熱が入っていてな。お前さんの神器にも興味が湧いたのさ」
　飄々としていて怪しいが嘘を言っているようには見えなかった。
「冗談じゃないわ」
　アザゼルの元から帰ってきた僕はリアス部長に接触されたこと話した。

「アスカくん、なにもされませんでしたか」
「塔城さん、心配してくれてありがとう。大丈夫だよ、本人はどうやら会談口実にサボりに来ていただけみたいだから」
「だからと言って無断で私が任されている領地に侵入したあげく、私の可愛いアスカに近づくなんて！」
「ぶ、部長。落ち着いてください」
「イッセーさんの言う通りです。紅茶を飲んで落ち着きましょう」
怒るリアス部長を宥めるいち兄とアーシアさん。
「どうやら僕の神器に興味があったみたいですけど・・・」
「アザゼルは神器に造詣に深いと言う話を聞いたことがあるよ。有能な神器所有者を集めていると言う噂も聞くよ」
「有能な神器所有者―いち兄？・・・もしかしたらアーシアさんや木場先輩も狙われる可能性があるってことですか」
「おい、なんで俺の名前のあとに疑問符をつけたんだ」
「そうね。アーシアは希少な回復系神器。祐斗の聖魔剣。アスカの使い魔（ボーンズ・サーヴァント）との絆。そしてイッセーの赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手。誰が狙われても不思議ではないわね」
リアス部長の言う通りだ。今回は僕が接触されたけど、次は誰が狙われるかは分から

ない以上気を付けないと。
「あちらの動きが分からない以上、こちらも下手に動けないわ。しかも相手は堕天使の総督。不用意に接することが出来ないわね」
部長は考え込む。これ以上関係が崩れるのは両者にとって損にしかならないし勝手なことをする訳にはいかないのだ。
部長はその辺りに厳しいのはアーシアさん救出前を見ていれば分かることだ。
「アザゼルは昔から、ああいう男だよ。リアス」
すると、聞こえることのない男の人の声がした。僕は聞こえてきた声には聞き覚えがあった。声が発せられた方向へと目を向ける。
「お、お、お、お兄様！」
リアス部長はあまりの驚きに勢いよく立ち上がった。
そこにいたのはリアス部長のお兄様であり四大魔王の一角にしてルシファーの称号を持つ『サーゼクス・ルシファー』様だった。
「先日コカビエルのようなことはしないよ、アザゼルは。今回みたいな悪戯はするだろうけどね。しかし、総督殿は予定より早い来日だな」
どうやら口調から察するとサーザクス様とアザゼルはそれなりに良好な関係のようだ。勿論、それは個人的なものなのだろうけど。

そして後ろには銀色の髪にメイド服に身を包んでいる女性はグレイフィアさん。魔王様の女王（クイーン）を務めている方でもある。
「寛いでくれたまえ。今日はプライデートで来ているんだ」
僕達に楽にするように言ってくれた。
「やあ、我が妹よ。しかし、この部屋は殺風景だ。年頃の娘達が集まるのに魔法陣だらけというのはどうだろうか」
「お兄様、ど、どうしてここへ」
「何を言ってるんだ。近日授業参観が行われるのだろ。わたしも参加しようとおもってね。ぜひとも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」
あー、そう言えばそろそろ授業参観が行われるはずうだったなぁ。サーゼクス様って意外と妹思いの人なんだな。
「グ、グレイフィアね。お兄様に伝えたのは」
本人はどうやらその事を隠していたようだ。
「はい。学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを任されている私の元に届きます。サーゼクス様の女王でもありますから主へも報告いたします」
「報告を受けた私は魔王職が激務であろうと休暇を入れてでも妹の授業参観に参加したかったのだよ。安心しんしなさい。父上もお越しになられる」

へぇ、お父さんも来るんだ。リアス部長はそうとう愛されているようだ。でも、リアス部長はあまり嬉しそうではないようだ。
「そ、そうではありません！お兄様は魔王なのですよ？それなのに仕事をほっぽり出すなんて！魔王がいち悪魔を特別視されてはいけません！」
どうやらリアス部長はいくら肉親とはいえ魔王様であるサーゼクス様が自分を特別視することをよしとしないようだ。
あれ、でも・・・・・・。
「一つ質問してもいいですか？魔王様」
「なにかな、アスカ君」
「授業参観に参加することと他にも目的があるんじゃないんですか？例えば三竦みの会談をこの学園で行うから下見を兼ねているとか」
「これは驚いた。アスカ君、気づいていたのかな」
「いいえ。でも、可能性としてはあり得ることだと思いました。現場となったのはこの学園です。いくら元通りになっているとはいえ、堕天使側にコカビエルが仕掛けていた魔法の痕跡が残っているこの場所なら証拠としても成り立ちますから」
サーゼクス様やリアス部長たちは終始驚愕したような表情をしていた。
「リアス、とても優秀な眷属を迎えることが出来たようだね」

「はい、私も嬉しく思います」
「それでどうなんでしょうか？」
「ああ。アスカ君の言う通り今回の会談はこの学園で行われることが決まってね。下見も兼ねているんだ」
　予想は当たっていたようだ。これならいくら魔王様の部下のヒトの中に反対していたヒトがいても納得する理由が生まれるからね。
「さてこれ以上難しい話はここでしても仕方ない。うーむ、しかし、人間界に来たとはいえ夜中だ。こんな時間まで空いている宿泊施設はあるのだろうか」
　確かにこんな時間に空いている宿泊施設はそうそうない。あったとしてもそれはラブホテルくらいの筈だ。
「なら、僕に家に来ますか？」
「おや、いいのかな。ご両親に迷惑をかけてしまうのではないかな」
「大丈夫ですよ。両親は海外に行っていて家には僕とティアとリアス部長だけですから」
「そうか、ではここはアスカ君のご厚意に甘えることにしよう」
「アスカ、大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ。部屋も余っていますし、迷惑とかじゃないですから」

心配そうな申し訳ないような表情で僕に問いかけてくるリアス部長。
「ティアにも説明しておきますから。それにサーゼクス様とは一度雑談をしてみたいと思っていましたから」
「そう・・・、アスカがいいなら良いのだけど」
「では、案内しますね」
「ああ、よろしく頼む」
「一晩だけですが主共々お世話になります」
こうして僕の家に魔王サーゼクス様とグレイフィアさんをまねくことになった。